

騎士（キチ）王

ひつまぶし。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

獅子上に我が王と呼ばれたい人生だった――。

選定の剣をアルトリアが抜かず、別のアーサー王がいて、アルトリアに我が王と言わせただけのクソ小説でございます。

目次

12	親子	133
11	王の妃	121
10	平穩	107
09	槍の光	92
08	苦難の道	78
07	災難	61
06	クーデター	48
05	王として	38
04	湖の誤算	27
03	集う騎士	17
02	堕ちる女	9
01	抜いた男	1

13	姉妹	149
14	取り合い	163
15	断罪	179
16	変化	196
17	憤慨	215
18	縁談	230
19	円卓	248
20	新人	265
21	父子	289
	自己満足祈祷番外編「キャストリアがやってきた！」	308

01 抜いた男

——今日が遂に、その日だ。今までの日々はこの日の為に。

目の前にあるのは選定の剣。人を王足らしめんとする王を選ぶ至高の剣。

私は、王になる為に生まれてきた。付き人のマーリンもそう言い、ケイと共に私を鍛えてきた。

騎士として、王として。旅をして世界を見た。

何度、歯痒い思いをしただろう。助けられる命が消えるのを。助けた命が消えるのを。全ては王がいないことで生まれる災害をいくつ見てきたのだろう。

もうそんな日はおしまいだ。

今日でアルトリアは終わり。今日から私は民に求められる王として生まれ変わる。

覚悟はできた。悩んだ時もあったが、全ては民を救うためだ。私がどうなろうとも関係ない。

——さあ、選定の剣よ。我に、力を——。

「おつとごめんよ」

スポン、と。今まで王となれる人間でなければ抜けなかつた選定の剣があつけなく抜けた。

私の手ではなく横から伸びてきた手にだ。

えっ。

「えっ」

思考が追い付かない。何が起きた。

伸びてきた手の持ち主を見れば、男がいた。この辺ではあまり見掛けない黒い髪の毛をしている男だ。

あつけなく抜かれた選定の剣を持つ彼は、しげしげと剣を目を細めて眺めている。

そして、幼子が見れば泣き叫ぶような凶悪にいやらしいほどに顔を歪めて嗤う。

彼は、背後を見る。私も釣られて見る。この場に集まっている民衆もその視線に釣ら

れてある場所を皆で見ることになる。

そこにはガラの悪い男共がいた。向けられた視線にたじろいでいるようだ。

彼等に共通するのは、状態のよくない剣を持っていること。賊だと言われれば納得する出で立ちをしている。

必死に剣を背中に隠しているが、体の小さい者は隠れていない。何か悪だくみをしている、と白状しているようなものだ。

「ふひっ」

その声は誰からか。その場にいる者が声を発した者を見た。

選定の剣を抜いた男だった。選定の剣を舐めんばかりの様子で気味の悪い笑い声を静かに出している。

そして、飛び出した。普通の人間では出せないような飛び上がり。真つすぐに賊に向かって跳んだのだ。

「オラア！ さつきはよくも追い掛け回してくれたなオラアアアン！ →」

阿鼻叫喚。真つすぐに賊に向かった男は選定の剣を振るつて賊を襲い始めた。

賊の悲鳴が聞こえる。賊が逃げ惑い始める。その賊を追い掛ける男。

反撃する賊もいたようだが、赤子の手をひねるように男は反撃をもともしない様子で賊を斬り捨て始めた。

前触れはあつたのだから、民衆からしたら堪ったものではないだろう。すぐその場から逃げようと動き始めていた。

すると、マーリンが悲痛な叫びを上げた。

今度は何だ、と目まぐるしく変化する状況にまたも思考を奪われる。

何かが、目に入った。太陽に照らされて空に何か舞っているのが見えた。

それは、折れた選定の剣だった。

……目の錯覚だろうか。目を擦ってみる。

もう一度見てみる。

折れた選定の剣だった。

見間違いではなかったようだ。

折れた剣先が地面に突き刺さるまでがとても時間の流れが遅く感じた。

折った当の本人と言えば。残った柄だけを持って逆に賊に追い掛け回されている。

何だこのカオス。

魔術師マーリンは激怒していた。

自分が新しい王を擁立させるためにしてきたことが水の泡にされたのだから。

元々、選定の剣はアルトリアという少女しか抜けないように細工がされていた。

出来レースもいいところだが、選定の剣を抜いた者は王となる噂を流せばそれだけ抜いたアルトリアが王として認められる。その算段もついていたのに。

どこの馬の骨かもわからぬ雑草に全て台無しにされたことに怒りを覚えた。

選定の剣を折られ、新しい王の誕生を邪魔したクソ野郎は死よりも惨い目に遭わせてやる。

そう胸に秘めながら選定の剣を失って素手で賊を薙ぎ倒した男に近付く。

——さて、ここで魔術師マーリンが選定の剣に施した仕掛けを見てみよう。

まずは王の証を掲げるに足らん者。これは何か大きなことを成し遂げた者の血筋をその身に宿していること。王族の血族であることが条件。

次に、幻想の力を身に宿していること。アルトリアはウェールズの赤き竜の証、魔力を生み出す機関を宿していた。

最後に、運命に抗えるだけの力、覚悟を持つこと。それを得るためにマーリンはアルトリアに旅をさせ、覚悟を決めさせた。

つまり、である。八百長の選定の剣を抜いたということは抜いた男にもその資格を持つに値する者であることになる。

その答えは、男の傍で王に仕える従者の如く跪いているマーリンの姿でおわかりであろう。

マーリン、三步で即落ちの瞬間である。

魔術師マーリンは歓喜していた。

新たな王になる定めだったアルトリアなんて目ではないほどの王になる才能を秘めた男に出会えたことを。

従者として忠誠の証を見せて取り入ろうとする情けない真似をはしたなく行えるほど喜んでいた。

それを見つめるアルトリア。亭主を寝取られた妻の如く少なからずのショックを受けた様子でマーリンを見つめていた。その瞳には、光は映っていないかった。

だが、魔術師マーリンは気にしない。

今は犬のように尻尾を振って新しい王になるべき男に仕える姿勢を見せるのだ。

「我が王よ。この魔術師マーリン、我が王に仕えさせていただきたく——」

だが、現実はそんなに甘くない。

恍惚とした表情のまま、顔を上げて男に言葉を投げ掛ければ、返答は言葉ではなく賊の血で汚れた靴底であつた。

特に何の対策もしていなかつたクソ貧弱魔術師マーリンは顔面に蹴りをモロに食らう。

魔術は最強でも、肉体面ではクソ雑魚のマーリンでは痛みには耐えられるだけの力はない。かつた。

薄れる意識の中、マーリンは確かに聞いた。敬愛なる王の自分に初めて投げ掛けられる言葉を。

「エロ可愛い女の子が魔術師だろうか常識的に考えて」

かしまりました——と返答もできぬまま賊の血の海に沈むマーリンであつた。

痛いほど静かになつたその場の空気。マーリンを蹴り倒した男は、折れた選定の剣の残つた部分を紐で括り付け、腰にぶら下げる。

そして、アルトリアと空気だったケイが見ている中、堂々と追い剥ぎを始めるのであった――。

02 墮ちる女

魔術師マーリンは苦悩した。

我が王——新たな王である男に仕えるためにどうやったら女になれるのかを。

死んだ目でマーリンを見つめるアルトリアなど、最早眼中にない。

なお、王になれなかつたアルトリアを見てマーリンと契約していたユーザー王は少し前のマーリンよりも激怒していた。

選定の剣を盗んだ不屈き者を捕らえるか殺せ——と。

だが、それでも選定の剣を抜いたのは事実。民衆は新たに選定の剣を抜いた男こそが真の王であり、救世主となるだろうことを期待していた。

こうして生まれたのは更なる混沌。民衆とユースー王の対立である。ユースー王の配下の一部もユースー王を王と認めない動きが見られ、大粛清にも似た現象が今にも起きそうであった。

そして誰もが、選定の剣を抜いた男を探す。嘘も混じれば、本当のことも混じる。新たな旅に出ることになったアルトリア一行。マーリン、義兄のケイ。ケイだけは複雑そうにすっかり様子が変わったマーリンを見ていた。

魔術師はクソ。そう思わせてくれたマーリンはド畜生の名を欲しいままにしていたが、今ではド畜生というよりは畜生である。マイルドマーリンに戸惑っている様子だ。本気で性転換を考える変態を可哀想な目で見ることだけが彼にできることであり、今は選定の剣を抜いたあの日から目が死んでいるアルトリアのフォローに走るのだった。大好きな食事モソモソと食べるアルトリアはもう駄目かもしれない。余命宣告された患者の家族の如く、涙を流さんばかりのケイ。違う意味でこの旅の一人は終わっていた。

今は、有力な情報である山岳地帯の目撃情報を基に向かう三人。しかし、ここはブリテンでも有数の危険地帯。魔獣が蔓延り、危険な幻獣までもが潜んでいると言われる禁忌の場所なのだ。

現に、どこからか聞こえる魔獣の咆哮。そして地鳴り。

まるで縄張り争いをしてるように轟音があちらこちらから聞こえてくるのだ。時々、変な音も混じっている。

急に走り出すマーリン。体力クソ雑魚の彼はすぐに息が上がり、飛ぶ事にシフトする。

ケイは慌てて死んだ目で歩くアルトリアの手を引いてマーリンを追い掛ける。

その先で、妙な光景を目にする。人よりも大きく、建物よりも大きい魔猪が空を舞っているのだ。お手玉をされるように飛んでは落ちるを繰り返す奇妙な光景だった。

それを見てケイは変な音の正体は魔獣の咆哮ではなく、悲痛な叫びであることに気付いた。涙を誘うような悲鳴、魔獣の口からそれを聞くとは思わなかったとケイは思う。

つまり、地鳴りは魔獣が踏み鳴らす音ではない。魔猪が空から落ちてきて地面に激突した音なのだ。

全てを理解した時、マーリンがいきなり駆け出したのも納得できる。

だが、こんなことができるような奴がいるところに行くのは得策なのだろうか。この場に留まってもマーリンがいなければ餌にされる。

故に、ついて行くしか方法はないのだ。

近付く度に大きくなる音に恐々としながらマーリンを追うケイとアルトリアであった。

この男が、新たな王。どう見ても野蛮な男にしか見えない。

マーリンは主人を見つけた忠犬のように喜んで。貴様、あの時の私に仕えて見守る発言はどうなった。殺すぞ。

どんどん自分がやさぐれていくのがわかる。自分の中にこんな暗い部分があるなんて思いもしなかった。

男が仕留めたであろう、巨大な魔猪は見事に調理されている。

折れた選定の剣の残った刃で肉を切り分けて食べている。脂が滴つてとても美味しそうだ。思わず涎が出そうだ。

あの時に見た時よりも服が少しボロボロになっている。どれほどこの危険地帯にいたのだろうか。

剥き出しの上半身の裸体が素晴らしい。あれぞ、鍛えられた真の男の肉体だろう。

大きな傷は見えない。小さな傷は多い。

馬鹿な。この魔猪が蔓延る場所では名のある騎士でも一人で生き残る事は不可能のはず……。

この男、見た目に反して凄まじい実力の持ち主なのか？

裸足でマーリンの顔を踏んでいるのを見るとどうしてもそうは思えないが。
というかマーリン、顔が気持ち悪いぞ。

「我が王よ」

「俺は王様じゃねーっての」

ムシャムシャとこちらまで聞こえてくる咀嚼音。分厚い肉を噛み千切る音が食欲をそそってきて我慢できない。

すみませんが。そのお肉を私にもくくださいませんか。

「おいアル」

ケイ、あんなのを見せられたら誰だつて食べたくなります。

見てください。害獣にも劣る畜生があんなにも美味しそうな食材になるのですよ。

食わねば損というもの。

「待て待て。アル、お前は何を言っているんだ」

というわけでございます。

「いや、あげるのはいいんだが……食べるのか？」

魔猪の二頭や三頭、容易いものです。

何か悩む彼はすぐに行動に移す。腰にぶら下げた選定の剣の残骸を握り、魔猪に振るう。

気が付いたら大きな魔猪は半分にされ、残る半分は食べやすいサイズにカットされていた。凄まじい剣技に目を剥いた。ケイも息をのんでいるようだ。

マーリンは感動して気持ち悪いほど涙を流している。喜びのあまり、我が王ううううとか叫んでいる。

どこからか取り出した男のフォークを受け取り、肉を口に運ぶ。

舌で味わうように転がせば、脂が舌の上で踊るのがわかる。今まで食べてきた肉より

も美味で過去が思い浮かんでくる。

あれは食事ではない。ただの豚の餌だ。

これだ。これこそが人間の本当に食べるべきものなのだ。

涙が溢れる。美味しさのあまり、歓喜による涙が溢れては流れる。

「うええええ。なんで泣いてんのこの子……」

うぐつ。この肉は、美味しすぎて堪りません。おかわりをいただけますか。

「馬鹿な、もう肉がないだと……!?!」

ケイの声が聞こえる。口に運んでたら全部肉が消えていた。

おかわりをねだれば、男は何とも言えない顔で肉を切り分けてくれる。

ふむ。やはりこの男、この御仁は素晴らしい御方だ。美味しいご飯をくれるのだから。

王になれなくとも王の仕事に近いことをすればいい。

この御仁を王として、私は従者として支えながら民衆を助ける道もいいかもしれないな

い。

ほら。どうせ私は選定の剣を抜けなかったクソ雑魚騎士ですから（死んだ目）

03 集う騎士

我らが王、アーサー王。

名前がないという選定の剣を抜いた男に私たちが名を与えた。

元々、アルトリアが王になる為に新しい名前として考えていたのがアーサー。それをそのまま我らが王に献上したのだ。

説得には骨が折れたが、基本的には好きに動いてもいい条件で王になる事を決意してもらった。

マーリンが言うには、王になる覚悟がなくても運命に抗えるだけの大きな力を秘めているからこそ選定の剣が抜けたのだというわけだが。

つまり、アーサー王は近い未来で大きなことを為す。王にならずとも、それはできる。それでも王になってもらったのは我らのわがままだ。今の世、人々には希望の旗が必

要だ。アーサー王にはそんな希望の象徴になっていただくのだ。

というわけでこれから王の即位式だ。

その前にあのクソ親父を王座から引き摺り下ろして掃除をせねば。

クーデタータイムです！（集中線）

まずはマーリンの言い付け通り、各地を回ってアーサー王の宣伝をする。

マーリンがノリノリで口上を述べてくれ、魔術を使って人の心に付け入るように訴えかける。

そうやって扇動をし、人手を増やしてクーデターを引き起こす。

流石人間のクズのマーリン。嫌われるようなことを考えたり行動に移すことには長けている。

しかも折れた選定の剣は情報を操作して王座を譲らないユーザー王への怒りで折れたことにしている。

こう言えば、民衆はユーザー王に怒りを募らせる。さつさと王座を譲らないから王の象徴足る選定の剣が折れたのだと叫ぶのだ。

服装を新たに、我らは各地を回る。害獣を狩り、蛮族を狩り、賊を懲らしめる。

マーリンの魔術の力で枯れた土地に回復の力を与え、各地を癒す。

前に旅をしていた時はあれほどマーリンは魔術を使わなかったのにアーサー王がお願いしたら尻尾を振って喜んで魔術を使う。

何だこれは。マーリン死ねばいいのに。

アーサー王の一番の従者は私なのだぞ！

選定の剣が抜かれたことは噂になっている。民衆の中では知らぬ者はいないほど広がっている。

真の王たるアーサー王の旗の下に！ と宣伝しているおかげか、我らが陣営に参加をしないと騎士が集まる。

無論、騎士だけではなく民衆もだ。

本当であれば素早くクーデターを成功させてアーサー王を王座に納めたいが、焦りは禁物。

頭の良いマーリンはアーサー王の為に慣れない智略を張り巡らせる。

ユーサー王を失脚させるためにできることを行い、王の寵愛を得ようとしている変態野郎。

男色など流行らぬ。襲おうとすればマーリンのマーリン（）を斬り飛ばしてやる。

ぐぬう。いくら女が騎士になることを認めない世とはいえ、こんな兜で顔を隠すのは些か抵抗がある。

視界は狭まるし、何よりも我が王のキメ顔がよく見れないではないか。民衆に見せるエイギョウスマイル？ とやらは素晴らしい。マーリン、そこだけは褒めてやる。

我が王は似合わないことをして鬱憤が溜まれば、害獣駆除や魔獣駆除に精を出す。とても王とは思えない顔で暴れるのも素晴らしい。男らしい荒々しさがあがりながら、凜々しさを混ぜたような混沌とした表情が良いのだ。

マーリンと同意見なのは腹が立つが。

しかし、悩みの種もある。

旅の途中、我が王が武器を駄目にするのだ。

我が王の力に耐えられず、碎ける剣や槍。選定の剣を使うも、実力を発揮できていないようだった。

本当であれば我が王が即位した時に献上する予定だったが、マーリンは計画を前倒しにするようだった。

王が持つべき人々の願いの結晶、選定の剣を超える約束された勝利をもたらす幻想の剣。

銘を、エクスカリバー。我が王に献上するに相応しい剣である。

「我が王、こちらを」

「おう、ありがとう」

ゲシツと食事を跪いて渡すマーリンを蹴るアーサー王。

もうこの光景は見慣れた。我が王は気持ち悪いマーリンは見たくないとボヤいていた。

男に対してまるで雌のように盛る男。我が王も苦勞をなさる。

「我が王、こちらをどうぞ」

「おう、ありがとう」

反対に、私は勞うように頭を軽くポンポンしてくれるのだ。

これだけで心が満たされる。ちよつとしたことをしても褒めてもらえるのだ。

我が王に仕える喜びはまさにそこにある。

マーリン以外は小さなことでも勞う。王らしくない振る舞いは我が王にとっての優しさ、王の器とも言えるものだろう。

身近にある王だからこそ、民衆も支持する。恐らくはそういうことだと思う。

最初は四人の旅。我が王、私、ケイ、マーリン。

今では一つの騎士団だ。我が王に賛同し、身を捧げる覚悟の騎士が仲間に加わり、各地を回っているのだ。

中でも、ガウエインという騎士は特別な力を持っている。

日がある時は我が王に並ぶほどの力を発揮する。最近では専ら、我が王とガウエインがよく模擬戦闘をしている。

ガウエインはいい汗掻いたと汗にまみれた手で我が王と握手をする。我が王は回数を重ねる度に汗はあまり流さないようになる。

一戦を交える度に強くなっている、とガウエインは語る。ガウエインもまた、力に耐えられるだけの武器がないようで、よく騎士の剣を折っている。

あと、なんかこのパワー自慢ゴリラみたいなのは私の甥っ子らしい。

思わず目が点になった。ガウエインによれば、私の姉のモルガンの息子だと。その割には年がおかしい気がする。

「叔母上。それは全てブリテンの環境のせいだ、と母上は仰っておられます」

なるほど。それは確かにそうだ。

こんな魔境だ。何が起きてもおかしくない。

代表的なのが我が王。天然の王の才能を秘めた類稀な人間が生まれるのだから。つまり、ブリテンが悪いのだ。

「もう少ししたら我が弟のアグラヴエインもこちらに合流するそうです。頭の良い奴なのでアーサー王のお力になれるかと」

「つまりは軍師に向いていると」

これでマーリンの立場がどんどん無くなる。いいぞ、もつとやれ。

「もう一人の弟のガヘリスもアーサー王の付き人としてやれているようで安心ですよ」

「ああ、アイツは時々アーサーと暴走はするが基本的には止めてくれるから俺としては助かっている。気が付いたら暴走しているからな、アイツは」

頭が痛そうに抑えるケイ。

「王の才能には誰よりも恵まれているが、勤められるかと聞かれればそれはまた別問題

だ。今は即位までの問題を片付けないとならんが、王になった後も色々考えにやならんぞ」

後回しにしているが、我が王の王としての仕事をどうするべきかをケイは悩んでいる。

確かに、我が王は自由奔放だ。最初も王にはなりたくないと思っただけで逃げ出したこともあったのだから。

食べ物で釣っても、権力で釣っても反応は良くなかった。女で釣れば悩みに悩んで最終的に断った経緯はあるが、それを知っているのは最初のメンバーだけだ。

我が王との秘密の隠し事。うふふ。そそのものがありますね。

「ガウエイン、お前さんにもとことん付き合ってもらおうぞ」

「はい。我が身は既にアーサー王に捧げたもの。故に、王と共にあり続けんことを」

なんか耳触りの良い言葉を吐いているケイですが、私にはわかりませんよ。

生贄ができたと思ってるはずですよ。胃痛を分け与えられる仲間ができたのだと喜んでいるのがよくわかります。

こうしてガウエイン、ケイ、たまにマーリンと語り合う時がありますがこんな時しか私は自分自身が女であることを晒すことができません。

女は騎士になるものではない。ましてや、王権など以ての外である。

最初は女であることを隠して男として振る舞い、王となれと言われていた。

そんなことを言い出したアホ二人は奇しくも、我が王に毛嫌いされています。マーリンとユースー王も今思えば、ただの頭の良い馬鹿だったのでしよう。

自分が女であることを晒せるのはこの場と、我が王の閨のみ。

まだこの身は清いままだが、我が王は時々私を閨に連れ込んで鎧を脱ぎ捨て、朝まで寝ながら抱き締められる。

おかげで一人で寝る時は肌寂しくなってしまったではないか。

既に清き乙女を散らす覚悟はできていますが、我が王は私を抱こうとしない。

むむむ。いっそ、こちらから誘ってみるのも一つの手段か？

悶々と悩んでいると、外が騒がしくなってくる。

天幕にいるケイたちは最低限の武装をし、外に出る。私もまた、兜を被って大きくなり始めた胸を隠す甲冑の位置を調整して後を追う。

外に出れば、我が王とガヘリスがいた。

その場にいる者が全員、目玉が飛び出るかというほど驚いていた。

我が王が狼に啜えられている。
取り敢えず、意識を飛ばすことにした。

04 湖の誤算

犬拾った、と我が王は言う。

おそらく、その場にいる者全員がこう言うだろう。// どう見ても狼じゃないか”と。ガヘリスによれば、いつものように魔猪狩りをしていたらあの狼たちが乱入してきたらしい。

何か通じ合うものがあつたのか、我が王と一際大きな狼は見詰め合つたらしい。

気付いたら意気投合して狼たちと魔猪を追い回してイジメていたらしい。我が王は楽しそうに狼に乗って魔猪を後ろから槍で突きまくっていたとも。

どうということなの……? ?

ちなみに狼に啜えられたのは誤って狼の毛をたくさん抜いてしまい、怒って顔を甘噛みされて運ばれたのだそう。

完全に我が王が食べられたと思いましたがよ、ええ。

「めっちゃ可愛いから飼いたい」

我が王の目がこれまでになくキラキラしている。可愛い。

が。騎士たちは反対する。

それもそうだろう。こんなにも大きな狼が傍にいと落ち着かないだろう。ふとした拍子に食われてしまうかもしれないのだから。

そんな騎士たちの訴えは予想していたのだろう。

我が王は。パンパンと手を叩いて何かの合図らしきものを出した。

後ろに控えていた少し小さな——普通の狼と比べると大きいですが、彼等が何かを地面に転がす。

それは木の枝であったり、魔猪であったり。

地面に転がした狼たちは行儀よく並んでおすわりをしている。

「こんな感じで頼んだら薪とか食料を見つけて運んできてくれるぞ」

ですが、と騎士はなおも反対する。

そして我が王が再び手を叩いた。

何匹かの狼が音もなく消え、少し離れた場所から魔猪の悲鳴が聞こえてくる。

消えた狼が再び姿を現すと、彼等の口には魔猪が啜えられていた。

「こんな感じで頼んだら近付いてくる敵を見つけて殺してくれるぞ」

で、ですがと少ない騎士が反対しようとする。

我が王は三度、手を鳴らした。

小さな狼が前に出ると、我が王はそのまま狼に飛びついた。

モフウ、と柔らかな音が辺りに響き渡る。

騎士が慌てたように止めようとするが、白い毛に埋もれた我が王が顔だけ出して満足そうに言う。

「こんな感じで頼んだらフカフカのベッド代わりになってくれるぞ」

それには反対していた騎士もどう反応すればよいのかと近くの者と顔を合わせて戸惑う。

それよりもだ。我が王が可愛すぎて辛い。

「アーサー、そいつらはお前の言うことを聞くのか？」

「基本的に、嫌がることをしなかつたら人懐っこいぞこいつら。しつかりお世話するから飼っていいよね、ケイパパ」

「誰がパパだ殺すぞ」

ふむ。ところで我が王。

私もモフモフしてもよろしいでしょうか。

「飼うの許可してくれたら好きにしていぞ」

ケイ、よろしいですね？

「アル！ お前のはお願いじゃなくて脅しだ！ 俺の首に剣を突き付けるな！」

結果、ケイが折れて狼たちを飼うことになった。

我が王がご満悦そうで私も何よりだ。

今日の夜は騎士たちが珍しく全員、休める時間になったが休まる時間でもなかったのは言うまでもない。

私は我が王に抱き締められながら寝ましたが（ムフー）

魔術師マーリンは激怒した。

性転換できないことに。彼が望む性転換を行えないことに。

妖精たちに力を借りても、望む結果を得られない。弟子である湖の乙女との共同の魔術行使でも無理であった。

本当であればアーサー王の新たな剣を頼むのが最優先なのだが、湖の乙女を訪ねた理由が性転換になるほど新しい剣はついでになつていた。

そんな様子のマーリンに湖の乙女は白目を剥いていた。

仮にも大魔法使いと目される魔術師マーリンだ。人間性はクソでも、実力は確か。なのに今は言葉にできないほど気持ち悪くなつている。

我が王、我が王と選定の剣を抜いたアーサー王をことある毎に褒める彼の様子にアーサー王のことを気にするな、というのが無理な話である。

逆光源氏計画で育てたランスロット。かのアーサー王に負けない剣技を持つ息子の彼ならば、と湖の乙女は考える。

今、アーサー王の騎士団は各地を回つてゐる。その次の目的地は湖の乙女がいる場所の近くを通る。

そこを、ランスロットを向かわせて実力を確かめる。そんな計画を考えている。

湖の乙女の最高の傑作であるエクスカリバーの二振り。それを与えるのにふさわしい人物なのかと。

もしも、お目に叶うのならば。

湖の乙女は舌なめずりしながらまだ見ぬアーサー王を想う。

お目に叶うのであれば誘拐して色仕掛けをすれば良い。肉食系の精霊は自慢げに

アーサー王について語るマーリンを見ながら思う。

ニコニコと笑う心の内では邪悪に笑う悪女のような顔が秘められていた。

そして来たその時。

近くに来たアーサー王の騎士団に息子であるランスロットに剣を持たせて向かわせる。

おそらく、彼女はどんなに強くともランスロットならばアーサー王に勝てると考えていたのだろう。

遠見の魔術を使い、マーリンと共に騎士団とぶつかったランスロットを見る。

姿を隠す魔術を使い、アーサー王騎士団を襲うランスロット。

しかし、である。

遠見の魔術を使ってもわかる、ランスロットの動揺。湖の乙女も動揺していた。

ガウガウと狼が唸りながらランスロットを取り囲む。思いもしなかった状況にランスロットも戸惑うように見回している。

『ひとつ、敵を見たら容赦をするな』

狼の大群が従うように道を開ける。

開けた先からは、黒髪の男が現れる。折れた剣を手に、防寒用のマントを脱ぎ捨てながらランスロットに向かって歩いてくる。

マントを脱げば、その下から白と青で彩られた服が現れる。彼の腰には、銀色の王冠が紐で括り付けられてぶら下がっている。

『ふたーつ、命乞いを聞いたなら笑いながらぶつ殺せ』

!? と湖の乙女はマーリンを見る。思ってた人物像とは違うアーサー王に面食らった様子。

『みーいっつ、兎にも角にも死んでしまえ』

ガクガクと湖の乙女はマーリンを掴んで揺さぶる。何だあれは、と。

アーサー王が歩き、ランスロットの近くに來るとニタリと笑いながら折れた剣を振り抜く。

斬り上げるように振り抜けば、大地が裂ける。振り抜いた剣の斬撃が延長するように、ランスロットを襲う。

が、ランスロットも達人。悪寒を感じて飛び退けば、ランスロットが立っていた場所で地割れが起きていた。

ありえない。湖の乙女は目の前の現象が受け入れられなかった。

自慢の息子であるランスロットもあれほどの技を放てるだろうか。否、いくらなんでも普通の剣ではあそこまではできない。

『今日は機嫌が良いから優しく一瞬でぶっ殺してやる』
『!?!』

何だあれは。ふざけるな。王は王でも騎士の王などではなく蛮族の王ではないか!

あんなものを生み出した元凶でもあるマーリンを睨む。が、湖の乙女はすぐに目を逸らした。

滝のように涙を流しながら歓喜しているマーリンがいた。宛ら、狂信者が喜び狂っているようで、目を逸らしたくもなろう。

剣を振るうだけで地割れが起きる。何の冗談か。

対峙しているランスロットからすれば堪ったものではない。隙を見て逃げ出そうにも、飛距離もずば抜けているせいで逃走は難しい。

そんな光景を見た湖の乙女は慌ててランスロットを逃がそうと魔術を行使する。

煙を巻き、姿を見えなくして逃走の手助けになればと使う。ランスロットも意図を理解し、逃走だけに力を入れる。

ランスロットが逃げることに成功すると同時に、広範囲に渡って掛けられた魔術が一瞬で両断される。

ただ、斬られる。湖の乙女にとつても悪夢でしかなかった。

そんな湖の乙女にマーリンは優しく語り掛ける。

「聖剣を渡さないで我が王を嚇けるよ」

マーリンは変態になつても外道であつた。

後日、旅をするアーサー王一団に聖剣が贈られる。それを渡した絶世の美女はアーサー王に手渡しする時に必死に泣くのを堪えていた。

アーサー王が首を傾げながら聖剣を受け取る珍妙な光景がそこにあつたのであつた。渡された聖剣の二振り。エクスカリバーはアーサー王の象徴となり、エクスカリバー・ガラティーンはアーサー王お気に入りのガウエインに渡される事になつた。

近い将来、兵器とも言える聖剣を手にした二人が大地を破壊しながら戦う事になり、

ケイが倒れる原因にもなるのは定まった未来であろう。

05 王として

「アグラヴェインです。お見知りおきを」

「おう。なんかガウエインの弟の割には老けてんなお前」

む。アグラヴェインが膝から崩れた。

兄であるガウエインが慌てて慰めに行ったが、叔母である私も行った方が良いのだからか。

兼ねてから合流すると言われていた軍師候補のアグラヴェインが我等に合流した。

湖の乙女から授かった聖劍を得てから、ますます我が王の騎士団の名声は上がった。それに伴つてこちらに來る人員も増えたわけだが。

増えすぎて食い扶持が増えたり、あぶれる者も増える。

まあ、正直に言えば勝手に入つて來て場所がないと文句を言う者が多いのは許さん。それも我が王が聖劍を得てから入る者などそれに当て嵌まるのが多い。

聖劍を得る前から我が王に仕える者は文句もない。狼たちの件は敢えて目を瞑るとする。

お零れに預かろうとする不届き者が多くて敵わん。中にはユーサー王の間者も紛れているようだし、いつそのこと斬り捨てた方が楽だ。

ケイが働きに依じて食事を出す方法を取り始めたのもその影響。

まあ、我が王の寵愛を受けている私は余裕で食事はもらえますが。仕事はきつちりこなすのが王に仕える従者の役目ですから。

「アーサー王、こゝろ見えてもアグラヴェインは見た目を気にしているので」

ガウエインがそう言えば、我が王はバツが悪そうになさる。

流石にこれは我が王が悪いので庇いはしません。

新たに得たエクスカリバーとそれを納める鞘。地面に突き立て、柄頭に手を添えるのは聖剣を得てからよく見る格好だ。

ケイによる指導でアーサー王の象徴であるエクスカリバーを見せる方法を取るようになったとも聞いた。

格好良いので私は一向に構いませんが（グツ）

「じゃあ早速だが、アグラヴエイン。お前には軍師としての役目を果たしてもらおう。これは一応の試験でもあるから今回の出来次第でお前の待遇が変わることを頭に入れておけ」

「頑張れ」

最近アーサー王の相談役にハマったケイが方針について語ることが多い。

直前までにケイが我が王と相談して方針を決めているらしいが、長く喋らせるとボロが出るのでケイが語る方法を取るようにした。

最終的に我が王の役目はあんな感じで柄頭に置いた手の片方で親指を立ててエールを送ることだ。

……おや。アグラヴエインが微妙な顔になってますね。

むむ。あの顔は思ってたアーサー王の人物像と違って戸惑っていると見ました。

大丈夫です。少しすればあなたも我が王の魅力に気付いてどっぷり漬かりますから。

そんなわけでアグラヴェインに対する試験はアーサー王に仇を為すゴミの駆除の作戦立案です。

ユースー王の傘下にある豪族。かなりの騎士を抱えてここ一帯の支配者でもあるゴミカス騎士の討伐が今回の目的。

ですがまあ、ケイともガウエインとも相談して今回はちよつとした条件を加えました
が。

「今回の作戦はアーサー王は起用しない。これを前提に作戦を立てろ」

「!？」

王のポーズを崩して驚く我が王。

あの顔は暴れられないのか！ って顔ですね。間違いない。

そして忘れてはならないのがそこで満足そうに頷いている脳筋の甥です。

「なお、ガウエインも不参加だ」

「!？」

ガタタツと腕を組んで頷いていたガウエインが立ち上がる。

ババツと私を見て顔の表情で訴えてきます。

あれは聞いていた話と違うんですが叔母上!?! って顔です仲間ではない。

てなわけで今回はアグラヴェインの作戦と私の出陣だけで豪族を討伐するものに決まりました。

我が王に我が雄姿を見てもらおうのだ!!

大手柄を得て我が王に褒めてもらおう作戦が一気に失敗した。

何だあのクソ細目は。今回の手柄を搔つ攫われたぞ。

我が王に捧げる戦果をどこの骨ともわからないクソ細目に奪われた。取り敢えず殺したい。

「王よ。この者が此度の戦の功労者です」

戦えなかつたことに対して不機嫌そうに顔を歪めながら王のポーズをする我が王。

我が王の前に跪くのは件のクソ細目。赤い長髪の男、体も細い騎士とは思えない体付きだ。

我が王のように、筋肉を凝縮させた体なのかもしれないが。

剣を持たず、弓で戦う。それで我が王の騎士を名乗るとは貧弱者めが。男であるなら、剣で戦うべきだろうに。

さつきからポロンポロンと煩い。

「名を名乗れ」

「タントリス、と申します」

む。これは。

我が王、我が王。こいつ嘘を吐いてます。

我が王のお傍に立つ私は耳打ちするように進言した。

私にはわかる。このクソ細目が嘘を吐いていると。ええ、わかりますとも。

グツと親指を立ててくれる我が王。よくやったと褒められたようで満足である。

鞆に納まったエクスカリバーの柄頭を持ち、持ち上げてから鞆の剣先で床を打ち鳴らす我が王。

腹にまで響くような重い音がすると、控えていたガウエインが飛び出す。

偽名を名乗った細目の傍に飛ぶと、ガウエインはエクスカリバー・ガラティーンを首に突き付ける。いつでも首を斬れるように構えた。

無論、私も動きました。いつでも心の臓を抜けるように槍を構えましたとも。

「貴様、それは偽名だな。何を思って偽りの名を名乗ったかは知らんが、嘘を吐かれたのは腹立つから本当のことを言え」

すると、どこからかえええと叫ぶような声が聞こえないはずなのに聞こえてくる。

アグラヴェインも微妙な顔をしているし、クソ細目も色々と感情が混ざったような顔をしているではないか。

何だ貴様等。我が王のお言葉だぞ。喜べ。

「おいアーサー。頼むから建前を使えとあれほど」

「暴れられなかったから虫の居所が悪いだけだ」
「そういうのは八つ当たりと言うんだ」

ケイと我が王がコソコソと会話をしている。

王には建前が必要だと前々から言っているのに、我が王は本音でぶつちやける事が多い御方です。

逆に嘘はあまり言わないからケイもそこだけは好感を持つているし、ガウエインもガヘリスも仕えたいと思わせたのもこの部分でしょう。

しかし、民衆を導くのであれば思ってもないことを言わねばならない時もあります。練習はさせているのに、未だに成果がないことにケイは頭を痛めている模様。ただでさえ、相談役に給仕役まともに軍師とか兼任しているせいで心労が凄まじいことになっている。

最初に我が王を王にする際の契約である程度の自由はしてもいいと言ったせいで自分で自分の首を絞めている気もしますが。

だからこそ人材集めにあれほど精を出しているのですが。ガヘリスの働きを見てむせび泣くケイなんて見たくありませんでしたよ。

「アーサー王。この者はどうなさいますか」

「うん。ムカつくから殺せ」

「待て待て待て」

ケイは必死に止め、こうも言う。

ぶつちやけるとどの騎士も突撃脳しかないから、少しは遠距離で攻撃できる優秀な騎士が欲しいと。

弓使いで私よりも戦果が出せるのなら実力は間違いないとのこと。

そしてまとめるようにケイはボソボソと我が王に耳打ちする。

ふむふむと頷く我が王。段々と顔が輝いている気がする。

ズドン、と再びエクスカリバーで床を大きく打ち鳴らすと、立ち上がってクソ細目を指差す。

「採用!!!!!!」

しかし、細目は嬉しくなさそうな顔をする。アグラヴェインも苦虫を噛み潰したような顔に。

グダグダに終わったが、細目は我等騎士団に合流することに決まった。ちなみに本名はトリスタン。弓みたいな琴をポロンポロン鳴らす変な奴です。

で、戦の後は奪った土地を自分達のものにする。元々人望もないような豪族だったのでアーサー王が治めると聞けば喜ぶ民衆であった。

増えすぎた騎士団の一部をこの地に留まらせ、生活基盤を築き上げる。ケイもアグラヴェインも同じ意見のようで、我が王の一声で新しい我が家になった。

というか我が王。率先して家を建てる材料を運ばないでください。部下が面食らっているではありませんか。

我が王だけで20軒ほどの家が建っているのですがそれは。

参考にするんだと言われても普通の騎士ではまずそれは無理です。

……え？ この家は我が王と私が住む家？

ふむ？ ふむ……ふむ。

わがおう、いっばいちゆき

06 クーデター

遂に来た。遂に來ましたこの日が。

あのにつきクソ親父に引導を渡す時が。

我が王が真に王になる最終段階が。

クーデターの成功率を最大限に引き上げる準備もアグラヴェインが加入したことで一気に進んだ。

ガウエインを始め、ガヘリス、トリスタン、湖の乙女からの援軍である湖のランソロ。それぞれ名のある、武功を上げた騎士が騎士を率いて部隊を分ける。これによって一

気に戦術の幅が広がり、アグラヴェインが一発で軍師であると認められた手腕を発揮することでクーデターを最終段階に進めることができた。

最終段階、即ち我が父であるユーサー王の退位を求める抗議。物騒な抗議ですが私が王になれなかったからと言って王座にしがみついている老害はもういらぬのだ。個人的には出生の秘密を知ったせいで自分の手で殺したい気持ちでいっぱいだ。

「ガウエイン、頼んだ」
「ハッ」

現在、膨れ上がった騎士団を率いて憎いあん畜生が籠っている王城を取り囲んでいる。

我が王、アーサー王が先頭に立ち、聖剣エクスカリバーをいつものポーズで持ちながら前を見据えている。

その少し後ろを私を含めてケイ、ガウエイン、ガヘリス、トリスタン、ランスロが控える。その後ろには多くのアーサー王に賛同する騎士が並ぶ。

この時のために見ぬマーリンも最大限に動いていた。

どこからか持ってきた聖剣に並ぶほどの聖なる槍、船に変わるといふ魔法の盾。流石

にこの時は我が王がマーリンを誉めちぎっていた。

あと、普通にしてればいいからと我が王が言えば今は必死に自分を押さえつけるように魔術師マーリンの名に相応しい振る舞いをしている。

そうすれば我が王は褒める褒める。マーリンも我慢しながら喜ぶ喜ぶ。初めからこうしていればよかつたのだ。

我が王が指名したガウエイン。あの子にはユーザー王に対する降伏勧告と私の母の解放を高らかに宣言する。

これに従わない場合は武力を行使する、と締め括る。

「ご苦労、ガウエイン」

「もったいなきお言葉で」

あの畜生は我が母であるイグレインを人質にしている。

一目で惚れたからと言って、略奪するようなクスだ。王座と母上を手放そうとはせず、城に籠っているのが現状。

母上を助けるのはマーリンの償い。どうやらあの畜生はこれまでにした過ちの鎖が性転換の魔術の行使を阻害しているのだそう。

故に、償いのために母上を助けて性転換を成功させようと言うのだ。

改心しようとしているのにクズっぷりを見せつけるのはどうなんだ……。

というわけでこうして我等がここにいることを囮にしてマーリンは城に潜入し、母上を助ける任務を担っているわけである。

まあ、多分母上を助けたら問答無用で我が王がエクスカリバーをブツパするでしょうけど。

母上を巻き添えにしてしまえば、コーンウォール公の領地の民が怒ってブリタニアを統一することが遠のいてしまう。

本当であればユースー王がキレてコーンウォール公諸共、母上を殺すはずだったのですが、マーリンが念のためのスペアとして次の子を産ませるために思い留まらせた。

喋れば喋るだけ人間のクズっぷりが滲み出ていますが、死んでいないのはある意味マーリンのおかげ。

鉄の棒の尻叩き百発で許しました。

「マーリンからの知らせは？」

「まだだ」

「そうか。時間は？」

マーリンが用意した砂時計を見ても、まだ期限の時間は訪れていない。

城にいるユーザー王たちが見えるように大きな砂時計にしているが、大ききの割には砂の量が少ない気がするのですが。

えっ？ 我が王が早く暴れたいからわざと少なくした？ なるほど。納得です。

——むっ！

ふと、嫌な予感がした。弾かれるように顔を城に向ける。

気付いたのは私だけではない。ガウエイン達も何かが起きていることに気付いたようだ。

これは——！

「矢だ！ 敵の攻撃！」

「全員、構えろ！」

素早くガウエインとケイが指示を飛ばす。

一気に緊迫するその場も何のその。我が王だけはいつも通りの足取りで数歩、前に出る。

あまりにも自然なので反応が遅れる。ガウエインは急いで庇うように前に出ようとする——。

「俺がやろう——」

キンツ——と澄んだ音が響く。

我が王がエクスカリバーを鞘から抜きながら飛び出そうとしたガウエインを止める。鞘を片手に、少しだけエクスカリバーを振りかぶる。ゆらりとエクスカリバーから星の光が漏れるのは誰もがわかっただろう。

我が王が飛んでくる矢の大群に向かって目標を定めると。

「フンツ!!!」

目でとらえきれないほどの速さで剣を振り抜くと、エクスカリバーの光が波を生み出す。

光の波はあつという間に矢の大群を飲み込むと、存在していなかったように消え去る。

あまりにも幻想的な光景に誰もが目を奪われる。暫し、エクスカリバーの力を使っていなかったために初めて聖剣の輝きを目にする者もいただろう。

——そして、大きな音が遅れて聞こえてくる。矢を消し飛ばした音が遅れて聞こえるなど、異常としか言えない。

それを生み出した我が王は。エクスカリバーを鞘に納めると、地面に剣先を叩きつけて打ち鳴らす。

「——騎士達よ。奴等は約束を違えたようだ。故に、我等に非はない」

我が王の言葉に合わせ、ガヘリスが大きな旗を広げる。

アーサー王の象徴。ウエルズの赤き竜がアーサー王には付いていると言わんばかりに、赤い竜の刻印が大きく描かれた旗だった。

「さあ、いつまでも王座にしがみつく愚か者を排除する時だ——」

「総員、構えええええええ!!」

ガウエインが叫ぶ。叫びに合わせ、訓練された騎士たちがブーツを打ち鳴らすように

大地を踏みしめる。

「戦え。貴様等にはこのアーサー王が付いている」

「抜剣!!」

皆が揃い、剣を抜く。槍を持つ者は槍を、弓を持つ者は矢を番える。ガウエインはエクスカリバー・ガラティーンを輝かせながら掲げる。

ガヘリスは旗を支え、叫ぶ。

トリストアンは弓の調子を確かめるように弦を鳴らす。

湖のランスロは剣を抜き、天に剣先を向けながら構える。

そして私は、聖なる槍を構えながら新たな相棒となった馬にまたがる。

さあ、行こう。ダウン・スタリオン。

「行け。イグレイン殿を救出せよ」

「突撃いいいいいい!!」

うおおおおお、と騎士たちが駆け出す。先駆けをするように、ガウエインとランスロ

が先行して矢の如く大地を駆ける。

私も追うように駆け出そうと……ふと、ケイと我が王が言い争っているのが聞こえる。

「アホか！ このまま突撃させてイグレイン様が死んだらどうするんだ！」

「ついカツコよく決めたいと思った。後悔している」

「このボケが！」

——。

駆けよダウン・スタリオン！ 母上を助けるのだ！

帰ったらマーリンのウザいどや顔が待っていた。思わずダウン・スタリオンで轢いた。

近くには我が王、ケイ、ガヘリス。そして懐かしいと思わせる女性がいる。

あの女性が私の母上、なのか。顔は似ている気もするが。

「お疲れさん。マーリンが連れて来たぞ」

城のあらゆる場所を探しても見つからなかったのはあのクズが先に見つけていたからか。

ふっ飛ばさない方が良かったか。

「アル、イグレイン様は開戦前に救助は終えていてマーリンがタイミングを見計らって連れて来たんだ。点数稼ぎかわからんが」

ダウン・スタリオン、そのクズを踏み鳴らしなさい。

にああああとよくわからない悲鳴を上げるマーリン。おのれ、改心してもクズはクズか。

おっと、いかんいかん。報告をせねば。

我が王、ユーサー王以下城にいる者たちは制圧しました。抵抗が激しい者はやむを得ず殺しましたが、生きた者は捕縛して城の牢屋に入れています。

現在、ガウエインと湖のランスロが騎士を率いて城の中を掃除しております。トリスタンは援軍を警戒して見張り台で監視を。

「ご苦労。後で城にいる連中も労っておこう。それよりもお前の母と積もる話もあるだろう」

「後始末は俺たちでやるからイグレイン様と話せ」

旗を丸め、仕舞うガヘリス。制圧した城へ歩き出した我が王とケイを追い掛け、この場に残るのは私と母にダウン・スタリオンとマーリン。

「任せなさい。人払いの魔術くらいお手の物さ。城に入れば解けるようにしておくからね」

お礼は言いませんよ、マーリン。後でまたしばきます。

怖いなあ、と笑いながら空気に溶けるように姿を消すマーリン。

これで正真正銘、母と二人だけ。

……何から話せばいいんだろうか。教えてくれ、ダウン・スタリオン。

「アルトリア」

は、はい。母上。

「顔を、見せてくれる？」

母上にそう言われ、戦の間ずっと隠してきた顔を見せるために兜を脱ぐ。

綺麗な髪と我が王に褒めてもらえた金糸のような髪の毛が兜から零れる。それは、母上と同じ髪の毛の色だった。

時が流れる度にもう男であると偽っても騙せないほど女らしくなってしまった私の容姿。水辺に映る自分の顔のように、母上にそっくりだ。

「嗚呼……」

泣きそうな母上はその震える手で私の頬に触れてくる。包み込むように、両手で顔を包んでくる。

手から伝わる、温かい何か。それが母の愛なのだと、初めて知った。離れていても、母はずっと私を想っていてくれた。そう感じる。

「こんなに大きくなつて」

……母上。

「なあに、アルトリア」

母上も、お元気そうで何よりです。

どちらからかはわからない。でも、お互いが築けなかつた時間を埋めるように抱き締め合うことになった。

ぎゅっと抱き締められたが、ふと自分が固い鎧を着ていることを思い出した。

思わず離れれば、至近距離で顔を合わせることになる。

それがおかしくて、母上と一緒に笑い合うことになった。

それからは、日が沈むまで母上と語り合う。ダウン・スタリオンは私たちを守るように辺りを警戒してくれていた。

07 災難

我が王の即位式。それは華やかなものでした。

当の我が王は終わった後に疲れ切つて私の胸に顔を埋めることになりましたが、特に問題はありませんとも。

民衆が待ち望んだ救世の王。それがようやく即位をし、喜んでいる様子。

貼り付けたような爽やかな笑顔の裏にはどんな顔をされていたのか。

我が王が聖剣を手にしてからどんどん実る我が胸に埋もれながら呻く我が王を見れば、慣れないことをして疲れているのは明白。

ケイも即位式は何事もなく済んだのはホツとしていました。いつ暴れるのかと気が

気でなかったようです。

「我が王、お疲れ様でした。つきましては、二日後に戴冠式を執り行うものとして……」
「ぐえええええ」

まるでカエルのように呻く我が王は離さないとばかりに更に胸に顔を埋め、体を密着してくる。

マーリンが羨ましそうに見てきますが、無視です。

かつてのユースー王が使っていた寝室を使い、体を休める我が王。

本当ならクソ親父の寝室など使いたくはなかったが、我が王のためだ。我慢我慢。
うむ。可愛いですぞ、我が王。

「というかマーリン。なんだその格好は」

ズリズリと頭の位置を胸から膝に変えた我が王は見た目が変わっているマーリンを見る。

少し前から珍妙な姿になっているがなんだそれは。

「むっ、ふっ、ふっ、ふ。よくぞ聞いてくれました我が王よ！」

待つてましたとばかりに変な格好をするマーリン。

我が王が仮面らいだあの変身ポーズと言うが、何の事やら。

見た目と相まってにやるこ？ にしか見えないとも言っておられる。

顔付きはあまり変わっていないようだが、少し女子寄りの顔付きになっている。

元々、男か女かわからない顔をしていたからよくわからんな。

「イグレインを助け、アルトリアと再会したことで戒めの鎖は解かれ、性転換を成功させたのです！ 故に、このような幼子の格好にはなりましたが、それでも女であるのは間違いないませぬ！」

「素直に凄すぎて気持ち悪いな」

ええ、同感ですとも。

ほらほらと服を捲つて下半身を見せるマーリンは素直に気持ち悪いです。

……おや。我が王の顔が真っ赤ですな。

むっ！ もしや見るのは初めてですかな!?

「無論、戒めの鎖はまだ残されていますが。全てを解けば、このマーリンは我が王が望む完璧な女に変われることを保証しましょう!」

「わかったから隠せ」

「む。見てもいいのですぞ。ここは我が王専用ですからな」

「ねえお願いだから羞恥心持って!?!」

何を言う。我が王のエクスカリバー○は私のものだ。

「何を言ってるのお前!?!」

「なるほど。我が王のエクスカリバー○を我等のアヴァロン○に納めるわけか」
「下ネタが酷いね君等! こんなどこにいられるか!」

おっと。逃がしませんぞ我が王。

頭を動かそうとする我が王を捕らえ、膝に固定する。

すると、怯えたような我が王の目がこちらに向けられる。

……むふつ。我が王可愛い。

正直に申しますと、王への即位も終わったので何か個人的な褒美が欲しいのです。

「ほ、褒美？」

ええ。最初の契約で言いましたでしょう？ ある程度の自由は認めますが、王になったら何か一つだけ願いを聞くと。

「い、言つてねえぞ俺はア！」

ぬひいと情けない悲鳴を出す我が王。なんとも愛おしい。

思わず頭を固定する手に力を入れてしまったが、いいだろう。

言いましたとも。ええ、言いました。

「てめっ、ゴリ押ししようとしているな！」

固定する手を無理矢理にでも引き剥がそうと抵抗を始める我が王。

が、予想済みである。

マーリン。過去の事は水に流して共にやろうではないか。

「勿論!!!」

「あつ、クソ！ クソマーリンめ！ やめろオ！」

ふふふふ。我が王。ふふふふ。ふひつ。

「のああああああああ!!」

母上、アルトリアはヤりました!!

魔術師マーリンは狂喜乱舞していた。

遂に達成した性転換。間を入れず、王と契りを交わせた。

しかも、王の魔力は凄まじいもの。マーリンの中に解き放たれた魔力はマーリンを満たすものだった。

ヌヒヒヒと気持ちの悪い笑いをしながら城の中を歩くマーリン。

警備の騎士に怪訝な目で見られるも、お構いなしである。

占領した偽王ユーザーの城を使うのもいいが、そろそろアーサー王に大きな贈り物をしてほしい。

兼ねてから計画していた壮大なマーリンの野望。

アーサー王を即位させ、戴冠を行う。

次に、壮大な城を築いてブリタニアを統一させる。

ハイパー美少女魔女っ娘マーリンのぱーふえくとなプランである。

既に建設地も決めてある。ログレスの都、あそこならブリタニアの象徴にもなるう。

マーリンを毛嫌いしているアグラヴェインにもログレスの都に城を築くことを賛成してもらい、正式にアーサー王のサインをもらうことで建設に臨む。

新たな王の誕生に沸くのは人間だけではない。怯える湖の乙女、妖精も全面的に協力をすると言った。

即ち、最高の王城を建設できる。それだけでマーリンは大満足である。

「我が王よ、失礼しま——」

執務室で初仕事をしているであろう、アーサー王を訪ねてみれば。もぬけの殻であった。

部屋を見回せば、風が入り込んでいる窓が開いている。
つまり、脱走である。

「わ、わが、わわわわ」

我が王おおおおおおお！ そんなマーリンの叫びが響き渡るのは当然のことであつた。

どうしよう。流れでとんでもないことになってしまった。

「……よし。こつちだな」

あの、アーサー王。何をしておられるので？

落ちていた木の枝を倒しているアーサー王に疑問しか湧かない。

「ハイハイハイ。名もなき一般騎士くんよ。俺はアーサー王ではない。アルトリウスであると言ってるだろう」

あ、はい。アルトリウス様。

じゃなくて。城を抜け出して宜しいのでしょうか？ 戴冠式を終えたばかりだとい
うのに。

「いいんだよ。俺は王様だし」

いい、いえ。王様だからこそ抜け出してはならないのでは――。

「いいんだよ（ゴリ押し）」

は、はあ。

いかん。アーサー王は前から自由奔放なところは見られたが、今回はいくら何でも度が過ぎてている。

城に王がいなくなればケイ様もアルトニウス卿も心配なさる。

というか戴冠式を終えた直後に王が消えるのは大問題だろう。偽名まで名乗って私を連れ出して。

それよりも、先ほどから我等の後を追い掛けてくるあの生き物は何なのだ。白いリスのようにも見えるが。

「フオーウ」

「ん？ ……うげえ!?! キヤスパリーグ!?!」

「フオフオーウ」

「ぬあああああ!」

あ、アーサー王ーッ！

白いリス、アーサー王はキャスパリーグと呼んだ。

そのキャスパリーグはアーサー王に懐いているように顔に飛びつき、アーサー王は悲鳴を上げる。

顔から剥がそうとしてもスルスルと器用に動いてアーサー王の手から逃れる。

おろおろ。今の自分を表現するのであれば、こうだろう。

キャスパリーグを剥がそうとするアーサー王の手助けをするべきなのかと迷う。下手に手を出して悪い方向に進むと思うと、手が出せない。

「ええい！ 離さんか！」

「フオフオフオーウ！」

「何が勝手に抜け出したアホを見張りに来ただ馬鹿野郎！ マーリンのブレーキになつてろ！」

「フアー——www」

「これからはお前がブレーキになるんだよオ！ www じゃないんだよこのクソ毛玉！」

てつきり、もつとしつかりとした理由かと思つたのに。

「後は怒られる時に生贄が一人多いと分散されるじやろ」

「フオフオフオwww」

しかもこれまたなんとも酷い理由も付け加えられた。

キヤスパリーグも私を笑うように鳴いてるようにも聞こえる。

それよりもアーサー王！ 酷くありませんか！

私はただ怒られるのを防ぐためだけに連れ出されたのですか！

「じゃあ、代わりになんか役職あげるから許して」

「フォーウ」

「アーサー王の尻拭い役とか誰が上手いことを言えと言つた。というか、一般騎士くんの名前は何？」

思っていたアーサー王の人物像と違い過ぎて頭が痛い。もしかすると、こちらが本来の性格なのかもしれないが。

ああ、そういえばケイ様は必死になってアーサー王の傍で何かをしていたな。あれはアーサー王の振る舞いを隠していたからか。

もしかすると、離反する騎士も出ていたかもしれない。

間違いない、ケイ様は一番の功労者とも言えるだろう。あの方がいなければアーサー王は王ではなかったかもしれない。

ああ、もう。色々と裏切られた気分だが、アーサー王が為したことに偽りはない。

エクスカリバーに選ばれ、遺憾なくその力は発揮できるだけの力は持っているのだ。

救世の王として、アーサー王は選ばれたのだ。

おそらく、これからも大きなことを為すに違いない。このブリタニアを平和にしてくれる御方かもしれないのだ。

ともなれば、やることは一つだけだろう。

ここにはいないケイ様に代わって、アーサー王のフォローをする。

役職以前に民が失望するようなアーサー王を見せてたまるか！ という気持ちが強
い気もするが。

城から連れ出されたままの格好。顔を隠す兜を脱ぐ。生まれつき、片腕が動かしにく
いのは不便だがもう慣れた。

視界の端に自分の髪の毛が映る。他の騎士にも男らしくないとなじられた髪の毛が

兜の中から出る。

軟弱者と馬鹿にされる顔も晒す。アーサー王にも言われるだろうが、敢えて見せよう。

ベディヴィエールと申します。陛下。

「おう。カッコいい顔じゃねーかベディくんよ」

「フオウ」

「……キャスパリーグ、隙あらばネタを挟むのはやめろ」

……今、カッコいいと言われたのか？ この女のような顔が？

「ぶつちやけ強くて有能なら女でもいいんだよなあ。弱くて吠えるだけのアホが一番要らん」

「フオフオウ」

「は？ マジ？ ベディくん、最初からいたの？」

——あ、はい。アーサー王がまだマーリン様、ケイ様、アルトニウス様と旅をしてい

た時に加わっておりまして。

「うはあ。気付かなくてごめんな？」

い、いえ。それは構いませんが。

「ま、そんなわけでちよつとした旅の間、よろしくなベディくん」

ハッ。いつの間にか言い包められている。

本当なら城に帰るように促さねばならぬのに。

お、王よ。城に帰らねば。

「あー、無理無理。やらないといけないことがあるからね。わざわざエクスカリバーまで置いてきたんだからさ」

エクスカリバーを置いてきたのか!?! あれはアーサー王の象徴でもあり、力でもある。それを置いてまで何をする気なのだ。

「エクスカリバーがなければクソ雑魚の俺はアルトリアとマーリンには勝てねえからな」

……はい？

「エクスカリバーなしでも勝てるように鍛える。ついでに女をナンパしてこましてから性技を鍛えてアイツ等をアヒンアヒン言わせるために旅をするんだよこの野郎！」

「フオフオフオーウ」

「即落ちのフラグをいただきましたー、じゃねえぞクソ毛玉」

えっ、ええええええええ……。

ブリタニアは駄目かもしれない。こんなのが王だもの。

08 苦難の道

……あの、アルトリウス殿。

「ん？」

おかしく、ありませんか？

「何が？」

いや、あのですね。その格好は騎士としてはいかなものかと。

「何で？」

アルトリウス殿、アーサー王がまた変なことをしている。

キヤスパリーグを頭に乘せ、盾を二つ両手で構えている。騎士どころか普通の人間でもやらないと思う。

まるで鳥のように手を広げているのは何かの儀式なのだろうか。

「カッコいいだろ。ドヤ顔ダブルシールド」

「フォーウウウ」

頭が痛くなってきた。ケイ様はよくこの方を抑え込めたものだ。

それよりも船になる魔法の盾ではない方の盾はどこから持って来たのだ。

「あ？　これか？　金剛石の盾だ。ユーザーの宝物庫からパクってきたもんだ。ついで

「この剣も飾ってたから貰って来た」

……あの、私の記憶に間違いがなければなのですが。
宝物庫には警備の者がいたのでは？

「殴って気絶させたぞ」

な、なんてことを……ッ！

「大丈夫だ。中に書置き残してるから可哀想な騎士くん達はクビにはならんよ」

そういう問題ではありません……！ 打ち首にはならなくとも、閑職に飛ばされるで
はありませんか……！

「危険な仕事をしなくて済むから万々歳だろ」

それは騎士に騎士として死ねと言うものです。

アーサー王の頭はおかしい。宝物庫の警備に抜擢されるのなら、少なくとも腕に自信のある騎士だ。

もしかすると、私と同時期にアーサー王の騎士団に入った者かもしれない。

ケイ様を選んだ者だ。ケイ様もまさか身内から、それも一番上の王に宝物庫を破られるとは夢にも思わないだろう。

あの方の怒りはどれほどのものになるのやら。

それとあの、もしやその馬は……。

「コイツか？　ダウン・スタリオンだ」

アルトニウス卿の馬ではありませんか——！！

「元々は彷徨つてたコイツを躡けたのは俺だぞ。ユーサーの戦の時は貸していただけだ。でなきや、いくら俺でも蹴つ飛ばされるだろう」

頭が痛くなり過ぎて気分が悪くなってきた。

なんだこの王は。自由過ぎるだろう。もつとこう、何かないのか。

そういえば、アルトニウス卿が駆っていたダウン・スタリオンはアーサー王が連れ出したのではなくて追いつけ掛けたのだった。

その際に、魔法の盾であるプリドウエンもダウン・スタリオンが持つてきていたではないか。

いかん。頭痛のせいで記憶が消えている。

それよりもアルトリウス殿。どこへ向かっているの？

「ん？ 俺の生まれた地だ。呼び出し食らったからな」

——は？ アーサー王が、生まれた場所？

そういえば、誰も知らない気がする。

破天荒な普段の振る舞いのせいで忘れがちだが、どこで生まれて育ったのか聞いたこともない。

普通なら、これほどの力を持つ者は由緒ある家の生まれのはずなのに。

それに、呼び出しとはどういうことか。

「キャスパリーグがメッセンジャーでもあるんだ」

「フオウツ」

「ちなみにコイツ、エクスカリバーでぶった斬っても死なない怪物だからな。下手に怒らせるなよ」

「フオオ!？」

「だろ？ 追い掛けて来た時はそりゃ、驚くわ」

「フアー」

「良かれと思って！ じゃねえよ」

王によれば、ガウエイン卿と模擬戦闘を行い、打ち負かした後に散歩をしたら出くわしたのだそう。

本気でエクスカリバーで斬り付けたのに死なないから泣きそうになったと笑っておられるが、私からすれば悪夢以外のなものでもないのですが。

名目上はキャスパーリーグはマーリン様のペットにしているらしい。魔術師マーリンのペットなら何があってもおかしくない点を突いたらしい。

というか、この可愛らしい小動物の正体を知ったら世界が恐怖のどん底に叩き落され

る。

「安心しろ。なんかこれ、俺の傍で楽しいことが起きればビーストにはならんらしい。第四の獣とか無駄にカッコいい美味しいポジション持ちだぞコイツ」

?
???

「こいつには絶対誰も勝てない。相手と比較してどこまでも強くなる怪物だ。おわかり？」

「ありや。固まっちゃまった。お前のせいだぞキャスパリーグ。クソチート能力なんて持ちやがって」

「フオフォーウ！」

「あん？ お前も大概だろって？ 馬鹿野郎。お前、俺のアレは条件付きだ。お前が完全にビーストになったら問答無用でぶっ殺してやるから首を洗って待ってる」

「フオフオフオ W W W」

「雑魚が吠えておる W W W じゃねえぞクソ毛玉ア！」

けいさま、このベでいう、いえーるをおたすけください。
もうやだ……この人と一緒にいると頭がおかしくなるう。

「おう。帰ったぞ。

ケイ、このベデイくん、気に入ったから俺の側近にして。顔もいいから近衛兵辺りに
抜擢よろ」

「待て待て待て待て」

寝るかーと我が王が去ろうとすると、ケイが引き留める。

我が王が帰って来た。半月にも満たない期間だったが、我が王がいない間はてんやわんやであった。

宝物庫が何者かに襲われ、いくつかの品々が奪取された時は城内が殺気立ったが、我が王の書置きで違う意味で色めき立ったが、ケイとアグラヴェインが必死で動いたおかげで事なきを得た。

我が王がいない間、湖のランスロことランスロットも正式に騎士団に加入した。妙に馴れ馴れしい奴だから細目より嫌いである。

あと、マーリンが泣き叫びながら城内を走り回る奇妙極まりない光景も見られた。今はメソメソと部屋に籠っているが、少ししたら出てくるだろう。我が王が帰って来たし。

……え？ 私？ うむ。しっかりとどっしりと我が王の帰りを待っていましたぞ。

「お前がいないせいでアルトリアが暴走して聖槍の力で所構わず破壊して回って大変だったんだぞ」

……ま、まあ。少しだけ動揺はしましたが、よ？

ええ。新しい城を築くための整地をですね。やってみましたとも。ええ。

「俺を逆レしたのが悪いから暫くは俺から離しといて」

わ、我が王！ 捨てないでください！

「ぬあつ！ 足にしがみつくなアルトリア！」

「頼むからこれ以上問題を起こすな。アグラヴェインも胃を痛めて寝込んでいるんだぞ」

我が王！ 我が王がいない間、人肌恋しくて夜も眠れていません！ 我が王の匂いのついた枕ではもう限界です！

「ステイステイ！ お前、留守にしている間に何があつたんだ!? 変態みたいになつてんじゃねーか！」

「……ハア。アーサー、お前から話を聞くのは後回しだ。俺は先にこのベディとやらに話を聞いておく」

「つておおい！ ケイ、これを放置すんな！ 何とかしろ！」

我が王のかほりクンカクンカ。

暴れる我が王をがっしりとホールドして久方の生我が王を堪能する。

……? 何だこれは。前の我が王とは何かが違う?

「け、ケイ様」

「わかつてる。どうせアーサーに無理矢理連れ出されたんだろう。そこはお咎めなしにしてやるから何をしていたかを話せ」

「は、はい……あの、ケイ様。ケイ様は知りたくもなかった事実を知ってしまった時はどんな反応をすれば良いのでしょうか」

「は?」

「アーサー王が人間的に失格なことも、頭がおかしいことはいいのです」

「あー、あー、それはだな」

「ですが、世界を滅ぼす黙示録の獣だとか、ビーストだとか、既にこのブリタニアが滅びる運命にあるだとか、アーサー王の生まれた意味だとか、アーサー王が王に選ばれた本当の理由だとか——しりたくもなかったカハツ」

ぐるん、とベディくとやらが白目を剥いて気絶する。

ケイが崩れるベディくとやらを抱き留め、衛生兵——と叫ぶ。

なんか色々爆弾発言をしている気がするのだが、我が王的にはどうなのだろうか。

「ん——。内緒」

ベディくんには悪いことしたなーと我が王は言う。

——思えば、この時に我が王はアーサー王としての運命の渦に飛び込んでいたのだから。
う。

このブリタニアとは違う場所、時間で再び我が王と会うことはできたが、少しでも聞

き出しておけば我が王は救われたのだろうか。

——いや、我が王なら笑ってこういうはずだ。

「やっぱ暴れるのは楽しいわ」と。楽しそうに嗤いながら言っただろう。

私ならば、間違ひなくこれを仕組んだ奴を八つ裂きにしていただろう。

もしかしたら、怒り狂って狂い果てた先にできたのが今の我が王だったのかもしれない。

誰もがアーサー王を狂っているとやった。狂わなければ、自分を保てなかったのかも
しれない。

「おーい、アルトリア。マスターちゃんがいつもの時間だつてよ」

……ですが、いいでしょう。

私は我が王を愛している。それだけでいいのだ。

今なら、我が王を本当の意味で支えられる。

ところで我が王、今夜は夜這いをしてもよろしいでしょうか。

「だめ」

くうーん。

09 槍の光

「ぬんっ!!!」

星の光が瞬き、光の奔流が雪崩れ込む。

我が王が放ったエクスカリバーの一撃は誰も耐えられないほどの輝きを放ち、敵対する者を飲み込んだ。

「あ。駄目だこれ」

が、相手はピンピンしている。エクスカリバーの一撃でも、かの敵は滅ぼせないようだ。

カチン、とエクスカリバーを鞘に納めながら飛び上がる我が王がいた場所は、爪の一撃で抉れる。

羽のように軽やかに。音も立てずに私の隣に降り立つ我が王の顔は浮かばない。

いつものように、鞘に入ったエクスカリバーを地面に突き立てながら考えるように顎を撫でる。

「流石はブリテンの化身。聖剣でも殺し切れんか」

「かと言って、普通の剣では刃が耐えられない。どうするんだ」

「ガウエインのガラティーンも同様。ランスロットのアロンダイトも傷を付ける程度か」

めんどいなーと呟く。こうしている間も、騎士たちは絶え間ない攻撃を続けている。

「復活せずに寝てろよな。迷惑な野郎だわ」

無駄にカッコいい名乗りをしやがって腹立つわ、と我が王は言う。

誰が言ったか、卑王。しかもユースーの兄だという。

つまり、私の伯父でもあることになるのだが。

最初こそはガウエインのエクスカリバー・ガラティーンの効果も薄かったものの、ダメージはあつた。我が王のエクスカリバーも裂傷を与えられるほどには通用した。

だが、時間が経てば経つほどヴオーティガンは血を流し、闇に変えて大きくなる。今は人だった姿の名残はない。白き竜の血を飲んだ影響か、巨大な竜へと姿を変えた。黒き竜、魔竜の名に恥じない力を見せ付けてくる。

我等の中で最も力のある我が王のエクスカリバーでさえも通用しなくなってきた。

エクスカリバーに並ぶ聖剣であるガラティーン、ランスロットの持つアロンダイトでは寧ろ剣の力を奪われるほどだ。

そんな敵を相手に、なんとか持ちこたえているのも、我が王の騎士ラウンス・オーダーの旗による恩恵を得ているからこそ。

我が王が旗を振るい、ガヘリスが支える。魔法の力が込められた旗は王が振るうことで効力を発揮する。

即ち、アーサー王に仕える騎士たちが力を得る。それ故、陣形が奇跡的に保たれてい

るのだ。

「アーサー、お前が持ち帰った物の中に使えるものはないのか？」
「有用なのはあの旗だけ」

うむう。アグラヴェイン卿、何か作戦はないのか？

「正直、今の状況を保つのが精一杯です」

今回、ヴォーティガーンの討伐のためにアーサー王の騎士団は駐屯兵すらも動員して臨んでいる。

闇に沈み始めるブリテン島を救うには、エクスカリバーの光を照らすだけでは不十分だと判断して可能な限りの準備を行って来た。

やはり、それでも準備は足らない。ここという決め手が足りない。

「厄介だよなあ。聖剣は無効。光が強いほどアレは強くなるし、何よりも竜の鱗のせいでダメージが通らねえ。チートも大概にしろ」

頑張れ頑張れトリスタンとやる気のない応援をし始める。意外にも、ダメージが通っているのはトリスタンの弓だか琴だかわからない武器だ。

ポロン。ポポ、ポロロンと戦場に似つかわしくない音が響き渡っているのはトリスタンが頑張っているからだろう。

「一応、アレは守護者の名目だから俺の力は使えんしなあ」

「マーリンは？」

「あれ」

トリスタンの琴の音が響く中、我が王が指し示す場所には黒い球体に捉われたマーリンがいる。

ヴォーティガンと接敵した瞬間に真つ先にやられて閉じ込められた。マーリンを抑えられるほどの力が最初からあったことに驚きだった。

一縷の望みに賭けて、マーリンが動けることを期待していたが駄目らしい。

もう私も戦線離脱寸前だ。マーリンが持つて来た聖槍も十分な力を発揮できず、無駄に魔力だけが吸い取られる。

「しようがねえ。アグラヴェイン、一旦撤退だ」

「総員退却ううう！」

苦渋の決断だった。このままではいつまでもヴォーテイガーンを倒すどころか、力が増えて一気に形勢をひっくり返される。

軍師であるアグラヴェイン卿が撤退命令を出せば、戦線を維持していたガウエインとランスロットが部下の騎士を守りながら後ろに下がり始める。

トリスタンは二人の撤退を手伝うように攻撃を更に加える。

「あ。ベデイくん」

ちよいちよいと儀仗兵としての役目を与えられたベデイヴィエール卿を呼び出す。

急に失神したベデイヴィエール卿は意識を取り戻すと、一部の記憶が消えていた。知ってはいけないことを知ってしまい、それから己を守る為に自分で記憶を消したのだと思うと我が王は言った。

何を知ればあんなことになるのだ……？ 小さな声であまり聞こえなかったが。

「悪いけどこれ頼むわ。完全に光を奪われて使い物にならんくなったから」

シャリン、とエクスカリバーを少しだけ抜けば、美しい刃が嘘のように真っ黒に染まっている。

流石にそれには、我等も絶句する。星が鍛えたという聖剣がこうなるとは誰が予想しただろうか。

「アルトリア」

ベデイヴィエール卿にエクスカリバーを渡す我が王は私に手を差し出して来る。何かを渡せとクイクイと動かしている。

我が王……?」

「今、使えるのはお前の槍だけだ。で、あの黒蜥蜴とやり合うには俺かガウエイン、ランスロットくらいだがあの二人には撤退を手伝わせる」

「アーサー、お前は殿をする気か!」

「少しでも生き残らせようとするとするならそれしかねえだろ」

いや、だが……。

あのヴォーティガーンを相手に一人で戦えるのか？　いくら我が王が強くとも、魔竜を相手にするのは無謀ではないのか？

「大丈夫だ。いざとなっても死にやしねえ」

聖槍を渡すのを渋る私に痺れを切らしたのか、ひったくるように我が王が槍を取る。

途端、私ではそこまで輝かせられなかった槍が嘘のように輝き始める。その輝きは、世界のどこまでにも届きそうな強い光を放っていた。

聖槍を肩に担いだ我が王はいつも腰にぶら下げている王冠を紐を引き千切るように、強引に取った。

「どつちにしても、この力を使おうとすると辺り一帯ふっ飛ばしかねんからな。俺は構わんがお前らは死にたくないだろ？」

「よし。アグラヴェイン、撤退を急げ」

すると慌てるようにアグラヴェイン卿とケイは撤退と叫ぶように下がる騎士を急かす。

対して、我が王は王冠を器用に回転させながら自分の頭に乘せた。

———そういえば、我が王があゝの王冠を被るのは初めて見る———。

長い間、共にいたケイですらも王冠を被るのを見るのは初めてではないだろうか。私でも磨くのは見ても、被るのは見たことがない。

「さて———」

ゾワリ、と我が王の纏う霧囲気が一気に変わるのを感じた。

変わったのは霧囲気だけではない。聖槍が放つ光が、我が王の体に宿るように輝き始めていた。

何よりも目を引いたのは王冠。我が王の頭にちよこんと乗るだけだった王冠が王冠の形をした光の輪になっている。

それは、人ならざる存在に変わったようだった。

『やるか』

気が付けば、我が王は消えていた。音もなく静かに騎士の撤退を支援していたガウエインとランスロットよりも前に急に現れ、槍を突き出していた。

今まで強くなり続け、ダメージが通らなかつたヴォーティガンが苦痛の悲鳴を上げる。奴の翼に穴が開いていた。

『——初めて使うが、これは凄まじいな……あ。お前らは下がってろ。死にたくなきゃ、できるだけ遠くに離れてな』

まるで天上の存在が語るような重々しい口調で話し始める我が王だったが、すぐにいつもの口調に戻ってガウエインとランスロットに向かって手を振る。

シツシツと追い払うような仕草に呆気を取られていたガウエインが反論しようとするも、すぐに封殺される。

翼を穿たれたヴォーティガンが反撃をした。竜の手で薙ぎ払うように我が王を殺そうとする。

宛ら軽い羽根を手で掴み取ろうとしてすり抜けるように、我が王はヴォーティガン

の一撃をひらりと躲す。

ヴォーティガーンの手に乗れ、我が王が再び槍を突き出せば。

世界が槍で貫かれたようだった。

その余波か、真つ先に動けなくなつたマーリンが黒い球体から飛び出してくる。

幼子の少女の見た目をしているマーリンはふわふわと我が王の傍に浮かぶ。歡喜の表情を顔いっぱい浮かべ、杖を持つたまま手を大きく広げて声高らかに叫ぶ。

「さあ祝え！」

世界に現存する神秘が生んだ幻想の王！

それこそがキング・アーサー！

聖なる槍、最果てにて輝く槍の真の力に選ばれた王である！」

——奇しくも、そのセリフは各地に回つて我が王の宣伝をしていた時の口上に似ていた。

「おう、気は済んだかマーリン」

「勿論ですとも、我が王よ！」

我が王はヴォーティガーンの腕の上に立っていた——我が王が落とした竜の手に。

そこで、マーリンは興奮したように我が王と会話を交わしていた。

槍を肩に置く我が王、新調したらしい白の木の杖を振り回すマーリン。

うらやまけしからん。

私も我が王の隣で戦いたい。

「めんどくせえからこのままヴォーティガーン消すからお前の魔術で全員を安全な場所まで飛ばせ」

「承りました我が王」

ふむ。ならば私はここで我が王の雄姿を見届けて——。
おのれマーリン計ったな!!!!

魔術師マーリンは凄まじいほどの歓喜を身に宿していた。

彼——彼女が調達した聖なる槍、最果てにて輝くと評される槍を使うアーサー王に体が歓喜の震えで止まらない。

もう既にこの地、ブリテン島あるいはブリタニアに満ちる神秘は薄れている。

故に、滅びの運命を辿っていることはマーリンも知っている。

直に滅びるであろうこの地は最後に幻想を統べるに相応しい存在、王を生み出した。

選定の剣に選ばれ、エクスカリバーを振るう資格を得て、聖槍の真の力を発揮できるだけの力も見せ付ける。

まさに最後の幻想の王に相応しい選ばれし者。

世界に愛されていると言っても過言ではないアーサー王に比べれば、ブリテン島という狭い場所に愛されているヴォーティガンごときでは勝ち目は初めからなかった。

エクスカリバーを使えなくさせたのは予想外だが、逆に聖槍を握るきっかけになったことは褒めるべき一点であった。

既に、ヴォーティガンは虫の息。魔竜形態は解かれ、ユーサー王にどこか似た雰囲気漂わせる人間の姿に戻っていた。

反対に、ヴォーティガーンを圧倒したアーサー王は無傷。エクスカリバーが敵わなかったことが嘘のようにヴォーティガーンを一方的に追い詰める力を見せ付けた。

神秘の塊とも言えるエクスカリバーではなく、聖槍を操るその姿は最早人間とは思えない神秘に満ちた姿をしていた。

そう、名付けるのであれば。

「戦神・ロンゴミニアド」

最果てにて輝く槍の力の影響を受け、元々アーサー王が持つ王の才と凄まじい反応を見せたことで生まれる神に近い存在。

人間の王を育てるマーリンとしては、至高の王を生み出したことにむせび泣く。

この力であれば、滅びに向かうブリテン島を救うことができる。そんな確信を持てた。

これで最も美しきハッピーエンドが見られる。アーサー王との出会いに、心から感謝をすることができることにマーリンは感動していた。

——だが。死に向かうヴォーティガーンとアーサー王の間に交わされた会話には無視できない言葉が含まれていた。

「我が王……今、何と？」

「何れ、俺はこのブリテン島を滅ぼす。そう言ったんだマーリン」

10 平穩

「はい次—」

ペツタンペツタンと淀みのない動きで筒状の物を羊皮紙に押し続けるアーサー王。めんどくさいからと他の人間はやってないような事務作業をしておられる。

私も儀仗兵として役職は与えられたが、仕事は儀仗兵には収まっていないような気がしてならない。

おかしい。何でこんな仕事をしているのだ。

普通なら執務室の前で警護をするだけなのに何で中にいるのだ。

「ゴリや楽でいいわ。ゴリ押しして正解だったなこれ」

渋い顔をするのは軍師でもあられるアグラヴェイン卿。

羽根ペンでサインを書くのは嫌だ、とアーサー王がごねられて頭を痛めておられましたが。

今では格段に進む作業にアグラヴェイン卿は喜んでいいのやらと微妙な表情をされている。

はんこ、と言うらしい。どうやってこんな発想を思い付くのかわからないが、奇抜な発想をアーサー王は時々思い付かれる。

どうやって思い付いたのか。騎士の運用。

特に戦がない時は手が空いている騎士を別の運用に回す。最初こそ騎士には反対されていたが、体を休めるのも大事だぞとアーサー王のいつの間にか言い包められる事態が起きた。

自分も会話をしているといつの間にか言い包められることが何度あったことか。変に説得力がある気がする。アーサー王は。

ぶっちゃけやめてもらいたい。

「王、こちらはしつかりと読んでください」

「はいはい、と」

指で文字を追うように羊皮紙に指を滑らせる。

ああ、そういえばアーサー王は執務室の作業が始まる前は文字が読めないんだった。簡単な文字はわかっていたが、長文になると吐きそうと顔を青くされていた。

アグラヴェイン卿がいなかったら執務などでできなかつただろう。今もわからない文字は何これと聞いているところも何度か見る。

ペツタン、とはんこを押すアーサー王。読み終え、確認を終えて羊皮紙をアグラヴェイン卿に渡す。

それらを纏め、時々丸めるアグラヴェイン卿。

「本日、届けられた報告書はこれで終了です」

「おう。終わったか」

ぬああと疲れを解すように両手を高く上げて欠伸をするアーサー王。

最近では戦うことも少なくなり、戦で用いる装束は着ていない。動きやすい装束はアーサー王としての威厳を見せるための装束に。

青と白、黒が美しく組み合わさった装束はアーサー王にとってもお似合いだ。

執務をする時は楽な格好、ずつしりとした上の装束は脱いで黒い肌に張り付くものを見せている。アーサー王はいんなー、と言っていた。

割れた腹筋が薄つすらと浮かんでいることに、アルトニウス卿は鼻血をとめどなく流しながら親指を立てていたのは記憶に新しい。

……というか、どう見てもアルトニウス卿は男装している、のか？ わからぬ。

あの反応を見せておいて男だ、と言われるとアーサー王の趣味を疑う。

「ベディくん、なんか変なことを考えていない？」

いえ。アーサー王は頑張っておられますね、と思っております（微笑）

「なんか憐れむような目で見ていた気がするんだが」

いえいえ、気のせいです。

「……アグルくん、ベディくんから黒いもんが見えない？」

「ベディヴィエール卿も疲れているのでしよう」

誰のせいだと思ってるのだ。

心労で髪の毛が少し抜けているのは誰のせいだと思っているのだ。

「お、おう。そんな怖い顔をするなよ」

「少し休みを与えては？ ベディヴィエール卿は私の知る限り、あまり休みがないようです」

「えええ？ 交代制導入したけど休んでないのか？」

「王はベディヴィエール卿以外に王を御せる人材がいるとお思いで？」

「いねえわな。そりゃそうなるわ」

ケラケラと笑うアーサー王に殺意が湧いてきた。

楽しそうに私の肩を叩きながら脱いでいた装束を肩に引っ掛けるように持つ。いつも楽しそうなアーサー王を見て羨ましく感じる。

この方は嫌なことはないのだろうか。

「というわけで」

わっ。

くると私の肩に置いた手で体を回されると、肩を組むように置かれる。アーサー王の温度を直に感じるような密着のし具合に少しドキリとした。いやいやいやいや。私は男色ではない。決して、ないのだ。

「ベディくんに命令します。今から俺と休むことを命ずる」

はっ？ いや、あのですね。

「王、遅くとも日が沈む前にお帰りください」

「あいよー」

グイグイと無理矢理連れて行くようにアーサー王は執務室から連れ出す。

……なんかいい匂いがする。
はっ!? 違う違う!

我が王、私もお供に。

「お前、どこでも現れるよな」

「アルトニウス卿」

む。ベディヴィエール卿。

「アルトリア、お前仕事は？」

馬の世話、畑の手入れ、騎士の指導。全て終わりましたが何か？

ええ、楽でしたよ。これも我が王への愛が為せるものです。

「無駄に優秀だよなあ、コイツ」

褒めちやる、と兜の上から頭を撫でてくださいる我が王。ちゆき。

ベデイヴィエール卿が隣で難しそうな顔をしているが文句あるのかこの野郎。

「丁度良かった。俺とベデイくんの馬を用意してくれ」

びゅーい、と指笛を吹く。調教され、音を覚えた馬は私の合図を聞いて走ってくる。

聞き分けの良いあの子達は、何があつても主人に従う。特にアーサー王の愛馬は主人の危険を感じ取るとすぐに飛んでくるほど懐いている。

まあ、危険に陥ることはないから旅のお供程度だが。

「……アーサー王もそうですが、アルトニウス卿も大概おかしいですよね」

「誰に似たんだか」

「隣で笑っている方でしょうね」

カツカツカと独特な笑いで笑い飛ばす我が王。ベディヴィエール卿は涼しい顔をしつつも、腹の中では毒を吐いているようだ。私にはわかるぞ。

ところで我が王。ダウン・スタリオンとラムレイが来ましたが、どちらを？

「ダウン・スタリオンはお前が使い。最近じゃ、お前の方に懐いている」

ほーれほれほれとラムレイと呼ぶ馬を可愛がるように撫で、優しく叩く。ラムレイも心地良さそうに鳴いている。

行方不明になっていた我が王がどこからか連れて来たが、ラムレイも中々の名馬だ。しっかりとと言う事も聞いて大地をどこまでも駆け抜ける子だ。

む。我が王、エクスカリバーはどうされたので？

「俺の部屋だ。ちよいと準備に必要なだから暫くは使わんぞ」

ああ。そういえば。

ヴォーテイガーンを討った後、我が王を迎えに行けば聖槍の力を纏う我が王がいた。

隣には、見たことがないほど真つ青な顔をしたマーリンもいた。鬱陶しいほどのテンションが嘘のようにナリを潜めていたのは大いに驚いた。

何かに縋りたいと訴えるような表情のマーリンは今、行方を晦ましている。

ベデイヴィエール卿が持っていたエクスカリバーを我が王が握れば、我が王の胸から出てきた光がエクスカリバーに移るのも見た。

これで真の意味でエクスカリバーは完成された、と我が王が言ったのは濃く記憶に残っている。

剣と鞘。エクスカリバーとそれを納めるアヴァロン。ヴォーテイガーンを斃したことでアヴァロンは更なる力を宿すようになった、とも言われた。

アヴァロンは妖精が住まう郷、理想が詰まった郷へ通じる扉に。

聖槍の力を初めて使い、我が王がさらに強くなったことで合わせて強くなった、とも聞かされた。

鞘はお持ちではないので？

「俺の中にある。まだ馴染んでないからもう少しだけ取り込んでおく」

「ところでアーサー王」

む。どうしたのだベディヴィエール卿。

「あの、私の馬がダウン・スタリオンとラムレイに怯えて逃げてしまったのですが」
「草生えた」

こちら、ダウン・スタリオン、ラムレイ。お前達は群れのリーダーだ。

群れの仲間を無暗に脅したりするんじゃないぞ。寧ろ、お前達があの子達を守るんだ。

そう叱れば、我が王もそうだぞと二匹の首を撫でる。不貞腐れたように鳴けば、鼻先でぐいぐいと我が王と私を小突いてくる。

ラムレイは特に我が王に、ダウン・スタリオンは主に私に。

ラムレイが雌、ダウン・スタリオンが雄だから異性に懐いているだけなのかもしれないが。

「しやあねえ。ベディくん、後ろに乗るか？」

「よろしいので？ —— はっ、やはりお断りを」

我が王、密着して後ろに乗りたいです。

「ステイ」

わうーん。

「ラムレイ、追いついた馬を連れて来い。あ？ お前が脅したんだからごめんなさいして来い。じゃないともう乗らんぞ」

ひひーん、と抗議をするように嘶けば不貞腐れたのがよくわかる様子でベディヴィエール卿用に呼び、逃げてしまった馬を追って行く。

うむ。ダウン・スタリオン、お前も謝ってこい。

嫌だ？ ならばもうお前を掃除してやらんぞ。自分で水浴びさせるくらい放置するぞ。

それが嫌なら行くんだ。

言葉を理解したらしいダウン・スタリオンはラムレイの後を追うように走る。

ラムレイもダウン・スタリオンも、普通の馬よりも力が強いからリーダーとは適切な

のだが。もう少しリーダーとして自覚を持ってくれると嬉しい。

「困った奴等だ」

と言いつつも、嬉しそうな顔をしている我が王。

前に拾った狼たちも可愛がつているようだし、我が王は動物は好きなようだ。暇を見つけるとよく遠出をしていると聞いている。

魔猪狩りをする時に狼たちを放ち、偶にカヴァースと名付けたリーダーの狼に跨って狩りをすることもある。

王という息が詰まる仕事に対する息抜きと言うが、ケイが考えていたよりもしつかりと王の仕事をしている。

与えられた仕事は嫌でもしないと、と語る我が王の輝きっぷりは思わず愛が溢れそうでした。

主に鼻から。

「お。そうだそうだ。アルトリアにベディくんも。君等二人は信頼できるからオフレコの情報を言っとくわ」

我が王がベディヴィエール卿と姿を消していた際に、ユースー王の宝物庫から持ち出された剣であるシヤステイフォル。その柄に手を当てながら我が王は我等に言う。

「何でしょう。アーサー王」

「ケイから言われたことだけだな」

少し悩むように顎を手で撫でる我が王。よく見ると鬚が少しまた伸びている。

「俺、結婚しそうだな」

よし。その相手を殺そう。

11 王の妃

我が王の花嫁は私だー！ー！ーツ!!!

「落ち着けアルトリアー！」

「叔母上、落ち着いてください！」

「いやー、想われてんなー（震え声）」

「感心してる場合ですかアーサー王！ 城が壊されているんです！」

「あ、アルトリアー。添い寝していいから落ち着こ？」

ぬがーッ!!

「ダメみたいですね、これは」

「出せ！ 我が王を誑かす尻軽女を！ 私が殺してやる！」

「うわあ。なんかロンゴミニアドの力を使えてんじゃん。怒りの力って怖いねー」

「感心している場合か！ 早く止めないとキャメロットが壊されるだろうが！ 造ったばっかりだぞこー！」

「うわああ！ 壺が割れていくううう！」

「叔母上、失礼！」

「邪魔をするな！」

「グホオ！」

「が、ガウエイナー!?」

「こりや、いかな」

また、目の前に障害が出てくる。邪魔をするなら――。

「はい。おやすみ」

――あ。この匂いは我が王の――。

「ドツと疲れた」

ハア、と息を吐きながらアーサー王は意識を飛ばしたアルトニウス卿の襟元を掴みながら引き摺り地面に寝かせる。

あつという間に脱ぎ捨てた服をアルトニウス卿に被せると、意識を奪ったアーサー王の技は惚れ惚れするものだった。

元凶はアーサー王の不必要な発言のせいだと思っただが。

「アルトリアは長い付き合いだからな。遅かれ早かれ伝えないといかんだろ」

「暴れるのはわかっていたがこれほど暴れるとは思わなかった」

「おいガウエイン、大丈夫か？」

ケイ様が頭が痛そうに抱えているのを傍目に、アルトニウス卿にやられたガウエイン卿を気遣うように手を差し出す。

ガウエイン卿ほどの騎士を一瞬で返り討ちにする光景は悪夢だった。槍を持たない手で決るように顎を殴って気絶させるのだから。

つくづく、アーサー王とアルトニウス卿は化け物じみた力を持っているようだ。

意識を飛ばしたガウエイン卿もすぐに意識を取り戻すのも大概あれだと思う。

「こりや、縁談は慎重にやらないといかん」

「俺としては結婚なんざしたくないんだが」

「あのなあ。前にも言ったがブリテンを統一したような王に王妃がいないと政治的に不利になる。いくらお前がブリテンの王でも、そこだけはしっかりとしないと反乱の種が知らぬ間に生まれる……おい、お前今、肅清できると喜んでないよな？」

「……………ワタシハナニモカンガエテイナイ」

考えていたな。アレは。

狩りもそうだが、賊を薙ぎ倒すのも好きなお方だ。反乱軍が現れると、面白いように反応し、率先して鎮圧に向かうだろう。

良くも悪くも、王に似合わぬお方だ。悪にも善にも取れる面白い王とも言えるかもしれない。

「いくつかの縁談はアグラヴェインと精査して厳選している。あとはお前自身が選べるように準備はしておく」

ですが、アルトニウス卿はまた暴れるでしょうね。

というか、やはりアルトニウス卿は女性だったんですね。

「あー、まあ、な」

あんなにアーサー王好き好きと言っていれば誰だつて気付きますよ。本音を言えばアーサー王が男色かとも考えたのですが。

「ベデイくんベデイくん。君は前にもそう考えていただろそうだろ？」

有無を言わさぬ笑顔。妙な迫力があつて顔を逸らしたくなる。しまった。失言だったか。

「あとで説教な」

お断りします（ニツコリ）

「来ないと君と寝ているところをアルトリアに見せます」

私に死ねと仰りますかアーサー王!?

「素晴らしい脅し文句だろうか？」

「何をしているんだお前は」

「いやー、ベディくんは弄り甲斐があるからさー」

評価が酷い。アーサー王の付き人をやめてもいいと思う。

「お前、ベディヴィエールに愛想を尽かされても知らんぞ。例の計画にも加える気なんだろう？」

「断るなら脅してでも加える」

やはりこの王は外道だ。

「計画を進めるにしても、縁談を進めて王妃を迎えることで成否が問われる。迎える王妃によっては、優秀な騎士も加えられる」

「面白い奴がいいけどなあ。吠えるだけの雑魚はいらんぞ」

「そこはお前に任せる。剣を交えればどんな奴かはわかる変な勘があるんだろ？」

「そこまではわからん。変な勘ならアルトリアの方が優秀だから俺たちで面接する」

アーサー王が戦い、アルトニウス卿——アルトリア卿が人柄を見る。

お二方は良いコンビだ。大雑把なアーサー王、それを支えるアルトリア卿。アルトリア卿が優秀でなければお二方の関係はこうも上手くいかなかっただろう。

アーサー王もここぞ、という時に最良の選択をするのも凄い。

アグラヴェイン卿、ケイ様。お二人の提案された案を改善したものを考え付くこともある。特に騎士の運用はその考えがあつたか、と唸るほどだ。

目に見えるほどの改善。特に、食糧運用。

手の空いた騎士を畑などに回し、ローテーションを組んで常に万全の状態に保てるように工夫をされている。

今では猪の肉以外にも芋などの農作物を安定して得られるようになってるのは民からの支持も厚い。

美味しい物を食べるのは人としての幸せ。幸せを享受できれば豊かになる、とアーサー王は言う。まさにその通り。アーサー王が治める地では民のほとんどがアーサー王を支持しているほどのだから。

「何か知らんけど俺にもっと上の立場が欲しいとか言うのもいるんだが」

「は？ 待て待て。いつの話だそれは」

「たまーにケイとアグルくんがいない時を狙ってるのかはわからんけど、来るぞ。王、自分の力を考えると今の立場は合っていないと宣うのがいる」

「……」

ケイ様が頭を抱えた。正直、私もそんなことになっているとは思わなかつた。

そういう輩はアーサー王が最も嫌う者。機嫌が悪いと殺されても文句は言えない。

「アーサー、そいつらの顔は覚えているか？」

「考えてやると言つて署名させた。ホイホイと書き込むから怒る気も失せた」

アーサー王が懐から取り出した羊皮紙には名前が書かれている。

完全に開いてみれば、少なくとも数人の人間が名前を書き込んでいるようだ。それにはケイ様も項垂れそうになる。

嗚呼、以前にアーサー王も言っていた。

真の敵は強力な敵ではない。寧ろ、内に潜む目立ちたがり屋かアーサー王の言う「吠

えるだけの雑魚」が足を引つ張ることが原因で瓦解する。

それも賢い、小賢しいのが最も厄介とも。

「そういう奴は普段は無能を見せないくせにここで、という時だけにやるんだから始末に負えん」

「経験談か？ 妙に実感があるが」

「あー、うん。まあ、知り合いがそうだったから」

「？」

？ ケイ様も同じような反応をされている。自分もそうだ。

凄く実感の籠った言葉だった。実際にアーサー王の知り合いがそんな目に遭っていると云わんばかりの様子だった。

珍しいアーサー王の表情を見れたのも戸惑わせる要因にもなっている。

「それで、ケイ。今から馬で走ろうと思ってるんだが、中止にしてまで俺に何か話したいことでもあるのか？」

「ああ、これだ」

ケイ様がアーサー王を呼び止めたのはケイ様の持つ羊皮紙にあるようだ。
アーサー王が羊皮紙を開いて目を通せば、渋い顔をなさる。

「縁談か」

ああ。これはアルトリア卿がまた暴れるな。

「名前は――」

モル
ゴース？
」

1
2 親子「
「
「

ど、どうなされました。ガウエイン卿、アグラヴェイン卿、ガヘリス卿。

「兄上、あの人って……」

「見間違えであつて欲しかった」

「何をしているのですか——」

お三方はあの方をご存じで？

イグレイン様やアルトリア卿に似ておられるようですが。

「あー」

「まあ、何ですか」

「……我等の母です」

(。 ㇿ)

「ベディヴィエール卿、何だその顔は」

い、いや。アグラヴエイン卿。アーサー王と語らう相手が、お三方の母親なのですか？

それにしては容姿が若すぎるような……それに、妙に楽しそうに話しているような

……。

お二方はキャメロット城のバルコニーにあるテーブルを囲んで雑談をされているようではあるが。

それよりも、モルゴース様の足元にいる小さなアルトリア卿みたいなのは何なのだ。

「アグラヴェイン、あの子供のことは知っているか？」

「いえ、上兄上。母上からは何も」

「ガヘリス、お前は？」

「知らねえ。久しぶりに会おうし、事情もわからねえ」

楽しそうに語らうアーサー王とモルゴース様。アーサー王の表情を見れば、無理をして作っている表情ではないのはわかる。

つまり、モルゴース様はアーサー王のお目に適う女性であるということなのだろうか。

あ。小さなアルトリア卿がアーサー王の足にしがみついた。その間に何やら短剣のようなものを剥き出しでアーサー王に渡しているが……まあ、アーサー王だから脅威にはならないだろうな。

更に、アーサー王の表情が面白くなつた。色々な感情が入り交ざつたような表情で何を考えているのかわからない。

驚き？ が強い。指が震えすぎて何本にも見える。震える指を子供に向けていた。

お三方、あなた方の母は本気でアーサー王との縁談を考えているのでしょうか。

「いや、流石にそれは」

「母上は親父、ロット王を愛しているはずだが」

「オークニーの現状がわからない今、母上がどう考えているのかまでは。ヴォーティガーンの被害が定かではない今、オークニーの無事までは把握できていないとしか」

ああ、ヴォーティガーンの影響で各地に小さくない被害があつた。

そちらの報告と修繕の指示を纏めていると、とても一つの国だけに集中するわけにもいかない。

「もう少しで被害状況を纏められるのでオークニーの現状はわかるのですが」

「いや、アグラヴェイン。お前が頑張っているのは知っている。今、できることを最大限にしているだけで王は満足されている」

「それに、アーサー様なら多少の失敗や我が儘は許してくれるって。お前はアーサー様のお気に入りだからな」

「上兄上、下兄上……」

そうですね。アーサー王はアグラヴェイン卿は頼りになる奴と言っていたので間違いはないです。

頑張ってくれているから少しは休みを与えたいけどなあ、と呟いているのをよく聞きます。

「王——」

アグラヴェイン卿が感慨深い声を出して口を手で覆っている。

「——ならば、何故もつとしつかりと仕事をしてくれないのだ——！」

……………。

思わず、目を逸らしました。ガウエイン卿もガヘリス卿も同じようにアグラヴェイン

卿から顔を逸らしているようだった。

「それも王の魅力ですから（震え声）」

「そ、そうそう。親しみやすい？ から（震え声）」

「おう、何か楽しそうだなお前ら」

何故だか必死にアーサー王に対するフォローをする羽目になった。

ガウエイン卿とガヘリス卿がアグラヴェイン卿をあれやこれやと手振り身振りでフォローをしている最中にモルゴース様と会話をしていたアーサー王がこちらに来了。

何故か小さなアルトリア卿と手を繋ぎながら。

「あの、王よ。その子供は？」

「ああ、こいつか？」

よつと、と子供を抱き上げて私たちに見えるようにしてきた。

こうして見ると、本当にアルトリア卿に瓜二つだ。幼くすれば、このような顔になるだろうと一目でわかる顔付きだ。

ああ、そういえばモルゴース様もアルトリア卿に似ている。ならば、母に似る子供も当然か。

「俺とモルゴースさんの子供らしい」

「。。」

「。。」

「。。」

「。。」

「ハア!? アーサーとモルゴース様の子供だと!」

え、ええ。間違いなくそうではないかと。アーサー王も自分の子供であると言える判断材料があるようです。

顔は似てなくとも、アーサー王の子である確信は持っているらしく。

モルゴース様の子と言えるのは、顔を見ればおわかりでしょう。自分の胎から産んだ、とも言っていました。

「…………ぬ、おつ。ごおおおおお…………」

け、ケイ様?

「胃が、胃が振じ切れそうだッ…………!」

ケイ様ー!? な、なにか薬は?!

「ふぎけんなよ…………! 次から次へと問題ばかり起きやがって…………! ここまでくる

「おつごええ……アーサー、事情を話せよ。隠そうとしたらお前でも殴るぞ。殺すぞ。寧ろ殺させろ」

紙に包まれた薬を水で流し込んだケイ様は睨むようにアーサー王を見る。殺意が籠つてゐるような視線だ。

恨みも積もつてゐるだろう。次から次へと問題を持ち込むのだから。尻拭いばかりしているケイ様からすれば怒つても怒り足りないだろう。

それでも、アーサー王を王として即位させるためにケイ様が出した条件を考えれば、ケイ様も覚悟の上で尻拭いをしているのかもしれない。文句を言つても、ケイ様が選んだ道なのだから。

「モルゴースさんによればベディクんと旅をしてた時に彼女が違う外見に化けて俺とヤつちやつたらしいぞ。三人くらいの女性と寝たけど、どれかねえ」
「おぶえええええ」

け、ケイ様ーツ！

た、確かにアーサー王は旅をしている時に女性と寝ていたが。

村娘、宿の女将、果てには旅の魔術師。覚えている限りでは、その三人が相手だったはずだ。

アーサー王はアルトリア卿とマーリン様に一泡吹かせようと女性との寝技を鍛えようと言っていたが、案外腰が引けて女性から誘惑して閨に引き摺り込んだのが真実だ。

しかもあれはアーサー王が女性に敗れているに違いない。悔しそうな顔をされていたのは今でも覚えている。

「おつま、モルゴース様は人妻だぞ。そんな相手と寝たのかお前は……」

「つーか、魔術で化けて襲われたようなもんだぞ。俺は女をナンパするのは駄目らしいからな」

「なん……胃が、胃があ」

「というか、女性に閨で可愛いと言われるのがどれだけ心にダメージがあるかわかるかケイ。アルトリアにもマーリンにも言われて男のプライドがペッキリと折れたわ」

愚痴で何度も聞きました。ダウン・スタリオンの上で項垂れながら運ばれる姿は哀愁漂っていました。

問題は子供ができたことではない。子供ができるのは素晴らしいことではあるが、問題はアーサー王の子供であることだ。

間違いなく火種になる。確認されているだけでも、アーサー王の子供はこの子だけだ。

周りはこの子が次代の王となると思うだろう。それも、普通の王ではなくアーサー王の子供だ。誰もが期待をするだろう。

「で、この子の名前はモードレッドというらしい」

モードレッド……。

この小さなアルトリア卿の名前はモードレッド。おっかなびつくりの表情をして自分とケイ様を見ている。

「認知するなどは言わせんぞ。俺の知らないところで生まれたとしても、俺の子であるのは間違いいからな。俺が育てることにした」

「待て。モルゴース様はそれを受け入れたのか？」

「モードレッドに決めさせたら俺が良いってさ。それと、モルゴースさんは暫くはこの

城に泊める。ちよいとあの人に問題が起きてな。問題を解決するまでは城にいるように俺からお願ひした」

「がおー、と気の抜ける声を出しながらモードレッドの脇の下に手を入れて高く持ち上げる。」

「おっかなびつくりの表情は楽しそうな表情に変わり、自分の体をアーサー王に預ける。なんともまあ、子供の楽しそうな顔は見てて癒されるものだ。」

「問題?」

「聞いたことがないか? 最近、ブリテンを荒らしまわってる連中」

「ああ、妙な連中か。報告は聞いている」

「その連中が徒党を組んでヴォーティガーンの後釜を受け継ぐように暴れ回っているらしい。モルゴースさんのいる地、オークニー? とかいう場所もそいつらに襲われて凄まじい被害が出ているらしい。」

「で、なんか楽しそうだからぶっ殺しに行こうかなと」

「それが本音かお前」

荒らし回る妙な連中……？　アーサー王、何の話ですか？

「ああ、まだケイとモルゴースさんくらいしか知らないのか。アグラヴェインはまだケイからの報告が届いてない状況だから多分、知らんだろうな」

「この後に会議する予定だったが、お前がそう言うなら火急の要件として扱った方が良いな」

「頼むわ。俺らも被害がないからと言って放置するわけにもいかんからな。あと久しぶりに気兼ねなく暴れたい」

「お前……ハアア」

いつものアーサー王でした。暴れられるチャンスができるなら、暴れるのがアーサー王でしたね。

それに、オークニーといえばあのロット王がいる国。あの国が大きな被害を受けるほどの強さを持っていることにもなる。

ロット王はつまり、ガウエイン卿、ガヘリス卿、アグラヴェイン卿の父親でもある。モルゴース様の夫でもあり、強い王とも聞いている。

「でもさー、正直言うとおット王とかいうの、好きじゃないんだよね」
「あ？」

「ロット王とかいうの、ユーザー派だったんだよな。俺が旅に出て、ベディくんがいない時にロット王の遣いを名乗るクソに王を退けと言われたから思わずイラツとしてぶつ殺したんだ」

「——は？」

「悪いかなーと思ってモルゴースさんに謝ったけど、気にしなくてもいいって言われた。ユーザーを引き摺り落としたことには感謝しているつてさ。で、キャメロットにはイグレインさんもいるから滞在を許可した次第です、はい」

「お前、お前……お前——ッ」

「ま。マーリンの弟子でもあるモルゴースさんが味方になってくれると言うんだからそれで十分やろ」

え。モルゴース様はマーリン様の弟子なのですか!?

「そうだよ。ついでに言うとおイグレインさんの娘でもあり、アルトリアの種違いの姉だ」

（ 。 。（ ）

「何その顔。ベディくんの新しい芸？」

どういふことなの……？

13 姉妹

「はじめまして王様！ 兄上達がお世話になってます！ ガレスと言います！」
「おう、よろしくな」

元気いっぱい挨拶をするのは何人兄弟なのか甚だ疑問を感じるガウエイン卿達の末っ子、長女であるガレス。

頭を勢いよく下げたからか、撫でやすい位置にあつたのだろう。慣れた手付きでアーサー王はガレスの頭をポフポフと音が鳴るように軽く叩いて歓迎の意を見せる。

アーサー王の撫でテクニクは昇天するレベル。と真面目な顔で不真面目な発言をするアルトリア卿の親指を立てる姿はとても女性のそれには見えませんでした。

アーサー王がモルゴース様と婚約をするのかは未定のようだ。しかし、モルゴース様はアーサー王の許可を得て滞在をすることになっている。

見惚れるような笑顔、淑女の振る舞いに相応しいモルゴース様も母親であるイグレイン様と再会をした時の反応はモルゴース様のイメージが崩れるものだった。まんまるに口を開けて呆然とする姿は何とも言えないものがあつた。

反対に、妹であるアルトリア卿と初めて会うと煽りに煽りまくっていた。アルトリア卿の一切の感情を削ぎ落したような無表情は見ものでした。

「つてか、ガウエインたちの妹なんだな」

「はい！ 末っ子でしたが、母上がモードレッドを生んだから末っ子ではなくなりまして。お父様的にはどうですか？」

「……………」

それもそうか。もしも、モルゴース様がアーサー王の妃になるならモルゴース様の子供もそのままアーサー王が父親になるのか。

ガレスに父親と呼ばれて耳の中を掃除するように指を入れながら首を傾げておられる。

「王」

そこに、ガレスの一番上の兄であるガウエイン卿が前に出てアーサー王に話し掛けた。
きた。

堅苦しい礼節を嫌うアーサー王は臣下や王の関係は忘れて何でも言ってもいいよ、と言ったことから王と臣下との間にできるだろう軋轢もほとんどない。

気軽に意見を言うからこそ、解決策も見つかるのだからアーサー王は凄い。狙ってやったのかはわからないが。

まあ、自分の欲を優先させて結果的に上手く行っている感が否めないが。

「私も父上と呼んだ方がよろしいですか？」

「殺すぞお前」

ガウエイン卿……。

そして何故ガヘリス卿は少し残念そうにしているのだ。

ぶつころ。

ぶつころぶつころ。

ぶつころぶつころぶつころ。

「残念だったわね我が妹よ。あなたが最も望むであろうアーサー王との子は先に私が生んでしまつてごめんなさいね」

自分と瓜二つの女。聞けば、私の種違いの姉らしい。母上からそう聞いても殺意が止まらない。

この女郎はやってはいけないことをしたのだ。よりにもよつて我が王と体を重ねた時から考えていた我が王との子を姉を名乗る外道に先に生まれたのだ。

正直、このまま殺したい気分だ。

プププと手を口に当ててあざ笑う姉は間違いなく煽ってる。ムカつく。

「もうアーサー王との子は可愛いわ。顔付きは私に似ているけど、瞳の奥に見える光、魂の輝きはアーサー王そのものよ」

うぬがぐぐぐぐ。

「我が子、アーサー王の子。モードレッド。あなたの姪でもあるわ。ねえ、お・ば・さ・ん」

ぐがーッ！

「フフン。無駄無駄。こう見えてもクズのマーリンの弟子。あなた程度では私に触れることも……待って待って。なんで障壁をすり抜けて私に触れる痛い痛い！ 胸を鷲掴みにしないで！」

この胸か！ この胸で我が王を誘惑したのか！

もいでやる。果实をもぐように千切つてもいでやる。二度と我が王を誘惑できないようにしてやる。

ついでに貴様の娘を私の娘にしてやる。安心しろ。顔は似ているから私の娘だと言つても誰もが信じるだろう。安心して死ぬ。

「お母さま！ 妹は何でこんな頭がおかしいことになつてるんですか！」

「アーサー王に対する愛が爆発してるせい、とアルトリアから聞いてるんだけどね。まあ、アーサー王を嫌うよりはいいんじゃないかしら」

「命の危険を感じているんですが!？」

わかるぞ貴様。貴様は我が王を愛しているのではないな。

貴様は何か別の理由で我が王の子を孕み、産んだ。そしてそれを利用して私に対して何かをしているな。おそらく、当てつけだろう。お前は幸せになるのは許さないと目が言っているぞ。

だが知らん。まずはこの胸をもぐことから始めよう姉上。

「なにこの頭おかしい子！ 綺麗にまとめてるつもりでもいきなり吹っ飛んだ結果に

なっているわよ!？」

竜の心臓から齎される魔力を出し、体に循環させて膂力を上げる。

ギリギリと姉上殿の胸をあらん限りの力で握り締め、姉上殿の悲鳴をじつくりと聞き届ける。

うむ。良い声で鳴きますね。姉上殿。

もつと鳴くといいですよフフ。

「あ、アルトリアー？　そろそろやめなさい。煽るモルガンも悪いけど、そこまでにしなさいな」

——む。母上が言うなら。

パツと姉上殿の胸から手を離せば、姉上殿は胸を押さえて床に座り込む。

涙目になる姉上殿に少しだけ胸がスーツとした。煽る姉上殿が悪いのですぞ。

さて。姉上殿。そろそろ吐いてもらいましょう。何かとんでもないことをしでかしますね？　私の我が王に対する愛で育んだ勘がそう言ってます。

吐きましよう。キビキビと。

「ぬぐぐぐ。我が妹ながら何でこんなことになっているのよ……」

「初めての姉妹喧嘩はそこまでにして。モルガン、何か隠しているなら言いなさいな。ほら、暴れそうなアルトリアは押さえておくから。ね？」

む。母上。幼子をあやすような格好は少し恥ずかしいのですが。

「こうして私がお腹を痛めて産んだ子達と一緒にいるのは嬉しいのよ。だから、ね？」

むう。仕方ありませんね。母上のお好きにどうぞ。

私としては恥ずかしいですが、母上に対する親孝行と思えば喜んで受け入れられます。

「もう、良い子ね。自慢の娘だわ……ああ、モルガンもね。しっかりと子供をアーサー王の手助けをできるほどに育てたのは素晴らしいの一言よ」

「お母さま」

残念だが母上の抱擁は私のものだ。

ペチンと母上に縋りそうな姉上殿の額を叩いた。邪魔をするでない。額を叩けば、姉上殿がプルプルと震え始める。

「こっの……！」

「アルトリア」

はい。おとなしくします母上。

——ハッ、この匂いはっ。

いる。部屋の扉からこっそりと覗き込んでいる人間が見える。

我が王と……子供？

「嘘だろ。覗いて一分も経ってないぞ。アイツは俺を見つuckerレーダーでも持つてんのか」

覗いていた扉から現れるのは、我が王。一応、この部屋は母上のイグレインの部屋。勝手に入るのもどうかと考えたのか、完全に開けた扉を少しだけ閉めて母上入室の

許可を求めていた。

律儀というか、女性に対する振る舞いは紳士の我が王。紳士にならずとも、獣になつて私に襲い掛かつてもいいんですよ？　そして子供を仕込んで欲しい願望が沸々と。

「うっわ。アルトリアが飢えた狼みたいな目で見てきやがる」

「ははうえー」

城の主である我が王の入室を母上が拒むわけもなく。喜びながらどうぞ、と促せば子供と共に部屋に入ってくる。

手を繋いでいた子供は我が王の手を引つ張りながら——私を通り過ぎて姉上殿の傍に向かう。我が王が苦笑しながらいつものように頭を撫でてくれるが、少しだけ腰が引けていた。何故だ。

それにしても。似ている。姉上殿と私が似ているのもあるのか、姉上殿と我が王……子供は姉上殿に似ているが、同時に私にも似ている。

我が王との愛の結晶と考えると姉上殿を殺したくなる。

「モードレッド」

「この子がモルガンとアーサー王の？」

「はい。お母さま。お母さまの孫でもありますよ」

「まあ」

スルリと母上が抱擁をやめてモードレッドという子供に興味が移る。

——そうか。これが絶望か。

「ま。しゃーないわな。本当なら二人の娘の片方と会えないと思つてたのに、こうして家族が揃つた上に孫までできていたんだ。イグレインさんからすりや、嬉しいなんて言葉じゃ足らんだろ」

我が王ツ。

「待て。最近のお前は怖いから抱き着くな」

お預けは無理です我が王！

「ステイったらステイ。お前の姪っ子でも見て落ち着け」

正直、妬ましくてしょうがないです。

「モードレッドになんかしたら許さんぞ。お前でも無視するからな——冗談だ。そんな絶望を感じてる顔をすんな」

我が王に無視されたら自害する自信がある。私は我が王のもの。身も心も我が王のもの。捨てられたりしても大丈夫だもん。大丈夫、だいじょ……。

「おい。頼むから死んだ目で涙を流すな。こつちを見ながら微笑むな。怖えんだよ」

いいんだ。我が王にはモードレッドという子供がいるんだ。もう私は用済みなんだ。愛でてくれることももうなくなつて……うええええええ。

「あー、泣くな泣くな！ 捨てたりしないから大丈夫だ。お前は俺の一番の騎士。お前が俺を捨てるまではお前を捨てたりはせんよ」

我が王を私が捨てるはずもないでしょう！

「はいはい。お詫びに抱き締めちやる」

……ギュツとしてくれる我が王。ムフー！

久しぶりの我が王の抱擁に悲しい気持ちも吹っ飛びました。やっぱり我が王がちゅき。

ふと、視線をズラせばモードレッドが母上と姉上殿に抱かれながらこちらを見ている。その目、顔にはありありと不満の表情が浮かんでいる。

今の状況を考えれば、私は好きな父親を取る知らない女に見えているのだろう。

ふむ。子供だからしょうがない。変わってあげよう。私はできる大人だからな（ムフー）。

「ははうえ」

すると、モードレッドが小さな手の指を私に突き付けてくる。

「あのおばちゃん、きらい」

今なんつったこのクソガキアアアアア!!

14 取り合い

……。

「ちちうえはおれのもの」

「何を言うか。我が王はお前のものではない。私のものだ」

……何度、これを見せられるのか。

頭が痛くなるのを感じながら目の前に繰り広げられるなんとも片や微笑ましい、片や醜い争いをしている。

モードレッドからすれば、父親を取られまいと抵抗する微笑ましい姿に見える。

アルトリア卿からすれば、愛する男性を大人気もなく子供と奪い合う何とも醜く見える。

アグラヴェイン卿が頭が痛そうにしている。

それもそうだろう。何せ、ここはアーサー王の執務室なのだから。

モードレッドならまだしも、アルトリア卿は何をしているのだ。仕事はまだ残っていないのではないのか。

奪われる対象であるアーサー王ははんこを押しながら争う二人を交互にあやしている。

馬鹿な。あのアーサー王が一番大人に見えるだど？ どちらかというと、アーサー王が一番の子供のように感じるはずなのに。

「モードレッド様、叔母上。王は仕事をしておられます。絡むのはせめて仕事の後にしてくださいませんか？」

「アグラヴェイン、邪魔をするならお前でもふっ飛ばすぞ」

「叔母上……」

アグラヴェイン卿が更に頭が痛んでいるようだ。
こつちも頭が痛い。なんで悪化しているのだ、この方は。

「モードレッド様」

「……」

「……何でもありません」

子供はズルい。そんな感想が浮かぶ。

アグラヴェイン卿がモードレッドにアーサー王の膝から降りるように言おうとすれば、泣きそうな顔になりながらアーサー王にしがみつく。

流石のアグラヴェイン卿もそれには勝てないらしい。苦虫を噛み潰したような顔をしなから下がった。

大きな子供と小さな子供の争い。何度見たことか。

ガレスとモルゴース様がカメラロットに来た時からだろうか。聞けば、モルゴース様が妹であるアルトリア卿を煽ったせいで暴走してしまったとのこと。

何をしているのかわからないが、原因はモルゴース様で間違いないだろう。

「いいよアグルくん。俺は構わんからさっさと終わらせよう」

「王よ、しかし」

「大丈夫大丈夫。アルトリアは兎も角、モードレッドは子供だし、父親に会えて嬉しくて堪らんのだから少しは好きにさせてやってくれ」

「我が王、私が兎も角とはどういうことですか」

「お前は仕事をしろ」

「もう終わらせました」

「うっそだろお前。まだ昼過ぎたばっかだぞ」

アーサー王が外を見れば、まだ太陽が完全に昇ったばかりだ。

朝からしても、いくらなんでも割り当てられた仕事を全て終わらせるのは早すぎる。

「お前、仕事を終わらせるの最近また早くなってないか？」

「我が王への愛がそうさせたのです」

「それを言えば良いと思っっているなお前。聞き飽きて心に響かんわ」

「馬鹿なッ!？」

それはそうでしょう、アルトリア卿……。

「……ん？ アグルくん、これ」

「はい。例の蛮族の調査報告です」

「お。でかした。頑張ってくれた奴には労いをしてやってくれ」

「既に手配を。長期間、密偵をしていたので休みとテルマエの使用を許可しました」

「優秀」

グツと親指を立てながらアグラヴェイン卿に向け、顔だけはその報告に向けていた。

その横を、アルトリア卿が覗き込む。無駄に優秀なアルトリア卿であれば、何が書いてあるかわかるから意味もわかるだろう。

「……これが、蛮族？」

「絵、上手いな。逆に上手すぎてキモさが際立つてるぞ」

「アグラヴェイン、これらが例の暴れている連中か？」

「ええ。わかつているだけでもブリテンの先住民であり、普通の騎士ではとても太刀打ちできないほどの力を持っているそう。既にいくつかの小国が滅ぼされているよう

です」

少し気になった。アーサー王の許可を得て私も見てみる。

……これを人と呼ぶのは抵抗がある。報告を見ても、普通の人間より背が高く、肌の色も普通ではない。なんだこれは。

「んー」

「? どうされました、王」

「なーんか見覚えがあるな。どっかで会ったっけ?」

うーん、と何かを思い出そうと指で頭を刺激している。

「ヴォーティガーンの子飼いはちよつと違うしな。アレはサクソン人だっけ?」

「ええ。卑王ヴォーティガーンの手引きでブリテンに渡ってきた傭兵です」

「つてことは、ピクトの方か」

「ピクト? 王よ、この蛮族のことをご存知で?」

か。
アーサー王が言うピクト。聞いたこともないが、アーサー王はどこで知ったのだろうか。

「ベデイくんも知って……ああ、記憶封印したんだっけ」

???

「無理に思い出さなくてもいいぞ。ベデイくんは忘れていた方が良い。

で、だ。ピクトってのはピクト人のことだな。元々、このブリテンにいた先住民って説があるらしい」

「先住民？ この蛮族は我等よりも先にこのブリテンの地にいたのですか」

「みただよ。系統としてはケルトの系譜に近いっぽい。ルーン文字を体に刻んで戦力を上げて、多分だけドイツ等エイリアンと繋がりがあるぞ」

「えいりあん？」

えいりあん、とは何だろうか。

それよりもアーサー王、無理に思い出さなくてもいいってあなたは何を知っているの

ですか。

「ま。エイリアンって言葉は頭の片隅にでも置いておきな。今じゃ、言葉を知っても意味はわかんねえだろうし」

と、その報告の羊皮紙にはんこを押し付ける。アーサー王が議題と書かれた箱に入ると、次の羊皮紙に手を伸ばした。

仕事はまだ残っている。アグラヴエイン卿と自分はまだしも、モードレッドとアルトリア卿は完全に邪魔者であるし、本音を言えば大人しく執務室から出て行って欲しいのだが。

まあ、言えばアルトリア卿のパンチが飛んでくるんだろうなあ。

「——ハッ」

「ど、どうされました？」

流れるように羊皮紙を読み、はんこを押ししていたアーサー王が何かに気付いたように声を出す。

「なんか俺、判子を使って仕事をして楽をしてるけど、楽をしてるだけで休んでなくね？」

「——ハッ！」

喋っていても手だけは止まらないのは流石か、アーサー王は自分の思考とは別に手は動くらしい。

というよりも待て。アーサー王、よく考えれば食事と寝る以外に休みを取ってないのでは？ 普通に仕事をしているか視察をするしか見ていない気がする。

これはま、まずいのでは？ アーサー王は休みをほどほどに。と騎士たちにお触れを出している。なのにそれを出したアーサー王ができていないのは少々問題があるので。

「何で気付かなかったんだよ俺」

「ちちうえ、やすすでないの？」

「みたいだなー。読んで判子を押すだけの楽な仕事だから苦にもならなかったわ」

切羽詰まったような表情が嘘だったかのようになり、アーサー王は執務を再開する。

その傍ら、アグラヴェイン卿が珍しく目を見開いて驚いた顔をしている。アーサー王のスケジュールを管理しているアグラヴェイン卿がアーサー王が休んでいないことに気付かなかったのか？

——ああ。アーサー王の並外れた思考と身体能力で見誤ったのかもしれない。

疲れるアーサー王など、あまり見ない。王になる前も誰よりも動き、誰よりも元気があつたのを思い出した。

「あの、王。お休みを取りましようか？」

「いいよいいよ。報告は毎日、山のように届くんだろう？ 中には重大な決断が必要なこともあるんだから休むわけにもいかんだろ」

「……申し訳ございません。王に休みがないことに気付かずに」「それを言ったらアグルくんもでしょ」

……今までアーサー王に対して愚痴を言っていたが、アーサー王は私よりも働いてい
るではないか。

自分はただ、部屋に立っているだけ。たまにアーサー王と会話する程度で時折、届け

物をする程度の仕事しかしていない。

なのに、王は毎日決断を迫られる仕事をしている。なのに私は――。

「終わりかね」

「ええ。王、少し時間をいただけますか。スケジュールの調整をケイ様としたいのですが」

「ついでにベデイくんも連れて行きな。ベデイくんも俺のスケジュールに合わせてるんだから必要じゃろ」

アーサー王はほんこやら執務に必要な道具を片付けると、膝に乗っていたモードレッドを抱き上げる。

「モードレッド、あまり邪魔しないで偉かったぞ」

「おれ、えらい？」

「偉い偉い。ご褒美に父ちゃんと遊ぼうか」

後はよろしく、とモードレッドと共に執務室から出るアーサー王。当たり前のように

アルトリア卿が追い掛けるが、止めようとしても殴られるんだろうなあ、と思ってそのままにした。

アーサー病とはよく言ったものだ。ケイ様が胃が痛そうに言っていたそれは今のアルトリア卿にピッタリな言葉だった。

アグラヴェイン卿と目を合わせ、揃って息を吐く。もう雰囲気重い。

「わーはははは。やっぱエイリアン2最高やんけ」

いや、アーサー王！ ピクト人をこれと表現するのは如何だと思えますが!?! いや、

何となくわかるんですが！

「他にもプレデターとかあるぞ。寧ろ、プレデターがピクト人に似てる気がするぞ……ん？ エイリアンは子供の時に見てトラウマ？ マスターちゃんも可愛いところあるな。ほれ、抱き締めて安心させちやる」

ああ、またマスターを甘やかして。

実の娘のモードレッドがまた嫉妬しますよ。アルトリア様もまた夜這いを仕掛けてきます。

「二週間くらいはマーリンの魔術で俺の部屋に入れんようにしてるから、暫くはマーリンのご機嫌取りだな」

マーリンの機嫌が良かったのはそれですか……。

「ほれ、最近はやスター勢の鯖が増えてるからアルトリア対策はバッチリだ——と言いたいが、アイツは数を重ねる度にぶち破るんだからおかしいよなあ」

最近はやいバーの方のアーサー王が白目剥いてますよ。オルタの方は害虫を食い潰したような顔がデフォルトになるくらいになってます。

ランサーの方のお二方もアーサー王にアタックし始めているのはカルデアの噂になってますが。

「なんとというか、謎のアルトリアXの言うアルトリア顔特攻（意味深）でも付いてるんじゃないかってレオナルドに言われたわ」

……。
そういうえば、救世の聖女とそのオルタ、クラウドイウスも妙にアタックしてますね

「ついでに沖田総司とかいう吐血っ子もだ」

うわあ。なんとというか呪いとか祝福でもあるんですかね。

「取り敢えずあのクソドラゴンをもう一回殺したくなった」

正直、私も同様です。記憶が吹っ飛ぶ原因にもなった畜生以下のゴミ神は信仰に値しない存在です。

「父上！ 俺もハグ！」

「はいはい。お前も大人になったという割には甘えるよなあ」

犬っぽいですよねえ。モードレッド。

今回、我等が集まったのはアーサー王が久しぶりにエイリアンを見たいとのことで、カルデアのマスターとどこからか飛んできたモードレッド、マッシュ嬢、ロマニ殿で映画を見ることになったのが経緯。

あんな気持ち悪いのが存在するとは思いたくないが、似たようなのはブリテンにいた。マスターがトラウマになるのもわかる。アレは幼子には恐怖でしかないだろう。私もちよつと怖い。

「んじゃ、次はプレデターでも見るか」

アーサー王はDVDを入れ替える。パッケージの絵はどうしてもピクト人に見えてしょうがない。

リモコンをアーサー王が持ち、マスターとモードレッドがピッタリとアーサー王にくつつく。そして再生ボタンを押して――。

ふざけるな！　こんなの、まだプレデターの方がマシではないか！　ピクト人はどれだけ頭がおかしい存在なんだ！

15 断罪

「は？ 君タチが自分は強いから上の立場をくれって言ったんだろ？ その強さを持つてるなら証明してくれよ。俺はなんか無理なことでも言ってるか？ なあ？」

「そうだな。良かったじゃないか。王が見てくれている中、強さを証明できる場を与えられたんだ。騎士なら名誉なことだろう？」

「今更、やめるってのはなしな。君タチには既に褒美としてそれなりの立場をあげてるんだからさ……あ？ こんなことをしてどうなっても知らない？ 父に言い付ける？」

じゃあ聞くが、お前のパパは俺よりも偉くて強いのか？　俺をどうこうできるだけの力を持っているとでも？」

むう。ケイも我が王も一気に攻め立てるように何人かの騎士を問い詰めている。完全に自業自得ですが。見栄を張るところなるといふ良い例ですね。

「俺は日頃、口酸っぱく言ってるだろ？　口だけの雑魚はいらねえつて。自分の力をしっかりと見極めた上で自分の出来ることをする人間は好きだけど、己の力を過信する愚か者と親の権力をアテにする馬鹿は大嫌いだ」

名剣シャステイフォル。我が王は最近、エクスカリバーを持つ機会が少ない。

だからか、城内ではシャステイフォルは王が裁きを下すときに用いられる断罪の剣であると言われている。

エクスカリバーは外敵、シャステイフォルは内敵。我が王は考えずに使っているのだろうが、そういった使い方をされることが多い。

私と同様、武器はなんでも使える我が王だが、執務室で仕事をすることが多いから剣を振るうことがあまりない。剣を振るう機会が少なくなつたことから、聖槍ロンゴミニ

アドも使つておられない。

それでも、劍は鈍らないのだから我が王はやはり素晴らしい。

エクスカリバーで威厳を示すように、シヤステイフォルを使つて王のポーズを取つておられる。

鞘に入つた劍を見せるように柄に手を添えて地面に突き立てる我が王の風貌は、言い訳を許さないとばかりに凄まじい威圧感を感じさせる。

それに当てられてちよつぱり興奮した。

「故に、女だから騎士は許されなんと言ふアホもいらなんだよ。俺は優秀な人間なら誰でも雇う。女だろうが、お前らが下民と呼ぶ者も喜んで使う」

現在、我等は蛮族の討伐に赴いている。

その際に、兼ねてから問題視していたクソみたいな騎士の待遇を決める動きが出た。断罪とも言える。

私も断罪には賛成ですが。女給の扱ひも酷い上に無駄に偉そうにしては私の言う事を聞かない。これだけ揃えば寧ろ死ぬと伝えたい。

多分、私が女であると明かせば更に見下しては我が王の害になるだろう。さつさと死

ね。

我が王にワガママを言つて悩みの種になるならそれだけで敵認定だ。死ね。

「別に逃げてもいいぞ。優しい俺は命だけは助けてやる——さて、お前らに残された道は三つある。

ひとつ、このまま蛮族討伐の先陣を切つて戦う。お前らが強かつたら生き残つて、望んだ地位も手に入る。万々歳だろう？

で、二つ目だ。俺をだましたことを謝つてキャメロット城から永遠に出て行くか。

そして最後。このまま無様に尻尾を巻いて逃げ出すか。その場合、二度と騎士を名乗れないし、ブリテンの地を踏ませない。少しでも姿を見るようなことがあれば問答無用で殺す。命乞いをしようとも、惨たらしく殺してやる」

我が王の殺気。本気で誰かを殺すと全身で表現するのは久々だ。

ビリビリと空気が我が王が発する覇気が揺るがしているのはそこにいる誰もが感じているだろう。

——うむ。私も感じてちよつと濡れてしまった。どこがとは言わないが。

というか、マーリンは何をしているのだ。ヴォーティガン討伐から姿を見ないが。

「さあ。選べ」

トドメとばかりにシヤステイフォルの収まった鞘で地面を高らかに打ち鳴らす。それをきっかけに問題の騎士が本当に情けなく背中を見せて逃げ出した。

しかも逃げた先は蛮族が潜んでいるであろう場所だ。自ら地獄に飛び込むとは、中々に面白い阿呆だったな。

逃げた騎士を一瞥した我が王は胸糞悪いと言わんばかりに唾を地面に吐き捨てる。我が王のたいえ……あ、はい。大人しくしています、ケイ。

「はー、疲れる。アグルくん、悪いけどあの二人を呼んで」
「ハッ」

今回、蛮族討伐に赴くに当たって、我が王はアグラヴェインの策を使って騎士をいくつかの部隊に分けた。

ガウエインは行きたそうにしていたが、姉上のお達しで家族の時間を作ってキャメロット城に留守番である。

家族の時間を作るといふ割には、ガヘリスとアグラヴェインは今回の遠征に来てい
すが。

ああ、あとはあのモードレッドが泣きながら我が王にしがみついていたね。

行かないでと泣き叫ぶ姿は可哀そうに感じましたが、蛮族対策はブリテンの平定には
必要なのだ。我が王が困ったようにモードレッドの相手をしてしたが、私がそう言えば
モードレッドは頑張つて待つと言つた。

その時の我が王とアグラヴェインの顔には一言申したかつたが。なんか文句でもあ
るのかこの野郎、とアグラヴェインだけに言いました。

我が王？ 嫌われたくないのでやりませんよ。

「こつちの都合に付き合わせてすまん。グループ分けはアグラヴェインに任せてある
から、分隊長はアグラヴェインからの指示に従い、各々の仕事に励んでくれ」

クソ騎士の断罪の間、騎士に相応しき振る舞いをする騎士たちは後ろから見守つてい
た。

一言も喋らなかつたが、我が王の殺気には震えていたのはわかつた。我が王の殺気に
耐えられるのであれば無条件で我が王の側近に選ばれるだろう。

無茶は言わない。我が王は凡人には計り知れぬ力を秘めているのだから。

待機していた騎士に言葉を投げ掛けると、我が王は我が王専用の天幕の中に入る。

アーサー王が使う天幕ということで、一際大きい。アグラヴェインたちが報告するのにも使うからか、普通よりも更に大きい。

付き従うように共に天幕に入れば疲れたような息を吐いた。

我が王、お疲れならお膝をお貸ししましょうか？

「襲ったら追い出すぞ」

しませんとも。

「信用ならんなあ……でも頼むわ。なんか疲れた」

お任せください。では、こちらへ。

我が王、アーサー王専用の天幕に用意された最上の敷物。まずは私が先に座って我が王が頭を置きやすいように姿勢を調整する。

我が王はほんの少し、絶妙に肉が付いた感触が好きらしい。我が王は隠しておられる

ようだが、女性の膝に頭を置く行為が好きなのは見ればわかる。

うむ。こつそりと私の腿に手を這わせようとしたのはわかりますぞ。

準備も整い、後は愛しい我が王の頭を置くだけになった際。我が王は頭を置こうとしてジトツとした目で見てくる。

「襲うなよ」

天幕ではしませんとも。流石の私でも戦前に情を交わそうなどとは思いませんよ。ですが、キャメロット城に帰った時や人目がない時は別ですが。

「頼むからさあ。俺、王様だぞ。王様を逆レする家臣とか世界を探してもお前しかいねえだろ」

文句を言う我が王ですが、私の魔性の腿肉には勝てなかつたのでしよう。大人しく私の膝に頭を乗せてきました。

いつものように、乗せられた我が王の美しい黒い髪の毛を愛できるように撫でる。触り心地は素晴らしいとは言えないものですが、撫でるだけで私の心は満たされる。愛しい

者を愛でる行為はこうも心が満たされるのかと幾度も思う。

出陣まで時間はある。それまで少しでも休めるように癒さねば。

——ムラムラしてきた。

「おいコラ。不穏な気配を感じるぞ」

ハッ。何も考えてませんとも。

「モードレッドが来てからお前、酷いぞアルトリア。子供相手に大人気ないし」

何を言いますか。ケイも言ったように、モードレッドは危険な存在です。

アーサー王の子供であるならまだしも、相手はオークニーのロット王の妻です。つまり、不義の子なのですよ。

これ幸いと我が王を嫌う者が指摘して反旗を翻すでしょう。

だからこそ、モードレッドは許されぬ子なのです。

「アホか。それは大人の都合だ。子供であるモードレッドは何の罪もないだろう」

ええ、ですが。世界とはそういうものなのです。我が王よ。

「……めんどくせえ。やっぱこの世界は滅んで正解だわ」

我が王、今、なんと？

「ああ、もうお前にも隠すのはやめておこうか。もうマーリンにだけは話したし、ベディくんも知ったけど記憶をふっ飛ばして覚えてないし——」

——我が王から語られるのは、このブリテンの真実ともいえるもの。

なるほど。マーリンがあんな様子になるのも納得できる。マーリンは真実に耐えられずに逃げ出した、ということか。

が。私はその程度のことでは我が王を嫌うものか。離れるものか。

決別するならしてもいいぞと言うが、この身も心も全て我が王のもの。

故に、離れるなどありえませんが。裏切るなどありえませんが。好きに我が身をお使いください。

「——いいのか？ お前の生まれ故郷を滅ぼすと言っているようなものだぞ」

我が王が、私の故郷です。

「……………そうか」

我が王？

告白のように我が王に告げれば、膝に乗る我が王の顔は嬉しい気持ちを精一杯堪えているような顔をしておられる。

そして、私の顔に触れてきた。頬を慈しむように触れてきて思わず体が固まるのがわかる。

我が王からこんな風に触れてきたのはいつ以来だ。思考が定まらない我が王我が王我が王の手が私に私に触れ触れ触れ触れ触れ——。

「ありがとう。これしか言えないが、本当にありがとう。アルトリア」

がまんできるか！！！！

「ん？ 待て待てアルトリア。なんで肉食獣みたいな目で俺を見る。おい待て待て待て！ 何をする！ 戦前に情を交わさないと言ったのは何処のどいつだオイ！ 待って、待ってくださいアルトリア！！サン！ 今からトリスタンとランスロットが来るの！ やめて！

アツーーー！！！！」

我が王、お食事を一緒にどうですか。

「……あのなあ。俺が断つても無理矢理来るだろ？　マスターちゃんの許可を得たらいいぞ」

リツカ、よろしいですか？　よろしいですね。失礼します。

「押しが強すぎい……うん？　昔からこうだぞ。二回目に会って飯を食わせたらいつの間にかこうなってたんだ。これが約束された勝利を齎す勝利の女神とは思えんだろ？」

うむ。我が王の隣。今日も満足。

カルデアも中々美味しい食事を出す。ブリテンが酷すぎただけだと思うが、美味しい飯は

幸せを齎すという我が王の言葉はやはり間違っていないかったのだ。

「で、女神だなんていわれる原因にもなったのはトリスタンとランスロットにアルトリアが女だとバレたのが原因でな。逆レされようとした時に性別がバレた……うん？ おかしくないかって？ 昔のブリテン、女の方が押しが強かったぞ。モルガンしかり、ギネなんとかとか。アルトリアは筆頭だったよ」

よ。お言葉ですが我が王。ランスロットだけは嗅覚だけで私を女だと見抜いていましたよ。

我が王がいない間、鬱陶しいくらいナンパされていました。

「やっぱりアイツはゴミスロットだわなあ。人の女だけしか愛せないクズじゃなかったら完璧な騎士なんだけどなあ」

今日の我が王の食事はカレー。それも、カルデアの腕利きが揃う食堂が振るうカレーだ。

あつという間に平らげると、使っていたスプーンを啜えたまま重い溜め息を吐かれ

る。

蛮族対策に乗り出してからは、ランスロットの寝取り案件はキャメロット城の重要な問題の一つとして数えられるほどだったからな。大層、悩んでおられたのは知っている。

ギネなんともホイホイと我が王を捨ててランスロットに走ったのは今でも許せん。我が王の王妃という立場を得ながら浮気をする尻軽は死ぬべきなのだ。そう、何度でもだ。

「お前さあ。マスターちゃんから聞いたけど、俺が消えた後に追放したギネヴィア殺しただろ」

後悔してませんとも（キリッ）

「俺とケイ、アグルくんで必死に考えた策を台無しにしやがって」

我が王の魅力に気付きながら二人の男を選ぶクソ○ツチが悪いのです。

「まあ、てなわけだ。俺たちの歴史は大体コイツの暴走で記されたりしたもんだよ……え？ 俺も大概のことをしているって？ ハハッ、否定はしないね。どうせ滅ぶ世界だから好き勝手にした結果があれだよ。笑笑笑笑。」

「……ん？ それでもアーサーさんは色々な人を救ったから笑わないよって？ もー、マスターちゃんは人たらしだなあ。めっちゃ好きだよわ」

むぎゅー、と聞こえるほどのハグをリツカにする我が王。うらやましね。

我が王、前から思っていたのですがリツカとの距離が近すぎませんか？

「絶妙に心地が良い距離感だから付き合いやすい。お前みたいにガツガツ来ねえし、おっさんでもマスターちゃんの彼氏に立候補したいレベルの良い子だよ」

リツカ、ムカつくので殴らせてください。

「おいやめろ。あの夜這い三人衆と戦争になるだろ。前にカルデアが崩壊寸前までに追い込まれたのを忘れたか」

あの三人を相手にしても勝てますが何か？

「……………ハア。お前、暫くまた俺の部屋に入室禁止」

馬鹿なツ!?

「んじゃ、マスターちゃんには続きを話そうか。トリスタンとランスロットにアルトリアの性別がバレた後の話になるんだが——」

16 変化

結論から言えば。

我が王の独壇場でしたな。ブントツ、と剣を振るうだけで蛮族が吹き飛ぶのだから。

ピクト人と呼称される輩は人間とは思えない怪力で騎士を蹴散らす様を見せ付けては、どつしりと構えていた我が王も腰を上げざるを得なかった。

鳥野郎とクソ野郎が奮闘していたが、野生じみた戦いをするピクト人相手では手古摺るらしく、苦戦をしているのは見えた。

私は我が王の護衛を優先して前線には出なかったが、確かに戦いにくい。

うーむ。私としては我が王の雄姿を見れるから戦うのは構わないが、騎士も我が王がいるから必死で戦わないように見えてしょうがない。

我が王を引き出すためにわざと戦線を下げているようにも見えるのだ。無論、アグラヴェインも気付いている。

となれば、わざとなのだろう。キャメロット城に帰ったら全員の根性を叩き直してやる。お前達よりも狼たちの方が活躍していたのは情けないと思わないのか。

「ピクト人マジプレデター」

ぐでえ、と天幕の中で溶けているかのように寝転がる我が王。

——我が王——。

「だめ」

くうーん。

「あんなことをしでかすといて膝枕させてもらえると思ってたんの？ 枕役は狼で十分だ

から」

小さく唸るのは我が王が飼う狼の群れでそれなりの大きさを誇る一匹。床に身を投げ出して我が王の枕代わりになっている。ズルいぞ。

罰として膝枕の役目を与えられなくて悔しい。そんなことだけで禁止するのはないと思う。

「ま。隠していたけどこのアホは女性だから」

指差してくる我が王はこの場に他にいる人間、久しぶりに戦線を共にした鳥野郎とクソ野郎。トリスタンとランスロットに私の性別を明かした。

何とも言えない顔をしているのはトリスタン。あれは性別を隠していて、どう反応をすればいいのかと困惑しているな。

逆に、トリスタンと似たような顔をしているのはクソ野郎ことランスロット。微妙に演技臭いが、このクソ野郎は一对一で顔を合わせると口説いてくることを考えると演技をしている確率が高い。

勘は良からぬことを考えている、と訴えてくる。

残念だったな。私の身と心も我が王のものだ。お前みたいなクソ野郎に許すわけがないだろう。

「王よ、女性を騎士として使うのはいかがなものかと」

「そういうのはアルトリアよりも勲功を立ててから言うもんだぞトリスタン。言つとくが、武功はアルトリアの方が上だぞ。」

「というか、誰よりも優秀なアルトリアを使わないとかアホしかしないぞ」

ビシビシと突き立てるようにトリスタンを指差せば、アイツの顔が面白いように歪むのが見える。

うむう。我が王の故郷ではここまで男尊女卑の風潮はないと言っていた。そんな素晴らしい場所があるのかと興奮したものだ。

まあ、文句を言うならそいつよりも優秀であれということだ。

無駄に優秀な人間は粗を探すよりも自分を磨くことに集中する。あくまでも私の経験談だが、嘘ではないだろう。

我が王もそうだ。武は誰よりも強いが、それを鼻にかけることもないし、人のためあれと使えるお方だ。

しかしまあ、少ししたらその力を使って世界を滅ぼすんですが。

「で、だ。今回お前らを呼んだのはある誘いがあるからだ」

「誘いですか？」

「そうだ。並々ならぬ力を持つ騎士として、俺からの提案みたいなものだ」

だからこそ、割り当てた領地からわざわざ来てもらったと我が王は言う。

一つだけ言うのならば。ランスロットはいらなかったと思うのですが、我が王よ。

「じゃあ言うぞ。お前ら、俺直属の部隊に入れ」

「ただいま、モードレッド」

「ちちうえ！」

嬉しそうな顔でアーサー王に抱き着くのは娘であるモードレッド。いやあ、ほっこりしますね。

まさかアーサー王に留守番を言い渡された上にモードレッドのお守を頼まれた時はどうしようかと思いましたが、モードレッドの遊びに付き合うのも楽しいものでした。

アーサー王の武勇伝を聞きたいと聞かれた時は慎重に考えに考えた上でイメージが崩れないようにするのに一層の努力をしました。ええ、大変でした。

頭のおかしいアーサー王のマトモなエピソードはいくつかありましたが、モードレッドの望むような理想像に合う話をするとなると迷いましたとも。

ところで、アルトリア卿が凄まじい目をしているのですが、こう、なんちゆう目してんだと言いたくなる顔ですね。

小さな子供にも嫉妬するアルトリア卿はいつも通り、と。

「おう、ベデイくん。お守、ありがとな」

いえいえ。楽しい時間を過ごせました。

それよりもアーサー王、その手にあるものは？

「ん？ カヴァスからのプレゼントだ。アイツの子供の一匹を俺の子供に、つてさ」

アーサー王の腕の中で気持ち良さそうに眠る狼の子供。カヴァス譲りの白い毛がふわりと立っているように見える。

カヴァスの子ということは将来、あそこまで大きくなるのだろうか。

モードレッドに狼を渡すのですか？

「ああ。とある諺があつてな。『子供が生まれたら犬を飼いなさい』つてな。俺もそうだったからモードレッドにもあげようかと思つたわけだ」

？

「おつと、まだ続きがあつたんだつた。あーつと……

『子供が赤ん坊の時、良き守り手になるでしょう』

〃子供が幼少の時、良き遊び相手になるでしょう〃

〃子供が少年期の時、良き理解者になるでしょう〃

〃そして子供が青年になった時、自らの死をもって命の尊さを知るでしょう〃

だったな、うん」

……うむ。まあ、なんだ。

アーサー王はたまにこうして良い事を言うのだから魅力的なのだろうと感じさせられた。

「俺が言ったんじゃないからな？ とある国の諺だから」

どこの国だ。ローマなのか？

「というわけでモードレッド。今日からこの子はお前の相棒だ。大事に育てるんだぞ」

眠っている狼の子供をアーサー王の足にしがみついているモードレッドに手渡す。その衝撃で起きたらしい狼の子供がアーサー王から離れたくないとばかりに暴れ始め

るのは当然だろう。

恐る恐る、モードレッドが暴れる狼の子供を抱けばいやいやと暴れる。

「わっわっ」

「懐かれるのも第一歩だな」

狼の子供を宥めようと頑張るモードレッドを撫でるアーサー王の笑顔は完全に父親の顔。人間、意外な面があるんだなと思わされる。

正直に言えば、最も父親に似合わないお方だと思っていたのだが。

「まずは名前を考えることからだな」

「ちちうえー」

未だに暴れる狼の子供に、モードレッドが泣きそうになりながらアーサー王に助けを求める。

アーサー王が遠征している間、ずっと寂しそうにしていたのが嘘のように表情が豊かになるモードレッドは父親大好きな子供なのだろう。泣きそうになりながらも楽しそ

うに見える。

「じゃ、ベディくん。今日までお疲れ様。もう少し休みを取ってから本来の仕事に戻ってくれ」

わかりました。アーサー王はどうされるので？

「ケイとアグルくんと緊急会議だ。遠征で厄介なことになっちまったからな」

厄介なこと？

「ああ。アルトリアのアホが俺を逆レしようとしてトリスタンとランスロットに性別がバレた」

（ 。 皿 ）

「そんな反応になるわな。俺は泣きたいよ」

アーサー王——おいたわしや。

モードレッドが気付かずに娘になっているわ、アルトリア卿は隠していた性別をバラすわ。下の騎士は好き放題するアホがいるわ。

運が悪いってレベルじゃない。

そして何故アルトリア卿はドヤ顔なのだ。

——これは、まだカルデアがブランドオーダー聖杯探索に乗り出して間もない頃の話。

準備は整った。心強い味方であるあの伝説のアーサー王本人も協力してくれることになって、一気に壊滅状態に追い込まれたカルデアはなんとかやっていけそう。

ダ・ヴィンチちゃんもロマンも伝説のアーサー王が味方なら光明が見える、とまで言

わしめるほどの力を持ったアーサーさんなら、何があっても大丈夫という謎の信頼を持てる。

「はっはっは。本来の力の三割も出せないクソ雑魚だけどおじさん、頑張りますよ」

いやいやいや。その三割だけでもアーサー王を騙るセイバーを倒したのはビックリですよ、アーサーさん。

イギリス大繁栄の礎、イギリスの象徴ともいえるアーサーさんはヨーロッパ方面の間なのに、妙に日本人っぽい見た目をしている。

もう王様じゃないから、と教科書に載っていた服とは違う服装に着替えているせいもあってか、妙に親しみやすい近所のおじさんのイメージがある。

無精髭なのに、不潔な印象はない。トレードマークと言わんばかりにとっても似合っている。

何故かとても楽しそうに笑っているアーサーさん。

今、アーサーさんが英霊として振るえる力は大地を切り裂くほどの剣技と断罪の剣シヤステイフォルのみ。代名詞であるエクスカリバーとアヴァロンはないそうだ。

それでも、エクスカリバーを持っていたアーサー王の偽物を倒したのは素直に凄いと

思う。

しかも、三割の出力の割にはカルデアの電力の六割を賄えるほどの潤沢な魔力を持っているのだから英雄としては破格だと思う。

個人的には、生きた伝説であるアーサー王ならなんら不思議なことではない、と思えるのだから凄まじい。

「さーて。ガチャガチャタイムだな、マスターちゃん」

わーい。ガチャガチャタイムだー。

「あの、立香ちゃんも陛下も。英霊を呼び出す儀式なんだからもう少し言い方をですね」
「好きな英霊とか呼べない時点でガチャ以外の呼び方があるだろうか。いや、ない。故に、サーヴァントガチャと読んでも過言ではないのだ」

ないのだー。

「……………アーサー王陛下下ってこんな人間だったのか…………？」

「わっはっは。王と言えども、王もまた一人の人間。暴れたくもなるし、好きなことをしたくもなる。それをできるだけ抑えてブリテンを治めたんだから王でなくなつた今、好きにしてもいいだろう。」

それに俺はブリテン随一のビックリ人間の称号もあるんだぞ。命名はケイだ」

確かに、アーサーさんは付き合つて楽しい人だと思う。冗談を言えば、返してくれるし、愚痴も聞いてくれる。距離感もタイミングによつて変化するのでそこもまた、好きになる点だと思うんだ。

「アーサー王の右腕、サー・ケイですか」

「おう。アイツには世話になつた。王になれと迫つて来た時はどうかと思つたが、王をやつてよかつたと思つているし、ベストな結末ではなかつたが、ベターな結末に持ち込めたのはアイツのおかげでもある。アイツがいなきや、今頃はイギリスどころかヨーロッパの一部が地図になかつただろうよ」

「サー・ケイ、僕は猛烈にあなたに感謝をしている——!!」

朗らかに笑うアーサーさんとは対称に、ロマンは齒を食い縛るように円卓の騎士で最

もアーサー王に尽くしたと言われるケイさんに感謝をしているみたい。

アーサー王を裏切った騎士とは、と聞かれると真っ先に挙がるのはそのサー・ケイ。アーサー王に尽くすために血を吐きながらも反旗を翻したって歴史的考察は間違いないんじゃないんだ。

でないと、アーサーさんがあんなに嬉しそうに自分を裏切った人間を語らない。絶大な信頼と感謝の意がアーサーさんから伝わってくる。

『もしもーし。楽しそうなどこ、悪いけどこっちは準備ができたよ』

「おう。ロマニくんや、始めようではないか」

「ハア、わかりました。レオナルド、システム・フェイト 召喚を起動してくれ」

『あいあいさー』

「マスターちゃんは俺の後ろにね。危ない奴が来たら危ないからな」

アーサーさんがズボンのベルトに紐を括り付けてぶら下げているシヤステイフォルを持ちながら優しそうな顔で言ってくれた。

ではではお言葉に甘えて。

……ロマンも？

「僕は非力な医療部門の人間だからね。弱い英霊でも殺されちゃうから」

「ロマンくん、あとでロードオブザリング三作貸しな」

「それくらいならいくらでも！」

アーサーさんの後ろに回れば、ロマンも一緒に来た。

ロマンと一緒にアーサーさんの背中の陰から召喚陣を見ると、眩しい虹色の光が満ちているのがわかった。

『これは——大当たりだ！ 間違いなく高位のサーヴァントが召喚される！』

「陛下？」

アーサーさん？

背中から見えるアーサーさんの横顔は笑顔ではなく、戦いに臨む時の表情だ。いつでもシヤステイフォルを抜けるように、準備もしている。

と同時に、召喚陣の光が集まって人の形をしていく。光で見えないその人物は——。

「サーヴァント、セイバー」

——よく、似ていた。あの偽物のアーサー王に。

この世の全てに絶望したかのようにどこまでも昏く、飲み込まれそうな闇を抱えた目をした女性だった。

顔も、絶望に彩られていた。疲れ切ったような目の隈。綺麗だったであろう髪のはボサボサで美しいであろう容姿を台無しにしていた。

ガリガリガリ、と金属が擦れ合う音が聞こえる。片手で握っているだけの大きな剥き出しの剣が召喚ルームの床に傷跡を残している。

「——モードレッド?」

アーサーさんが、とても驚いたような声を出す。

モードレッド——それが確かなら、アーサー王最後の血の直系。そして、円卓の騎士の中で最も呪われた運命を辿った王の子。

「嘘だ」

聞いた者をどこまでも闇に落とすような声が聞こえてきた。

「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ——」

「生きているはずがない。父上は父上は父上は——」

「ロマンくん！ マスターちゃんを頼む！」

「へっ？」

『ロマン！ そこから離れるんだ！ そのサーヴァントの魔力が暴走しかかっている

！』

「だって」

ぞわつと冷や汗が背中から噴き出したのを感じた。

気が付けば、私は誰かに体を掴まれてその場から離れていた。

ブツブツと呟いていたサーヴァントが顔を上げる。

ズキリ、と心が痛んだ。なんて悲しい顔をしているんだろう、と思った。あんなに悲

しそうに笑いながら涙を流すなんて。

「父上はもう死んでいるもんなあ」

凄まじい音。そして衝撃。辛うじて捉えた目は、アーサーさんとサーヴァントが互いの剣をぶつけ合っている光景だった――。

17 憤慨

か、カオスだ。キヤメロット城が混沌に包まれている。

主であるアーサー王は鼻でもほじくらんばかりにやる気がないように、アグラヴェイン卿は二つの意味で慌てながら客でもない客に説明をする。

その更に後ろにはアルトリア卿がとんでもない顔になりながらケイ様に羽交い締め
にされて押さえられている。アーサー王に呼び出されたガウエイン卿とガヘリス卿も
また、ケイ様に力を貸してアルトリア卿を押さえているが、アルトリア卿の力が強すぎ
て引き摺られている。

そして正式にキヤメロット城の食堂で働くことになったガレス、呼び出されたトリス

タン卿とランスロット卿は傍観に徹している。ランスロット卿だけはアルトリア卿を押さえようとしていたが、ガウエイン卿にいらねえ！ と拒否して追い出された感じが。

レオデグランス王の娘であるギネヴィア様。なんの約束も取り付けずに急に来ててんやわんやになったものだ。

今のアーサー王には後ろ盾は必要ないと思われるが、その地位を確固たるものとしてアーサー王の計画である直属の騎士を集めるものには誰か、後ろ盾が必要だった。

念には念を入れて、とアグラヴェイン卿とケイ様が精査してアーサー王に相応しい後ろ盾はいないものかと探している最中にギネヴィア様は来た。

何の準備もしていないのに急に来られては困る、と我等一同は言ったが、最有力候補であったレオデグランス王の娘である点は見過ごせるはずもなく、全くできていない準備で推し進めることにしたのだ。

突発的なギネヴィア様を案内するアグラヴェイン卿。もしも、レオデグランス王の後ろ盾を得るのであればギネヴィア様がアーサー王の妃になるかもしれない、とケイ様が漏らしたら。

どこからか聞きつけたアルトリア卿があるうことか、ギネヴィア様を殺そうとし始めたのだ。

女性だとバレた後はいつも隠していた兜を外して美しい容姿を晒している。

何故バレなかったのか不思議ではあるが、あの兜に仕掛けがあつたらしい。魔術師マーリン様が用意した物であるらしく、聞いた者を惑わせる魔術が仕込まれているのだそう。

が、アーサー王や一定の強さを持つ者。アルトリア卿が女性であることを知っている者には効果はないらしい。

どっちにしても、近い内にアルトリア卿が暴走して身バレはしていただしようね（死んだ目）

アーサー王がやる気がないのは久しぶりにゆつくりと休める時間をアグラヴェイン卿とケイ様が用意し、モードレッドと昼寝でもしようかという時にギネヴィア様が来たのだ。

それはもう、白けた顔をされている。アグラヴェイン卿が頑張つてギネヴィア様を待っているが、ギネヴィア様の興味はアーサー王に向いているようなのは見てわかる。だからこそ、アルトリア卿も暴走しているのだと思う。

「あら。いぢぢぢはっ」

「テルマエでございます。ローマのそれとは違って、アーサー王が考案したものです」

「まあ。素晴らしいですね、アーサー様」

「……」

「で、では次の場所を案内しますので」

ああ、これはもう駄目だな。アーサー王はもう興味すら持っていない。

「アグルくん、俺はもう寝る」

「まあ、アーサー様。レディをエスコートするのは男の役目ですわよ？ お付き合いくださいな」

「……ペッ」

!?!? アーサー王がギネヴィア様に見えないように唾を吐いた!?!?

こんななやさぐれているようなアーサー王は初めて見る。そんなにもこのエスコートが嫌なのか。

付き合いの長い私たちから見ても作り笑顔とわかる笑いを浮かべると、ギネヴィア様に告げる。

「勝手に来るとしてエスコートもクソもねえだろクソアマ」

瞬間、時が凍るのを感じた。

誰もが言葉を発することができない。アーサー王が暴言を女性に吐いたのは勿論、笑顔で言い切るのだから誰もが驚いているだろうと思う。

あのアルトリア卿ですらもう少し柔らかい対応なのに、ギネヴィア様に対してはとんと辛辣だ。

「来る時は約束ぐらい取り付けろ。準備もできていないのに案内をさせるのは人としてどうかと思うぞクソ。フレグランズとか香しい名前の王の王女だかんだか知らんが帰れ。お前のせいで俺の休みがほとんど潰れたぞどうしてくれるクソ〇ツチ」

「――」
啞然とするギネヴィア様。

ここまで暴言を吐かれるような経験はなかったのだろう。口をパクパクさせてアーサー王を指差している。

「アグルくん、フレグラン王だかの後ろ盾は中止だ。こんな女は俺は要らん」

接待するために用意した服を脱ぎながらその場を離れるアーサー王。その後を、当然のように拘束状態から抜け出したアルトリア卿が追い掛ける。

残ったのは、未だに状況を飲み込めていない面々のみ。ギネヴィア様は震えながら涙を浮かべておられるようだ。

ケイ様は膝から崩れて項垂れていた。

こうして、レオデグランス王の娘であるギネヴィア様との縁談は破談に終わった——
かのように思えたが。

木を削って棒状のものにしたそれを、アーサー王は肩に置いて小さな敵と対峙していた。

不機嫌そうな様子も嘘のように、楽しそうにアーサー王がボクトウと呼ぶもので肩を叩きながら必死に小さなボクトウを振り回す小さな敵の攻撃をひらりひらりと避ける。

すれ違い様に、頬を突いたり、頭を撫でたりと遊んでいるようだ。

それには、小さな敵も我慢ならなかったようだ。

「ちちうえ！ まじめにやってよ！」

「わっはっはっは！」

「わらうなー！」

小さな敵、モードレッド。親子の戯れとも言える光景がそこにあつた。

アーサー王の強さに憧れるモードレッドが鍛えて！ とアーサー王にお願いすれば、快く了承して軽い手合わせをする。

最初に、アーサー王は自分は決まった剣の形はない。教えられるかはわからないと言つた。それでも、モードレッドは父と剣を合わせたいと熱心に頼んだ結果がこれだ。

子供ながら、時折鋭い剣捌きを見せる。そこはアーサー王の血筋なのだろうか。

互いのボクトウがぶつかれば、カツンと軽快な音が轟く。手加減をしているアーサー王相手に、中々良い戦いをするモードレッド。

こうして見ると、やはりアーサー王は異端だ。太刀筋が定まっていないうのか、振り方もバラバラで姿勢も傾いていることが多いように見える。

なのに、腰を据えて剣を振るうガウエイン卿たちには危なげもなく勝つただから不思議だ。

「たあつ」

「お。いいぞモードレッド。もう少し斬ってやる、って気持ちを込めながらも一度やってみ」

「わかった！——てやあつ！」

ぞわつ。今、確かにモードレッドの太刀筋に圧倒された自分がいる。

馬鹿な。今の剣、とても子供とは思えない鋭い一撃だった。子供らしい姿勢で放った一撃とは思えない。

カコーン、と一際甲高い音が響き渡る。鋭い一撃であっても、アーサー王には脅威にならなかつたのだらう。容易く受け止める音だった。

「それだ。その感覚、忘れないようにな」

「いまの——」

「そうだ。その感覚が何より、俺の子供である証だモードレッド」

モードレッドのボクトウを受け止めたまま、モードレッドのボクトウを握る手を優しく包むアーサー王の顔は真剣そのものだ。

「忘れるな。この力は、破壊の力にも救いの力にもなる。俺たちは、剣を手で振るうんじゃない。心と、魂で吠えるように振るうんだ」

「ゴゴゴとたましい」

「そしていつか、お前にもお前だけの魂の剣が鍛えられる。その時は、自分の心の赴くままに剣を振るえ。」

アイツがムカつく。しばいてやろう。

邪魔しやがって、許さん。ボコボコにしてやる。

美味そうだな飯になれ。死ね！

他には——」

ストップストップアーサー王!!!

「あ？ 何だよベディくん」

こう、良い話だったのに何故最後の最後で台無しにするのですか！

「だって本当のことだもの。好き放題したから今の俺がいるんだぞ」
もう少し言葉をオブラートに包んでくださいと言いたいのです！

「えー」

「えー」

ほらあ！ モードレッドが真似をしているじゃありませんか！

「モードレッドは可愛いなあ。じゃ、もう一回父ちゃんと戦うか？」

「うん！」

「よし、良い返事だ。ほれ。どこからでもかかってきなさい——」

「——！　ちつとこれはキツイ……！」

「アアアアアアアアアアアア!!」

「こりやマズいな。ロマニくん！　この部屋から出てすぐに遠くに行け！」

ガンガンガン、と煌びやかな剣が荒々しくアーサーさんのシヤステイフォルに何度も振り下ろされる。

その度に空気が震え、アーサーさんが立つ床にヒビが入っている。

アーサーさん！

「こつちはなんとかする！　マスターちゃんは安全なところへ！」

「父上父上父上父上父上の名前を呼ぶのは——ダレダ」

ぎゅるん、とアーサーさんと戦うサーヴァントの目がこちらに向いた。

その瞳を向けられた瞬間、体が金縛りにあったように動かなくなる。私を必死に抱えるロマンも震えて、振動がこちらにまで伝わってくる。

視界一杯に広がる血のような魔力。まるで魔力自体が刃になったかのように、私とロマンの体を細かく刻んでいるのを感じた。でも、動けない。

アーサーさんが大半の攻撃を防いでくれていたからこそ、この程度で済んでいる。いやでも、それを理解できた。

せめて、あの子がいれば――。

ハッ。あの子は私のサーヴァントでもある！

ならば――！

心の底から叫ぶように、アーサーさんを助けてくれるように願いながら令呪を発動させる――！

来て！ マシユ！

「はい！ 先輩！」

願いは叶った。あの子――マシユ・キリエライトが来てくれた。

デミサーヴァント、戦闘装備に切り替わった彼女が笑い掛けてくれながら私とロマンを守るように立ち塞がる！

「でかした！ マシユちゃん、二人を守れるか！」

傷だらけになりながら、鏝迫り合いをするアーサーさんが安心するような笑顔をこちらに向けながら聞いてくる。

お任せを。しっかりと守ります、とマシユが宣言すればアーサーさんの笑顔が更に弾け、真剣な表情に変わる。

「さて。モードレッド」

「偽物のくせに喋るな」

「偽物かどうかは——」

アーサーさんから赤黒い魔力を切り裂くような黄金の光が放たれる。それは、伝説に伝わるあの——。

『——この一撃を受けてから考えろ』

「それっは、エクス……！ 父上ええええええ!!！」

『星の息吹、束ねるは王の魂。世界の最果てまで輝かん光を今、ここに』

アーサーさんが眩しすぎて見えない。

でも、かすかに見えたシルエットは、教科書にもキヤメロット城に飾られている絵でも見たことのある姿だった。

『エクス——カリバー——！』

アーサーさんの勇ましい声が聞こえると、辺りが温かい光で満ちるのを感じた。そして、あのサーヴァントが苦しむような声も聞こえて——。

18 縁談

アーサー王が心底、呆れた顔をしながら玉座に座っておられる。

呆れるのもわかる。あれだけ罵倒され、泣かされたギネヴィア様が玉座に座るアーサー王に手を振っている。

父であるレオデグランス王も付き添いで来ているが、苦笑いをしておられる。娘のギネヴィア様が泣かされてもなお、このキャメロット城に戻ったのだから。

娘を泣かされた親としては、反応に困っているのだろう。

「……なんで来たんだコイツ」

アーサー王の気持ちもわからなくもない。

おそらくだが、この場にいる者全員が混乱の極みにいるだろう。

今回はしっかりとこちらの都合も考えた上での訪問の約束を取り付けてきた。文を受け取った時のアーサー王、アグラヴェイン卿、ケイ様の表情はなんとも言えないような表情だった。

その場にいる者、私も含めて皆が同じ顔をしていただろう。

が、今回は約束をしたので何もしないわけにもいかず、もてなせるようにキャメロット城にいる面々でしっかりと準備を進める手筈になった。

今まで以上にだらーんとするアーサー王を見ればそれでもやる気がないのは見てわかった。

「——つきましては、アーサー王には我が娘であるギネヴィアを嫁として——」

玉座の肘掛けに肘を置き、握った拳の上に顎を置くアーサー王。時折、頷いてはいるがあれは適当に相槌打っているだけだな。

気掛かりなのは、アルトリア卿だ。ギネヴィア様が来るとわかってからはほぼ幽閉に

近い形で部屋に閉じ込めているが、いつ突撃してくるやら。

幸いなのは、あの方が帰って来たことだろうか。今、アーサー王の隣で立っているあなたの方だ。

合間合間に、アーサー王が指で合図をしながら耳打ちしている。客が来ているのに、その態度はいかがなものかと思えますアーサー王。

前に見た時よりも、背が伸びてより美しくなっている。

憂いの表情を浮かべるようになってからは、美しさが際立って儂い印象を感じさせるような雰囲気醸し出している。

「——ところで、アーサー王」

「ん?」

「そちらのご婦人は?」

レオデグランス王がその正体について聞いてくる。知らない者がいれば、聞きたくもなるだろう。

それも、白い覆いで顔を隠しているとすれば、角度によっては顔は見えるが、レオデグランス王からは見えにくいのだと思われる。

「ああ、俺の相談役です。マーリン、紹介を」

その名を聞いたレオデグランス王の体が強張るのを感じた。

やはり、レオデグランス王ともなればその名前は聞いたことがあるらしい。ユースー王と聞けば、この人ありとまで噂があつたからだろう。

アーサー王の一言で、マーリン様は玉座より少し前に足を踏み出す。その動作だけでどこからか花の香りが香ってきた。

「キャメリアードが王、レオデグランス。我が名はマーリン。ブリテンの王、アーサー王の家臣の魔術師でございます」

「おお、マーリン様。お初にお目にかかります」

恭しく、一礼をマーリン様が。それを追うようにレオデグランス王が深々と頭を下げた。

長らく、キャメロット城を留守にしていたマーリン様。ある日、いつものようにアーサー王の執務室に行けばいつの間にかマーリン様がいた。

執務室の扉を開けば、そこにいたのは座るアーサー王と跨るマーリン様だった。思わず固まった。

朝っぱらからナニをしているのだ。徐々に顔が赤くなるマーリン様を見れば、ナニをしていたかは明らかであった。

ナニをしているのだ、お二方は。

弱みを握った気もするが、弱みが多すぎて弱みにならない気がする。

情事の片付けをマーリン様が魔術で行った後は、覆いで赤くなった顔を隠して面を合わせた。

いない間、マーリン様がどこにいたかは知らない。アーサー王だけが行方を知っていたが、話してはくれないようだ。

「さて。話はここまでにしようか」

「そうですね。後は若い二人の時間を」

「……ん？ わか、い？」

アーサー王、それは流石に失礼過ぎです。

ギネヴィア様を見て若いのか？ と疑問を持つのは女性に対する対応としては最悪

です。

ほら。ギネヴィア様も笑つてはいますが、内心激怒していますよ。

アーサー王の見た目が変わらないからつてそれは言い過ぎです。アーサー王もそうですが、アルトリア卿も見た目が変わらな過ぎ過ぎて怖いんですが。

——え？ お前も人のこと言えるかつて声が聞こえた。

ど、どこから？

「ギネヴィアとも積もる話があるでしょう。不出来な娘ですが、よろしくお願いします。

アーサー王」

「いや、まだ結婚をするとは……」

「よろしくお願いします（威圧）」

「お、おう……なんだこのオッサン」

珍しくアルトリア卿以外で腰が引けているアーサー王。妙に威圧感を感じさせるレオデグランス王は必死の様子だ。

ああ、ギネヴィア様も婚姻適齢を逃しそうだからか。アルトリア卿は完全に手遅れだが、アーサー王がいればなんでもいいから問題はなからう。

普通の王族や貴族、豪族の娘ともなると地位の高い人間の嫁に行かねばと焦るだろう。それだけが彼女たちの生きる意味なのだから。

アーサー王ともなれば、注目の的だろう。ブリテンを統べる王、王を統べる王とも言えるような相手ならば誰でも妾でもいいからと押し掛ける。現に、お見合いの文がひっきりなしに届いている。

ギネヴィア様は彼女たちよりも先にその立場を得たと言える。

しかも、アーサー王側から申し出るような内容だ。アーサー王が選んだ、とも言える。

「ギネヴィア。頑張るんだぞ」

「はい。お父様」

レオデグランス王がギネヴィア様を励ましている。親子の愛のように見えるが、実体はもつとドロドロしたようなものだろう。

「なにがなんでもアーサー王の妃になれ」だろうなあ。

所変わって、キャメロット城はずれの森の中。

アーサー王の秘密の場所と私が勝手に呼んでいるそこには、私を含めて四人がいる。

ボクトウを二本持つアーサー王、頑張つて手を震えさせながら逆立ちをするモードレッド、そしてモードレッドに指示を出しながら指導をするのは帰つて来たマーリン様。

アルトリア卿の劍の師匠でもあるマーリン様。劍を教えるくらいならもう少し人柄を何とかして欲しかった。

アーサー王とは別で、劍を扱えば右に並ぶ者なしと言える腕だ。

だからこそ、アーサー王はモードレッドを鍛える役目をマーリン様に頼んだのだろう。モードレッドは嫌そうな顔をしていたが。

「ち、ち、う、え……い！」

「頑張れモードレッド。マーリンは俺と違つてちゃんと教えられる奴だ。基本をしつかりと教えてもらえ」

「劍を振えるように体を作るからね。その後は我が王と実戦訓練をして経験を積んでもらうよ」

タンタンタンとマーリン様は杖で地面を叩き、リズムを取っている。杖を叩き終えたら楽にしていると指示を出してからはそうしている。

アーサー王、随分とスパルタですが体は大丈夫でしょうか。

「まあ厳しすぎるが、モードレッドのためだ。俺たちの中に宿る力は使い方を間違えると世界を滅ぼす刃になるからつてのもあるが、俺の跡を継ぐことも考えての計画だ」

前から聞いてますが、アーサー王の力は何なのですか。

聞いていると普通の力では想像できないようなパワーを秘めているように聞こえるんですが。

「俺は最後の幻想の王だ。幻想が現存するこのブリテンを統べるに相応しい力を世界に与えられたんだ」

世界に——？

「欠片とはいええ、モードレッドも俺の力の一部を受け継いでいる。いつ目覚めるかはわからんが、それまでには鍛えておきたい。その点、マーリンは得意分野だ」

だからモードレッドを鍛える役目をマーリン様に。

「そのための対価はもう支払った。ほら……なあ？」

ああ、あの情事ですか。

正直、あんなものを見せられた私はどう反応すればいいのかわかりませんでしたよ。

「勃てばいいんじゃない？」

たッ……!?

「ベデイくんも男だから反応はするでしょ。ベデイくんには付き合ってる女性とかいないの？」

残念ながら。忙しすぎて付き合う余裕ありません。

というよりも、アルトリア卿を見ていると女性が怖くてたまらないので付き合いたいとも思いませんよ。ええ。

……アーサー王に反応しないように頑張っているのは内緒だ。たまにエロく見えるんですが。あの人。

「ちちうえーてがいたいー」

「おつとと。おー、頑張ったな」

泣きながら震える手をアーサー王に伸ばせば、応えるようにモードレッドを抱き上げる。

震えている小さな手、腕を優しく撫でる。器用に片足で立ちながら上げた片足でボクトウ二本を支えるアーサー王。

「流石は我が王。片足立ちでも見事にバランスが取れている」

マーリン様。お疲れ様です。

「やあ。朝以来だね、ベディヴィエールくん——あのことは忘れるんだ、いいね？」

それならあんな場所で情事を交わさないでくださいマーリン様。

「あ、いや、でも……わ、我が王と久しぶりに会えたから嬉しくなって、つい」

マーリン様、可愛い（断言）

顔を真っ赤にして覆いで完全に顔を隠すマーリン様の可愛さが凄まじい。

これだ。これなのだ。アルトリア卿の狂った恋よりも尊い、愛する者を純粹に愛する恋する女性とはまさにマーリン様を言うのだ。

美しい愛の形。それを見るだけで心が洗われる。

ぶっちゃけるとアルトリア卿よりマシな時点でも良い気がする。あれと比べたら執務室で情事を交わすくらいは許容範囲である（錯乱）

「いたいー」

「痛いー痛いよなー。じゃあ、モードレッドにはそんな痛みも吹き飛ばすような良いモノを見せてあげよう」

ボクトウの一本を脚の力だけでマーリン様に渡す。もう一本をモードレッドを抱え

ていない方の手で掴む。

艶やかな木の表面が木漏れ日を反射する。が、目を凝らして見ていると別の光がボクトウに集まっていた。

「モードレッド。この光を覚えておくんだ。いつか、お前だけの力も同じ光を放つようになるからな」

徐々に、光の色が変わる。エクスカリバーが放つ黄金の光にも似た色よりも濃い、深い色だった。

その輝きは私の心を捉えて離さない――。

この光景は、ずっと私の心の中に残るだろう。それほど美しい光景だった。

アーサー王の内に宿る真の力。力の結晶、形になったそれは世界で最も美しいものだった。

世界の闇を払える、と言われても納得できる。

最後の幻想の力と言われれば納得できる。

「これが俺とお前だけに宿る魂の剣。その名は――」

「うあ……」

あ、アーサーさん！

エクスカリバーと呼んだ一撃を放った後のアーサーさんは力尽きたように光が消える。

背中から空気が抜けるように、英霊として構築されるパーツが抜けて行っているように感じた。死に掛けていると言われれば納得できちやう危険な状態なのは私でもわかった。

お、応急手当！ 応急手当！

「陛下！」

「アーサー陛下！」

サーヴァントを吹き飛ばしたことで動けなかったロマンも動け、膝を突いたアーサーさんに駆け寄る。

戦いの余波から守ってくれていたマシユも大きな盾を持ちながらも駆け寄って流れるように座ってアーサーさんの頭を自分の膝に乗せる。

いや、マシユ。普通になっているけどおかしくない？

「？」

あ。なんでもありません、はい。

心底不思議そうにするマシユ。アーサーさんと初めて会った時から妙に距離感が近い気がする。

今回の召喚はダ・ヴィンチちゃんのサポートをしていたことでいなかっただけで、カルデアに帰ってから冬木にいた時も私よりもアーサーさんといってた気がする。

あ。そういえばアーサーさんはマシユに力を貸しているサーヴァントの正体を知っているんだっけ？

咄嗟の礼装による回復はアーサーさんを消滅から救い出せたみたい。

漏れ出している光は収まって薄くなっていた体も元に戻っている。表情も少し安ら

いでいるように見える。

ああ、良かった。

「——でだよ」

聞こえてきた声に、体が強張る。

アーサーさんが吹き飛ばしたサーヴァントがいるところから聞こえてくる。

「なんでだよ。これが俺に対する罰なのかよ」

ギギギギと軋むような音も聞こえる。

そこに顔を向け、見てみればあのサーヴァントが仰向けになって倒れ、涙を流している。流れる涙がサーヴァントの顔の横に溜まっていたのも見えた。

音の発生源はあのサーヴァント。振るっていた煌びやかな剣が離れた場所に刺さっていてそちらからも音が聞こえる。

「あ。やばい」

「うえつ、ちちうえええええ」

え？

アーサーさんの声が合図になったのか、今までとは比べ物にならない巨大な力が解き放たれた。

真つ黒な靄がサーヴァントから飛び出して召喚ルームを満たす。黒すぎて何も見えない。

音も聞こえなくなる。轟音が轟いていたはずなのに、痛いほどの静寂が支配している。匂いも感じない。肌にも手が触れているはずなのに何も感じない。

サーヴァント——アーサーさんの子、モードレッド。

超一級の英雄だけど、ここまでだなんて知らなかった。ランスロットに次いで円卓最強と名高いアーサー王の継承者であり、アーサー王に選定の剣を託された騎士。

アーサー王の死後、世界を旅していた形跡がある。閉ざされた大地、ブリテンから出てローマ軍を攻撃した逸話もある。モードレッドにはアーサー王の最後に付き添った大狼の子供もまた、付き添っていたとも言われている。

そして、モードレッドの最後の足跡はランスロットを殺したところで途絶えている。

歴史学者の考察を惑わせるランスロットの殺害は円卓の騎士にまつわる大きな謎の

一つとして数えられている。

——もしかしたら、理由はなかったのかもしれない。

父と子。二人の道を分かつことになったのはそんなに難しい理由はなかったのではないだろうか。

……でも、もう考えても無駄だ。

五感が消え、ゆつくりと思考が鈍るのがわかる。

そして、何も考えられなくなってくる——。

19 円卓

我が王がキャメロット城にある大きな部屋の中で語る。いつの間にか帰って来たマーリンが我が物顔で我が王の隣に立っているのが妬ましい。

マーリンがどこからか持って帰って来た大盾を木で覆ったその傍に立って演説をされている我が王。

この場にはこの時のために集められた我が王が声を掛けた騎士たちが集っている。

ケイ、ガウエイン、ガヘリス、アグラヴェイン、ガレス。加えてトリスタンとランスロット。何故自分がここにいいのかと言いたげなベデイヴィエールもいる。

更に、ランスロットの繋がりで何人かの騎士がここにいる。見慣れない顔があるのはそれだろう。

集うは、13人の騎士。アーサー王に選ばれた騎士たち。

「まずは集まってくれて礼を言う。それぞれに治める領地がある中、こんなことのためにだけにな」

既にある椅子。高名な芸術家を作ったと聞けば納得できる豪華な椅子は人数に合わせて用意されている。

その中でも我が王のためだけに用意された椅子は他と違って更に豪華だ。

我が王はその椅子に触れながら演説を続ける。この場を用意した理由と、集めた理由。

雄弁に語る我が王。その横顔だけで満足でございます。

「俺はアーサー王。ブリテンを統べる騎士王だなんだと言われるが、王である以前に一人の人間だ。

だから、できないこともある。誰かの助けを必要とすることもある。ここにいるケイにも、アグラヴェインにも、ベデイヴィエールにも助けてもらっている。

幻滅したか？ 天下のアーサー王が誰かの助けを必要とすることが？ どれだけ幻

想を抱いても、現実はこれだ。もつともやつてはならぬえのはできないことをできないままにして放置すること。それで大惨事を招くくらいなら俺は喜んで誰かに助けを求めらる。

で、だ。長くなつたが俺が言いたいのには王である俺一人の決定だけでは追い付かないことがある。故に、俺が考えられるだけの最高の騎士を集めた——」

ぐるりと騎士を見渡す我が王。とても凛々しいお顔をされている。好き。

「故に、俺はここに宣言する。王だの、臣下だの。そんな垣根を超えた新たな体制を作ること。」

その名も、円卓の騎士！ 誰もがここで意見を言い、最善の方法を探るために話し合うこの場を設立することを！」

ダンツと我が王が円卓の真ん中にあるそれを叩く。

部屋を満たすように神秘の力が広がるのを感じる。こういつた準備をしたのはマーリンだろう。ここまでの術を使えるのはマーリンだけだ。

となれば、この円卓のある部屋はマーリンが施した魔術の工房。色々な仕掛けがされ

ているに違いない。

そのマーリンが我が王に指示を仰がれたようだ。

「これからお前たちが円卓の騎士である証を渡そう。これはマーリン以外、作れない代物だから偽造は不可能。正真正銘の騎士の証だ」

そういえば、アグラヴェインが言っていたな。

我が王がはんこなるものを使い始め、暫く経つと各地で偽造されたサインが見られるようになった。無論、そんな不屈き者は拷問した末に殺してやりましたが。

我が王には褒められたが、ケイとアグラヴェインにはこつ酷く叱られた。偽造したサイン、はんこを作った黒幕なる者が裏にいるから情報を引き出したかったと嘆かれた。

まあ、そんな黒幕はちよちよいと見つけましたが。こう、我が王への溢れる愛が為した技ですな。

結果、関係していたのはローマ。ヴォーテイガーンの子飼いであるサクソン人をローマが引き継いで雇ってブリテンを内側から崩そうと画策したようである。

ピクト人もサクソン人も鬱陶しい輩だ。最近、ブリテンの各地で暴れまわって作物を台無しにされたりと被害が無視できない状況になっている。

その対策のためにも、民に希望の象徴として円卓の騎士を結成したのだろう。

メンバーは名だたる有名な騎士。ガウエインは太陽の騎士として、ランスロットは湖の騎士として。最強の騎士として有名な二人をはじめとして優秀で気高い(?)騎士がいれば安心もする。

しかもその筆頭がアーサー王、我が王だ。まさに象徴となろう。

「で、だ。円卓の騎士となったお前らは今まで通り、それぞれの領地を治めるだけではなく小さな国として統治してもらおう。最低限の報告だけはしてもらおうが、基本的にはやりたいことがあれば自分の判断で進める。俺やアグラヴェインの指示だけでは追い付かない部分があるのは事実だからな」

本当であれば、我が王自らが視察などを行ってアグラヴェインと協議するのが正しいのだが。

如何せん、移動に時間が掛かる。カヴァスやラムレイ、ダウン・スタリオンを使えば普通の馬よりは早く到着するだろうが、視察団を使うのだから足りない。

前は視察団をアグラヴェインが作って各地に送っていたが、蛮族が暴れるせいでそれも困難になった。

故に、必要な物資の提供やら情報の共有が困難になって飢餓に喘ぐ村が出てきているのが現状なのだ。

その点を我が王がいつもクルマ？ やらヒコウキ？ がどれだけ便利かわかったわと呟いておられた。

やっぱりあの方は凄いな、と優しい顔で笑う我が王に心が撃ち抜かれました。ちゅき。

個人的には我が王にそんな顔をさせるのがどんな人間か気になります。

「あと、情報の伝達には少し待て。マーリンが帰って来たことで前から考えていた策が実行できそうだ。これが上手く行けばある程度の問題は解決できる。

まあ、ある程度だけで全部が解決できるわけじゃないがそこは頑張るわ」

笑う我が王。ニカツが似合う笑い方は不安を吹き飛ばしてくれる笑顔だ。

実際、なんとかかすると云った我が王は大体のことはなんとかするのでその辺の信頼は厚い。

もしも私であれば、一人で抱えてなんでも解決しようとして自滅していただろう。我が王は誰かの助けを借りることに躊躇はしない。

大事なことこそ、ほうれんそう大事。と親指を立てながら仰る我が王は王としては王らしくない考え方だ。そこも素晴らしく、好きなどころなのだが。

我が王ちゆき。

「締めになるが、人材を雇う時は男女は置いといてな。親が騎士だから、豪族だからと言う奴ほど役に立たんことがある。お前らも人の上に立つた経験はあるだろうからそれぞれ、その価値観で人を見極めるようにな。

特に女性はいいぞ。手先は器用だし、美味しい飯も作ってくれるし、何よりも容姿で癒してくれる。女が騎士にはなれないなんて誰が決めた？ 女性騎士筆頭のアルトリアを見てみる。戦果だけならこの場にいる誰よりも高いんだぞ……ちよいと頭はアレだが」

ムフー！ 我が王に褒められた！

ドヤーンと胸を張って自慢してみる。苦笑する者、頭を抱える者——そして、嫌悪感を感じている者を感じた。

うむ。不穏分子発見。あとで報告して我が王に褒めてもらおう。

幾重にも検討を重ねてもわからない部分はあるのだとアグラヴェインが言っていた

のは正解だったようだ。

さて。円卓の騎士は結成された。

今日からは私はサー・アルトリアだ。アルトリア卿とは変わらないが、我が王にその名で呼ばれた時は歓喜で体が震えましたとも。

席も我が王に近い隣にしてもらった。

ヌフフフ。この円卓であれば、他の者には見えない設計。ならば、隠れて我が王に触れることができるフフフフフ——。

が、すぐに席を変えられた。何故だ！ まだしていないのに！

「——ちゃん」

——。

「……ほれ、起きろマスターちゃん」

パコンと自分の頭に衝撃が走る。

と、同時に自分の頭にかかる靄のようなものが一気に晴れるのを感じた。

暗闇が晴れると、見えた。変わり果てた召喚ルームの様子。

「大丈夫ですか、先輩」

「脈を調べるからね。そのまま寝てていいから」

隣にはマシユとロマンがいる。

ロマンは手首を触り、マシユは私の手を握ってくれる。アーサーさんはしゃがんで暗闇を生み出す原因を見ていた。

アーサーさんの手には透明な棒が握られている。薄すぎて何かはわからないけど、何かを握っているのだけはわかる。

「モードレッド……」

耳を澄ましてみれば、轟音の中から聞こえる違う音。アーサーさんが辛そうな顔をするのはそれが聞こえたからだろうか。

女の子の泣く声。お父さんを求めるように延々と父上と言いながら泣いている。

父であるアーサーさんは何を想っているのだろう。歴史では、モードレッドは父であるアーサーさんを殺している。

信じられなかったんだと思う。自分が殺した父親がそこにいるなんて。

だから拒絶して暴れたんだ。でも、あのアーサーさんのエクスカリバーを見てアーサーさん本人であると感じてしまったのだろう。だから、あんなに苦しんで泣いている。

「俺は、お前に期待しすぎたのかもな。俺の子供だから俺が死んでも立ち直って生きていけると思ってた。

ごめんな。俺みたくになれると思ひ込んだ俺の間違いだった」

アーサーさん……。

「お前を助けたいが、今の俺はお前を助けられるだけの力は振るえない。頑張つて力を出しても情けない結果しか出せないほど弱くなっている……と、なればだ」

はあああああ、と重い溜め息を吐くアーサーさん。

あ、あれ？ さつきまでシリアスな感じの空気がおかしくなってきたぞ？

こう、一気にシリアスがブレイクする予感と言うか——。

ぬううと振り返るアーサーさん。やりたくなさそうなことをやらねば、つて思いが伝わってくる。

透明な棒を地面に突き立てながら膝を突いているアーサーさんはやるやらないやるやらないと繰り返すようにつぶやく。

「マスターちゃん、円卓の女神は知ってる？」

あ。円卓の騎士紅一点の女騎士ですか？

「そうそう。アルトリアってんだけどさ……詳しいことは置いとくが、この状況を打破しようと思うと俺以外の手段だとそれしか浮かばん——」

ただ、とアーサーさんは繋げる。

「それと引き換えに俺の貞操が危うくなる」

——え？ てい、そう？

「うむ。四六時中、俺を逆レしようと襲い掛かってくるモンスターも同時に召喚するこ
とになるのだ」

「それくらいでカルデアをこれ以上壊されなければ陛下、受け入れてください」

「ロマニくん、いいかい？ ブリテンの時もセックスアップールするような奴だぞ？ な

のに俺のいたブリテンから1500年は経っている今、どうなると思う？」

「……」

うわあ。溜まりに溜まった性欲が爆発しますね、それ。

「しかも俺が預けてるもんあるからそれをネタに交換条件でやらせろとか言いそうなん

だよ、アイツ。無駄に現代の知識を身に付けてるせいで色んな体位とか試したがるのも容易に想像できる」

「さて、陛下。ここでお知らせがございます」

「ん？」

「その件のアルトリア様ですが——陛下が没した後、聖槍の力で女神になって生きておられます」

「うん。まあ、知ってた」

もう諦めているような顔をしているアーサーさん。アルトリアさんって人と大変な目に遭ってるんだとよくわかる表情をしている。

「そして、既に一度だけアルトリア様はカルデアに来ています」

「(。 ㇿ、)」

「はい。カルデアの場所は知っていることになりましたね」

「ぬああああああ……」

地獄の底から響いてくるような声で呻く。そんなに嫌なのか。

「こん畜生！　こうなつたら自棄だ！　可愛い可愛いモードレッドを助けられるなら俺のチ○コがもげようと関係ねえ！」

えっ。それつてもげるほど……。

「えー、コホンコホン。」

あーあー、俺の大好きなアルトリアさーん。俺の体を好きにしてもいいから俺を助けて「呼びましたか我が王」くださいなー。はええなオイ」

うええええええ!?　どなた!?　どこから現れたの!?

アーサーさんがん?　と聞きたくなるような言葉を言えば、いつの間にかアーサーさんの後ろに美女が現れた――アーサーさんの尻を撫でながら。

じつくりと観察すれば、似ている。あの偽物のアーサー王に。冬木の聖杯の前にいた黒い偽物のアーサー王が成長したような姿をしている。

ぬつと現れるアルトリアさんは尻を撫でながらアーサーさんに抱き着けば、首の後ろに顔を埋めて呼吸をしているみたい。

うわあ。見せられない顔をしている。完全にお薬をキメたような顔をしている。

「我が王、お久しぶりです」

「おう。久しぶりと言いたいがのっけからセクハラはやめような」

「うむ。我が王の尻はやはり触り心地がようございませぬ。ムラムラしてきました」

「やめろお前。ブレーキ壊してアクセルペダ踏みはやめろお前」

「1500年も我が王成分が不足しているせいでこうなっていますので。」

ところで、ついさつきなんでもすると言いましたね？ その言葉に偽りはございませぬね？」

食い気味にアーサーさんにセクハラしながら問い掛けるアルトリアさん。押しが強すぎてこつちが逆に戸惑うレベルだ。

というか、普通に女性側から男性にアピールすることに驚きなんですが。

アルトリアさんの服装もサイズが少し大きいようにも見える。袖もかなり余ってるらしく、捲っていた。

「……………俺の体を好きにしていからモードレッドを何とかしてくれ」

「お任せくださいWAGAOH！」

「言っておくが殺すのはなしだ。殺したらお前を嫌いになる」

「(・ω・) わかりました」

「アレは事故だ。モードレッドもお前も悪くない。悪いのは俺だ。だから、モードレッドは恨まないようにな」

「ええ、ええ。流石に1500年も経てば忘れるものです。特に我が王を好きにしてもいいと言われれば忘れもしましょう」

「お前……」

良い事を言っているのに言っていない感が凄い。これだけでアルトリアさんがどんなキャラか把握できてしまったのがなんとも言えない。

アルトリアさんの着ている服、ローブはアーサーさんが愛用していた遠征用のものとも判明した。だからあんなに大きかったのか。ちよつと恐ろしい。

「では、このハイパーロンゴミニアドでモードレッドを救いましょう」

「その頭が悪そうなネーミングは何だお前」

「あれからたまにマーリンと会って、その度にアップグレードしましたので。これは我

が王のロンゴミニアドではなく、マーリンが作った決戦礼装のようなものです」

「マーリンもやっぱり生きてんのか。まあ、アイツの一部が俺の中にあるのを考えたらそれも妥当か」

「なにそれうらやましい」

「はいはい。あとでベッドで好きにしてもいいからモードレッドを早く救う」

アルトリアさんが槍を横薙ぎにすると、アーサーさんのエクスカリバーの光に劣らない黄金の光が放たれて召喚ルームを包み込む。

軽い掛け声の割には物騒な威力で恐々とする。アーサーさんの付き人みたいな人ならアーサーさんにも負けないほどの力を持っていると考えるのが普通なんだね……。

「これにて仕舞いです——我が王の仇イイイイイイ！」

「言った傍からそれかよお前ええええええ！」

横に薙ぎ払い、更には突き出す。それによって完全に暗闇は晴れた。

というか、最後の突きはオーバーキルではないだろうか——。

アーサーさんが叫び、アルトリアさんが嬉々としてビームを撃つ。カオスな空間だ。

20 新人

「騎士って薄っぺらいんだなあ」

円卓の間と名付けられたキャメロット城にある部屋にて、アーサー王が項垂れてい
る。

自分に割り当てられた席に座り、円卓に頬をくっつけて脱力する様は痛々しい。

円卓の騎士を結成して間もなく。割り当てられた席に座った一部の騎士が椅子に掛
けられた魔術によって頭が弾けた。

顔の穴という穴から血を流して絶命する様子はドン引きするしかないものだった。

早速、脱落者が出てアーサー王が少ないショックを受けておられる。あんな口上をし

てこの結果なのだから気持ちもよくわかる。

遠征、帰還、特命。それを命じられていない仕事のない円卓の騎士がこの場に残っているが、アルトリア卿は当たり前のようにいる。仕事はあつたはずだが、しっかりと終わらせているのだから始末に負えない。

仕事の量を増やしているのに終わる時間は変わらないというアルトリア卿が恐ろしいです。

「抜けた穴はどうするべきか」

「必要ないでしょう、我が王。この場にいる者だけでも十分です」

「お前とベディくんしかいねえぞこ」

「私一人だけでも十分でしょう?」

本気だ。あの目は本気で言っている。

貴様は要らぬと言わんばかりの視線がこちらに向いているせいで背筋が冷たい。

「駄目だ。儀式を行う為にも、円卓の騎士は最低でも13人はいる」

「——ああ、例の」

儀式？

「ベディくんにはまだ内緒」

いたずらっぽく笑うアーサー王は誘うような仕草で人差し指を唇につける。エロさを感じた。

瞬間、アルトリア卿から凄まじい殺気を感じた。人を殺さんとする目に冷や汗がドツと噴き出すのを嫌でも感じさせられる。

「アルトリア、空きが出た補充をしたい。お前から推薦できる騎士はいるか？」

「ふむ……何人かいます。ですが、それらが我が王のお目にかかるかはわかりませんが」
「——よし。ならば善は急げだ」

項垂れる態勢から復帰すると、アーサー王はエクスカリバーとシヤステイフォルを腰と背中に着けながら立ち上がる。

上の装束の袖を腰に巻いて固定するのはやめてくださいとあれほど言っているのに、

聞いてくださらない。袖がヨレヨレになるのだから。

「腕試しだ」

アーサー王が下級騎士の訓練所に訪れる。円卓の騎士が結成されてからは滅多にないことだから若き騎士も教導官の騎士も大慌てだった。

エクスカリバーを持ち歩くのも珍しかろう。円卓の騎士が結成される前は数えられないほどしか持ち歩いていなかった。初めてエクスカリバーを見る騎士もいるのではないだろうか。

「これより我が王、アーサー陛下が貴様等をテストする。名を呼んだ者は速やかに帯剣の上、前に出よ」

大慌てで整列する若い騎士たち。ああ、こうやって見ると私も年を取ったと思わされ

る。

まだ騎士がいなかったアーサー王の下で駆け回っていたのが懐かしい。

思えば、あれから色々なことがあった。アーサー王が王になる為の旅、王になった後は王としての責務と仕事を果たす日々。そして今は、円卓の騎士を結成した。なんとも激動の時代だろうか。

一応、騎士をまとめる役目を担っているアルトリア卿が名前を呼ぶ。

無論、知らない騎士が多い。若い騎士も、年を取った騎士もアルトリア卿に呼ばれて前に出てくる。

ある程度、年を取った者も騎士見習いとして鍛えているようだ。老若男女問わずに雇っているからか、男も女も訓練を行っているのが見える。

私の右前に立つアーサー王の横顔は楽しそうだ。

エクスカリバーを立てて両手を添えているアーサー王は呼ばれて前に出てくる騎士を見ては時折、頷いて見定めをしている。

「お。ベディくん、あの子は中々の才能を持っているぞ」

楽しそうですね、アーサー王。

「おお。そりや、若い奴が成長するのを想像すると楽しくならねえ？　こん中の誰かが将来、偉大な騎士になって歴史を作るのかと考えたら楽しくもなるって」

アーサー王には負けませうけどね。既に多くの歴史を作っていますから。

「わっはっは。人間、必死に生きていれば何でもできるもんさ。それこそ、命を燃やすように生きてりゃ結果は伴うだろ」

命を燃やしているんですか、アーサー王。

「でなきや、こんな魔境で王様やれねえだろ」

ああ、魔境。皆が言いますが、確かにこのブリテンは混沌とし過ぎて魔境ですね。

最近では蛮族が暴れる、ブリテンの外周部で作物が育たなくなる、水が毒を含むようになる——。酷いものですね。

「近々、ローマに殴りこんで問い詰めようと思っている。あのクソ共が関わっているのは明白だし、あの鬱陶しいルキウスとかいうのをボコボコにしてやらんと気が済まん」

ルキウス……ルキウス・テイベリウス皇帝ですか。アーサー王に執着しているとの噂があります。

アグラヴエイン卿からそういった文が山ほど届いていると言われました。

「ああ、ベデイくんはアグルくんと仲が良かったつけ？ そうだよ。妙に手紙を送りつけてきたり、弓で挑発したりとか。工作するのも俺の気を引くためにやってるらしいぞ……ムカつくわアイツ。ぶっ殺してやろうかアイツ」

「我が王」

「ん？ どうしたアルトリア」

「準備が整いました。皆、準備ができて待機してます」

「おう、ありがとさん。ベデイくん、行ってくるわ」

怪我はしなさそうですが、お気を付けて。

エクスカリバーを持ってぽっかりと穴が開いたようにできている円陣に向かって歩

き出す。

いつものようにリラックスして歩くアーサー王は緊張などはしていない。まあ、見習いの騎士を相手にするのだから緊張もするはずもなからう。

反対に、アルトリア卿が呼んだ見習いの騎士たちはとても緊張している。体が強張り過ぎて思うように動かせないだろう、あれは。王がいきなり相手をすると言われていつものように振舞えればそれだけで円卓の騎士入りを果たせる。

今は……いない。もしかすると、アーサー王のように戦えば気持ちが悪く落ち着く者もいるかもしれないが……。

「呼ばれた者から前に出て、アーサー陛下と手合わせを行え。貴様ら程度では陛下に傷など与えられないから安心して全力でぶつかれ」

「ちなみに俺が気に入ったら円卓の騎士に入れてやるから頑張れ」

すると、何かを言いたそうにする見習い騎士たち。アルトリア卿が視線で黙らせたこととでこれ以上は何も喋らなかつたが、誰もが期待に満ちた目で見ている。

急に降つて来た輝かしい未来への誘い。誰もが認めるような円卓の騎士仲間入りすれば将来は安泰。

アーサー王に憧れて騎士になった者からすれば、最もアーサー王に近いところで働けるとなると、舞い上がりもするだろう。

——まあ、夢を見るだけなら許されるか。

「はい、次」

エクスカリバーを抜くことすらしない、その場から一步も動かない、制限時間を設けてアーサー王は最初に攻撃しない。

これだけの条件下でなお、圧倒するアーサー王が凄いのか。見習い騎士ではそれでも荷が重かったのか。

アーサー王に吹き飛ばされた見習い騎士を傍目に、アーサー王は次の騎士を呼ぶ。

高くそびえる壁。円卓の騎士に入るにはまず、アーサー王に認められなければならぬ。そのアーサー王と戦うのだから、それは大変だろう。

まあ、何も勝てとは言っていない。多分、自分も持ち味をしっかりと出せるかをアーサー王は見ているのだろう。

アーサー王のプレッシャーの中、自分を出せるかで合否は決まっているようなものだが。

「——次、パーシヴァル！」

「はい！」

——この日、新たな騎士が誕生した。

アーサー王が直々に試験を行い、アーサー王が惚れ込んだ騎士の名を、サー・パーシヴァル。

後に、アーサー王に選ばれた伝説の騎士の一人と呼ばれる者だった。

「改めて紹介するな。俺の娘のモードレッドだ」

と、モードレッドさんを指差すアーサーさん。件のモードレッドさんは座っているアーサーさんに正面から抱き着いてる。どう見てもだいしゆきホールドだよね、これ。

アルトリアさんの攻撃で正気に戻ったモードレッドさんは迷子になった子供が親を

やっと見つけたかのように安心した顔になり、ずっと抱き着いたままだ。アーサーさんも大きな子供をあやすように背中を優しく撫でていた。

顔は見えないけど、嬉しそうな顔をしているんだらうなあ。モードレッドさん。

「で、このアホがアルトリアだ。一応、俺の一番の従者だ」

「アルトリアです。我が王、アーサーの妻です」

「内縁関係になるのか？ こいつの最後の願いが俺の嫁になることだから叶えてやった結果がこれだ……正直に言えば後悔している」

うええ!? 内縁関係!?

アーサー王伝説の新しい事実がこんなところで判明したんだけど!?

うわあ。この調子だと皆が知らない伝説の裏側がもつと知れそう。生き証人が二人、サーヴァントの一人がいるんだもの。

モードレッドさんを抱き着かせたままのアーサーさんの隣で、良い妻風に演じているアルトリアさんが肩に手を置いて微笑んでいる。

なんとという猫かぶり。さつきまでの暴走を見ていなかったら騙されていたよ。

アーサーさんも疲れたように溜め息を吐いているし。

「さて、アルトリア。ご褒美だが」

「今夜ですかWAGAOH！」

「約束を破ってモードレッドを殺す勢いで攻撃したからなしね」

「馬鹿な!？」

「当たり前だろアホかお前は」

「——我が王との、ドロドロの夢の蜜月が——」

「やっぱり碌でもないことを考えていたなお前。お前がアホで約束破ってくれて助かったわ」

なあ、とモードレッドさんの髪の毛を梳くように撫でる。

うーん、モードレッドさんの表情がとても気になる。あの時のアルトリアさんみたいに見せられない顔をしているのだろうか。二人の顔はよく似ているから同じ表情をするんだろうなあ。

なんでどうでもいいことを考えているんだろ。

「やあ立香ちゃん、アーサーくん」

「お。レオナルド。召喚ルームは大丈夫か？」

やつほー、ダヴィンチちゃん。

「急ピッチで修理を進めているけど、何せ人手が足りない。全く、レフも念入りにカルデアを潰してくれたものだよ」

「なんとか生き残った者もいるけど、仕事をするには全く足りないね。アーサーくんの魔力がずば抜けているお陰でなんとかカルデアの維持はできているんだけど」

「伊達に魔力タンクと言われてませんよ」

どやつと自分で口に出すアーサーさん。

魔術、もしくは魔法を使うのであれば間違いなく大英雄になれるほどの素質を持つのに、魔力を持っていても複雑な術を使う才能がないとお抱えのマーリンさんに言われたそう。

逆に、魔力を放出して指向性を持たせることは得意。大地を裂く斬撃はそれを応用したもののらしく、その威力が何よりの証拠みたい。

「じゃ」

額に手を当てて溜め息を吐くダヴィンチちゃん。どうやらまだ問題があるらしい。

「現状なら、それだけで十分なんだけど。戦力を増やすためにサーヴァントを召喚して維持するとなると、アーサーくんの魔力だけではとても賄えないよ」

「カルデアの電力システムの復旧が最優先。燃料になるもの、破壊され尽くされた炉の部品交換……ああ、クソ！ とてもじゃないが手が足りない！」

ロマンが苛立つように髪の毛を両手で掻き乱す。その様子に、どれだけ追い詰められているかがわかる。

こうやってのほほんとしているけど、本当は切羽詰まった事態に陥っている。

今まで普通に生活できていたのはカルデアを支える電力を生み出す魔力の炉、プロメテウスの火なるものにアーサーさんが魔力を供給しているからこそ、雪山にある施設でも快適に過ごさせているのだと思いきや知らされた。

「大丈夫だ。生きているだけでも儲けものだ——生きているからこそ、足掻ける。戦え

る」

「陛下……」

「あ。でも今の俺は死んでいるんだったわ」

とぼけたように笑うアーサーさん。重くなっていた空気が解けて柔らかくなったのを感じる。

「それに」

「——ん？」

「悪い奴だな、レオナルド。もうとつくに対策が見つかっているんだろう？」

えっ。

「レオナルド!?!」

「わー、アーサーくんにはわかっちゃうかー」

「伊達に円卓の騎士を率いていませんとも」

「うーん。流石。じゃあ、皆にも対策を説明しよう」

どこからか取り出した眼鏡をかけるダヴィンチちゃん。できる女教師っぽい雰囲気
に変わる。

「今回、レイシフトした冬木なんだけどね。人理が焼却されたことで今のカルデアは本
来の歴史から外れるように存在している。いわば、特異点と言わなければならない現象さ。」

聖杯を手に入れ、冬木という特異点は修復されて消滅されたと思われた——んだけど
ね。あのために観測してみると、消えたはずの冬木が陽炎のように存在が揺らぎながら
そこにあることがわかったんだ」

つまり、と続ける。得意顔をして人差し指を立てた。

「その冬木にレイシフトして現状の打開を試みるのさ」

「——冬木で資材を集めるってことか。だがレオナルド、存在が不確定の冬木にレイシ
フトするのは危険じゃないか？」

「存在が不確定のとびつきりの逸材がここにいないか。それも、幻想の王とまで
言われるようになった最高の逸材がね」

「俺か」

……。

モードレッドさんを抱き着かせたままでもカッコ良くはないと思うんだ。

「いいぞ。そんなんで役に立つなら」

「俺も行く！」

「お。久しぶりに親子で頑張るか、モードレッド」

ぎゅうう、って音が聞こえるくらいに抱き着くモードレッドさん。嬉しそうに笑っているんだろなあ。

でも、気持ちもわかる気がする。だって、千年ぶりの親子の再会だもんね。

「アーサーくんという特大の特異点の影響で存在が不確定の特異点を探索することも多分、高確率でできるだろう。仮説が正しければ、これから修復を行う特異点にもう一度訪れることができると思う。そうすれば資料の収集もできるし、プロメテウスの火もアーサーくんの助けなしで稼働できるはずさ」

「……………うん。いける、いける気がするぞ。不安定のラプラスプログラムとトリスメギストスの修理を優先させれば……立香ちゃんを最大限にサポートできる。うんうん——」

「てなわけだ。マスターちゃんは後ろでずっしりどっしりと腰を据えて堂々とするだけでいいぞ。頑張るのは大人の俺たちの仕事だ」

グツと親指を立ててくれるアーサーさんだけど一っだけ物申したい。

その言い方だと私が太って重いみたいに聞こえるではないか。ピッチピチの若い女の子になんてことを言うんだ！

「動けない俺を容赦なく叩けるマスターちゃんは大物だなあ」

「陛下を足蹴りにするのは大物どころじゃありませんが!?! 立香ちゃん、不敬だよ不敬!」

「俺はもう王様をやめて普通の男の子に戻ったから」

「キャ○デイズみたいに言うのやめてください! 陛下のイメージが崩れます!」

「天下のアーサー王も俗に染まってるねえ」

「エイリアンとかプレデターも好きですが何か? 久しぶりにスターウォーズとか見た

い。後でよろしくロマニくん」

「何で600年代の人間がエイリアンとかプレデターとかスターウォーズ知ってるんだ！ 今考えるとおかしいじゃないか！」

でも昨日、アーサーさんともものけ姫見たよ。ロマン。

ね、マシユ。

「楽しかったですー！」

「良かったねマシユ！ 君が楽しそうで何よりだよ！」

今日はラピユタとトトロを見るんだー。ね？

「はい！」

「どっかの職員が残した映画とかドラマがパソコンに大量にあったから全部消化したい」

「陛下!!!」

「あ。大丈夫だ。大半は合法ダウンロードだ」

「そこじゃありません！」

うーん。私たちは絶望に追い詰められているのに和気藹々としているなあ。
うん。アーサーさんとならなんでもできそう。

「——じゃあ、俺たちの戦いはこれからだ。気合いを入れて頑張ろうじゃないか」

………………。それ、打ち切りエンドじゃ。

……………んん？ あれ？

「どうしました？ 先輩」

いや、なんか……モードレッドさん、小さくなつてない？

会議も終わって解散って流れになり、モードレッドさんとアーサーさんが手を繋ぎな

がら歩く後ろ姿を見ていたら違和感を感じた。

こう、アーサーさんとモードレッドさんの並んだ光景に首を傾げる。モードレッドさんの背が最初に見た時よりも低くなっている気がしてならないのだ。

「ふむ。中々観察力がありますね」

あ。アルトリアさん。アルトリア様って言った方が良いかな？

「お好きにお呼びなさい。それよりも、リツカと言いましたか。あなたは見分けが出来る目を持っているようだ。僅かに縮むモードレッドの違和感に気付けるだけ素晴らしい才能だと思います」

マシユマシユ、褒められちゃった。

「——ふむふむ。これなら殺さずに済むな」

今、とんでもない発言が聞こえたのですが!?

「嘘ではありませんよ。我が王のマスターに相応しくない振る舞いをすれば問答無用であなたを殺します。我が王が消えぬよう、私が契約をすることも考えています——故に」

ひんやりとアルトリアさんの指が首を這うように絞めてくる。冷たい殺気のようなものが突き刺してくるのを感じた。

「お忘れなきよう。私はあなたを見ている。あなたを見極める。気に入らなければ殺します。我が王が聞けば止めるでしょうが、最終的には許してくれる。故に、いつものように反省する姿を見せれば我が王は許す——だから我が王に止めてもらおうなどと思わぬように」

い、いえっさー。

「……ふむ。気後れはあまりしていないようだ。見た目に反して肝が据わっている。では、褒美に一つだけ教えて差し上げましょう。モードレッドのことです。」

アレが背が縮んでいるのは見間違いではありません。愚姉のかけた魔術が我が王と再会を果たしたことでモードレッドの秘めた力が打ち消してゆつくりと元の姿に戻っているのが現状です」

???

「今でこそ、あのような姿をしています、本来のモードレッドはまだ幼き子。円卓崩壊、我が王が偉業を果たしたあの時はまだ10にも満たない歳でした。円卓崩

生まれた時も愚姉が魔術を使い、成長を促してすることもありません。円卓入りをした時も愚姉に頼み込んだとも聞いています。我が王から継承した力がようやく実を結び始めた今、愚姉の力を超えて打ち消し始めているのだ」

えつ、つまりモードレッドさんはまだモードレッドちゃん……？

「……コホン。まあ、そういう見方もできますね。ついでにもう一つだけ教えましょう。歴史上ではモードレッドは我が王と愚姉の子、となつていますが真実は違います」

待つて待つて。そんなに情報を出されると混乱しちゃう。

「モードレッドは私の娘でもあります」

(˘ ˘ ˘ ˘)

「義理の親、なのででしょうか」

「いえ。今で言えばモードレッドは私と我が王の受精卵から生まれた子です」

「どうしましょう先輩！ わけがわかりません！」

それは私も同じだよマシユ！

21 父子

あれから、という話だが。

我が王が円卓の騎士を結成し、空きを少しづつ補充しながらブリテンの平定を治めることに尽力する。

足りない枠はまだ完全に埋まっていないが、それでも何とかやれている。我が王の力リスマと力がなければ既にブリテンは滅びていただろう。

前より忙しくなったのに我が王は疲れていないように見える。モードレッドと遊ぶ時間が減って落ち込んでおられるようだが。

代わりに、姉上殿がモードレッドの面倒を見るが多くなった。城に入り浸るようになった人妻という爆弾になっている気もする。まあ、皆知っている事実だから言お

うにも誰も言えないのが現状なのだ。

色々と噂が流れているせいでもある。我が王は誰にでも平等だが、同時に容赦のなさも平等なのだ。

特に裏切り者が出ると王自らが嬉々として肅清に向かう。その容赦のなさは裏切ることを躊躇わせるほどのもの。

凄まじい蹂躪っぷりは味方でも恐れるほど。我が王を恐れるとは貴様らそれでも忠臣か。

良くも悪くも、我が王は王として名を確実なものとした。

ローマの刺客を退け、暴走するブリテンに住まう獣を鎮める。

円卓の騎士の名は、アーサー王と共に大きく轟いた。我が王に寄り付くメスが多くなつたのは今でも腹立たしい。

アーサー王の妻は私なのだぞ!!

それをどこの骨とも知れぬ女に奪われたのは今でも許せん。

最近、最も大きな出来事はそれだ。

アーサー王の婚約。相手はボロクソに貶した女。

ギネヴィアとかいうクソアマが何をどうしたのか、我が王を口説き落としたり。そこからはとんとん拍子で婚約にまで行きつけた。

私がどれだけアピールしても子供を仕込むどころか結婚すらしてくれないのに！
……ん？ 押しが強すぎるから、だど？ 殺すぞ。

「ですが、アーサー様はアルトリア様のアピールが強すぎて疲れる時がある、とぐええええ
え」

ほう。貴様、調子に乗っているな。

我が王に気に入られているからといって偉いわけではないんだぞ。立場もアーサー
王の数多い付き人の一人にすぎないのだ。

普通の騎士と比べても上だろうが、右腕の私と比べればカスのようなものだ。

「申し訳ございませんアルトリア様！ お許しを！」

ふむ。口には気を付けるようにな。

パーシヴァルなど、しっかりと守っているぞ。

「……ただの脅しでは」

何か言ったか？

「何も言っていないせん！」

ふむふむ……。

では、話の続きといこう。

我が王とギネヴィアとかいうメスの結婚式をぶち壊す最善の方法を考えるとしよう。
何か良い策はあるか、ギャラハッド。

「やらない方がいいのでは。いくらアルトリア様といえども、アーサー様は許さないと
思います」

何故だ！ 何故私の我が王が寝取られるのだ！

「あの、机を叩かないでください」

マーリンのクソは愛人でいいと言うわ、姉上殿は認知してくれるだけで十分と言う。揃いにも揃って吐くセリフはあの人の愛は独り占めするものではない。一人ではあの愛は受け止められないのだと言う。

軟弱者共め。一人の愛する男の愛を受け止めずして何が女だ。

私は我が王の愛の全てが欲しい。我が王の全ても。

初めて出会い、ご飯をくれた時から。

自分を全て肯定して受け入れてくれたあの時から。

——攫うべきなのだろうか。

「あ、アルトリア様！　ご婦人がしてはならない顔になっています！」

やはり結婚前に攫った方がいいのだろうか。

攫うにしても、隠れられる場所やら愛の住処も用意せねばならない。

いや、変装して旅をするのもいいかもしれない。我が王は旅は好きだったはずだから。

「おいおい。物騒な気配が漏れているぞ」

ペチツと誰かに頭を叩かれた。
むむっ。この感じは我が王！
とりあえず抱き着いた。

「お疲れガラフくん。アホの相手をさせて悪かったな」

「いえ、お疲れ様ですアーサー様！」

「お。元気が良いね……父親とは大違いだな、うん」

「私にとつてはアーサー様は父のような存在です！」

「うーむ。めっちゃ懐かれとるわ」

そういえば、ギヤラハッドはあのクソ野郎の息子だったな。

最初こそ、洗脳されて気が付いたら子供を身ごもられた事件で憐れんだがそれは無駄な行為だった。

あのクソ野郎、しっかりと自分を保っていないから術に掛かったのだ。

つまり、マーリンから言わせれば相手の女性にそんな気分になつていたからこそ簡単に術中にハマったのだということ。

こんなのがガウエインに次ぐ栄光の騎士とか言われるのだから世も末だ。

私にも粉掛けてくるからその度に対処はしている。クソ野郎のクソ野郎を蹴り飛ばしているのに懲りない。

アイツは変態なのか？

まあ、価値観が違う頭のおかしいと言われている（言った奴は肅清したが）我が王だ。ギヤラハッドをギヤラハッドとして受け入れ、一人の人間として騎士として接する。自分もそうだからわかる。自分を肯定してくれる存在はありがたいもの。

自然と惹かれる。ギヤラハッドも我が王に忠誠を誓うのも当然だった。

クソ野郎でも騎士としては最良のクソの息子。本人はクソではなく、才能は普通の騎士とは比べ物にならないものがある。

大いに我が王が期待するのも無理はない。

ベデイヴィエールのように付き人とし、共に行動することが多くなる。空いた時間には我が王が直々に訓練を行う。付きつきりで育てる徹底ぶりは普通の騎士が羨むものだろう。

「アーサー様、ギネヴィア様は？」

「式の段取りを終えてあとは初夜をどうするか揉めてる」

。

「ひん」

「お前、呪い殺すような目はやめろ。怖えだろ」

ふ、ふん。いいですもんね。

我が王の純潔は既に私が奪っていますものね。

子供を取られた姉上殿はいずれ殺すとして。いつかは身籠りたいものです。我が王

との子はとても可愛いでしょうね。

「うーん。それは言ってる」

我が王もそう思いますか！

「とりあえずお前には育てさせないがな。お前に任せると変態二号が出来上がりそうだから」

我が王の素晴らしさを伝えるだけです！

それ以外は何もしません！

「むしろそれをするなって言ってるんだよ。普通に愛情を注いで育てるだけでいいんだよ
アホ」

「クソ野郎はそれもしませんでしたが」

「まあ、どっちにしても正妻になるのはギネヴィアだ。お前が正妻でも良かったが、外交問題に絡むから彼女が正妻になる」

ぐぬ。やはりユーザー王の実子という立場はまずかったか。

「婚前契約で閨は共にしないと記載したが、あちらさんが断固拒否して揉めに揉めまくってる状況だ」

跡継ぎが欲しいと言うあちら。子供はモードレッドがいるから欲しくないで夜枷はノー。

婚約前からそういう条件だよ、と我が王が言ったのだがギネヴィアとその父親がゴネにゴネて約束を反故にしようとして揉めているのだそう。

「跡継ぎを作るのは王の責務の一つと言うがもうモードレッドいるからなあ」

「たくさん作れ、ということでは？」

「王位継承権とかで揉めて殺し合いとかノー。子供は好きだがもうモードレッドがいるから更に欲しいとは思わんな」

生まれた子供たちに平等に愛を注ぐ、とは簡単に言えるが。子供たちも皆が同じではなく、性格も子供の数によって増える。

いくら平等に愛しても受け取る側の子供がそれをよしとするかは別問題。良い父親、母親ならそれもなんとかできるだろうが、自分はそもそも良い父親とは言えない。

と、我が王は仰る。

なるほど。しっかりと考えておられるのですな。モードレッドはクソ生意気で好かないが、我が王が大好きなのはわかる。

私から見れば、良い父親なのだと感じるが。あと良い夫にもなれる。できれば私の夫になつて欲しい。

「じゃあ、仕事に戻るか。ガラフくん、予定は？」

「あ、お待ちを」

アグラヴェインから渡された我が王の予定を記した羊皮紙。それを広げてギヤラハッドは確認をし始める。

仕事が増え、予定をしつかりと把握していないととんでもないことになるから、とアグラヴェインはしつかり予定を組んでいる。

できるだけ我が王がモードレッドとの時間を作れるように予定を立てている、とは聞いたが我が王がいなくてできない仕事は山のようにある。

時間が作れないとアグラヴェインが嘆いていたが、我が王は笑って許しておられた。いざとなったら執務中に会話しながらやるから。と

無論、アグラヴェインは猛烈に反対した。あの悪夢は忘れられないらしい。少し席を外せば、モードレッドが我が王に剣を見せようとして大惨事になったら

い。詳細は知らないが。

アグラヴェインが烈火の如く怒ったのはあれくらいではなからうか。怒られたモードレッドは大泣きして城に泣き声が響き渡っていたのは記憶に新しい。

今はもう反省しているが、相手は子供だ。何をしでかすかはわからない。

それが理由か、アグラヴェインは嘆く。

アホやバカの相手するのに我が王を派遣するだけ無駄なのは、と。

火急の用と聞いて行けば、ヨイシヨをして妾に自分の娘を——などというクソみたいな用事ばかり。呼び出すんじゃないとアグラヴェインが吠えるのも無理はない。

我が王の子が欲しい、妻になりたいのはわかるがもう少しやり方を考えろ。

「……なんでしよう。お前が言うな、ととても言いたいです」

「いちいち突っ込んでいたら身が持たんど。アルトリア、俺はもう行くからな。俺とじゃれたいなら仕事はキツチリこなしてからだ」

今日の執務はもう終わりましたが何か？

「……ガラフくん、今何時？」

「えつと……昼時前でしようか」

「嘘だろ。仕事増えてるはずなのに終わる時間は変わらないってどういうことだ」

無論、アグラヴェインには渡しておきました。非の打ち所がない内容だと褒められました。

というわけで我が王、同行いたします。

「んー。視察くらいだからまあ、いいか」

「その後、何事もなければモードレッド様とのお時間が作れます。夜は何も予定はありませんので」

「お。なら今日は星でも見るか。ガラフくん、誰かに遣いを出してモルゴースさんに伝達を。視察が終わり次第、モードレッドと星を見に行く」と

「はい」

「現地集合な。先に城下町に行ってくる」

「護衛は……」

「ん」

私を指差してくる我が王。

お任せあれ！ ねっちよりと我が王の背中を守りますぞ！

む。何だギャラハッド。そんなに顔を引き攣らせて。

「アーサー様、大丈夫ですか？」

「……フツ。もう諦めたよ。最近は赤い竜の力も使えるせいでエクスカリバーないとマジ押し倒されるんだ。油断したら一気に押されるんだぞ」

色々と対策を立ててるのに我が王に勝てないのは残念です。

三日に一回、手合わせをする条件の中に勝てばなんでも言う事を聞くが、負けたら我が王の私室に入室禁止。こんなルールを作ってから何度も剣を交えたが、未だに勝てない。

我が王の真の切り札を引き出せるように実力を伸ばしたが、未だにあれには勝てない。

エクスカリバーにはなんとか、といったところか。負けないようにはできるが、追いつめられる前に手段を変えるのが早い我が王の前ではほぼ無意味だ。

というか、我が王がまだ成長しているの恐ろしくてたまらない。ついでに濡れた。

「まあ、大丈夫だ。ガラフくんは伝達頼んだよ」

心配そうな顔をするギャラハッドはそのまま、私たちと別れる。母上の部屋に向かったのはわかった。

姉上殿がこちらに来る時には我が王の私室か、母上の部屋に泊まる。基本、モードレッドと共に過ごすようにしている。

そういえば、モードレッドが生まれた経緯は我が王がベデイヴィエールと旅をした時に違う姿に化けて夜這いをしかけて孕んだそうだ。

三人もの女に化けて襲い、我が王の男としてのプライドをズタズタにしたとも。畜生。それは私がやりたかったことなのに。

「じゃあ行くか。護衛は頼んだぞ。とうにかいい加減に離れろ」

お任せを。

我が王は王の装束を羽織る。袖には手は通さず、肩に乗せるように着ると円卓の騎士が集う部屋の壁に立て掛けている鈍らの儀礼剣を腰に帯刀する。

青い装束はやはり我が王に似合う。お忍びで出かける時の黒い装束もいいが、こちらは私の装束と似通っているからか、とても好きだ。

以前のものは女性の面を出し過ぎるから少しは控えろとのお達しにより、コルセット

で胸を締め付けるものに変えている。正直、胸が苦しくてしょうがない。

まあ、胸を強調するような装束のせいでクソ野郎が来ると考えたら我慢するしかあるまい。

我が王と二人きりの時はガンガン見せる感じで行ってる。

「アルトリア、例の計画はもう少して実行に移す。そろそろ心の準備をしてくれ」

それならばいつでも。私は我が王のもの。

我が王の剣であり、槍であり、盾でありますので。使い潰してくれて結構。

「そこまではするつもりはないが……まあ、死なないように。本番はその後、事を為した後が重要なんだからな」

うむ。場合によっては、あのランスロットや甥っ子たちとも《戦う必要》が出てくるのだ。

今、こちらの味方だと確定しているのはベデイヴィエールとマーリン。ギャラハッドにパーシヴァルもいずれは勧誘するとは言うが、甥っ子たちはどうするのだろうか。

「結果次第では俺は騎士王ではなく、魔王になる。あいつらの性格を考えれば魔王を討伐する勇者の方が似合っているだろう？ 失敗した場合、計画は一气におじやんになる」

ガウエインやガヘリスは我が王に付いて行くとは思いますが――。

「ベディくんは俺を知っている。マーリンも俺を真に王と認め、共に歩むと言ってくれた。

俺の真実を知っている人間ならいいが、それ以外だと大きなリスクを伴う。それに、お前がいてくれるだけで俺は心強いからな」

――。うむ。これが尊い、か――。

「だから俺達四人だけでやる事も考えて――ん？」

む？ どこからか声が聞こえる。この声はギヤラハッドか？

アーサーさまああああと轟いてきた。

「ガラフくん、あんなキャラだっけ？　なんかあつたのか？」

とりあえず折檻ですな。

「
　　」
「
　　」
「
　　」
　　？
　　？
　　？
　　？
　　？」

我が王、アグラヴェイン、ケイが同じ反応をしている。私も似たような反応だ。

ええええ……何が起きたのだこれは……。

自己満足祈祷番外編 「キャストリアがやってきた！」

ご機嫌なアルトリア。いつものように少し早い時間に起床し、彼女が愛する主を起こしに行く。

現代まで生き永らえ、現世の文化や文明に触れた彼女はお気に入りの歌を鼻歌で奏でながら足早に、それでいて静かにカルデアの廊下を歩く。

少し前までは主の部屋に近い位置、それも隣の部屋に配置されていたのだが、度重なる性的な悪戯によって主が罰を下し、今では少し歩かねばたどり着けないような距離を置かれた。

それでも彼女は挫けない。何故なら、彼女は主を愛しているからだ。

「おはようございます。我が王……フヒヒ」

罰もなんのその。懲りずに悪戯を繰り返すアルトリアの顔は見せられないほど歪んでいた。気の所為でなければ口の端から涎が見える。

よくよく見ると、部屋に入る際のドアがひしゃげているようにも見える。

薄暗い部屋、微かに聞こえる寝息。まだ寝ているらしい主に、どう悪戯しようかと手を妖しく動かしながら近付くと、気が付く。

——アレ。なんか我が王大きくなった？

アルトリアはよく朝這い、夜這いを仕掛けることがあるが、その際に我が王、主の寝床に潜り込む輩がいることは知っている。

娘であるモードレッド、形式上はマスターである彼女。故に、膨らみの大きさを見れば誰が潜っているかは大体予想はできる。

が。この大きさ、どれとも合致しないそれは大いに戸惑わせるもの。

とうか誰だコレ。といった感じでバサリと布団を捲る。

ぐあつとよくわからない呻き声を出すアルトリア。何故なら、主の布団に潜り込んでいた不届き者は自分によく似た人物であったから。更に、見たこともない自分が手と足を使って主の胸に抱き着いて幸せそうに寝ているのもある。

「……………よし。殺そう」

ぐいつと自分の愛用の武器である槍を構えるアルトリア。

——主、アーサーがキレる二秒前の出来事である。

「選定の杖?」

「いわば、選定の剣とは別種の儀礼武器みたいなものだ。似たようなのならマーリンの杖も選定の杖とも言える代物だ」

ズズズと熱いお茶を啜るアーサーさんはそう説明する。隣にはまたアルトリアさんに似たアルトリアさんが同じように至福。と言わんばかりに一緒にお茶を啜っているけど。

「アルトリアが王にならなかつた世界線の過程がこの子だ」

「アルトリア・キャスターとお呼びください。今後、よろしくお願いします」

今後……？ アルトリア・キャスターと名乗つたアルトリアさんは深々と頭を下げ
る。

「前にも言ったが、本来の世界線はセイバーがアーサー王であること。それ以外はソロ
モンの人理焼却の影響で生まれたものもあれば、俺の影響で生まれたアーサー王のIF
が存在しているわけだが」

「私は違う世界線で、魂だけになって彷徨う《相棒》に出会つて縁ができた結果、こちら
側の世界に来れたわけでした」

「その世界線のマーリンにはこの子の世話と鍛錬を任された」
「なのでよろしくです」

は、はあ。と思わずそんな返しになった。

うーん。皆が言つてるアルトリア特攻が遺憾なく発揮されてるよねこれ。アルトリ
ア・キャスターさんの様子を見ればなんとなくアーサーさんにただならぬ感情を抱いて

いるのはわかるし。

まあ、仲間が増えるならいいかな。正直、これからの戦いを考えると少しでも戦力は欲しいし、アーサーさんだけに負担を強いるのもダメだしね。

「つきましては、そのマスター殿にお願いがあります」

ズズイ、とアルトリア・キャスターさんが顔を近付けてくる。アルトリアさんそつくりだから綺麗な顔立ちをしているな、と感想が出てくる。

女神のアルトリアさん、乳上達と比べると幼い。多分、セイバーやオルタと同じくらいの年頃だろう。

「部屋の準備はしなくてもいいです。代わりに、アーサーと同じ部屋でお願いします」

「あ、あ、ん!？」

「アルトリア、ステイ」

返事をしたのが私じゃなくて縛られて正座させられているアルトリアさんだった。首からプラカードぶら下げて『私は懲りずに同じことを繰り返した痴女です』と書かれ

ている。

「我が王！ なりません！ なりませんぞ！ こんなのと一緒にいたら我が王の貞操が！」

刺さってる刺さってる。アルトリアさん、頭にでっかいブーメランが刺さってるよアルトリアさん。

「お前よりマシだよアホ。とりあえずマスターちゃん、部屋はゆつくりでいいから準備してくれ。積もる話もあるだろうからしばらくは俺の部屋に泊める」

「馬鹿な!？」

「やったー!」

対照的な二人。片や絶望、片や歓喜。二人の同じ顔がそれぞれ違う反応をしているのは見てて面白いな。

うん。わかった。でもいやらしいことはダメだからね。

「それはコイツに言ってくれ」

「早まらないでください我が王！」

「何をだよ」

「それいつもアルトリア同盟の一人！ ムツツリスケベの獅子王や見せたがりの黒いのか、こつそりと寝ている我が王にキスするセイバーとか我が王のコップで間接キスして真つ赤になるちつこい方の黒いのかと同じように我が王を性的に狙っているのです！」

えっ。

思わず食堂の一角に集まるセイバー以下、アルトリア同盟なる面々を見る。

セイバーは顔を真つ赤にし、オルタは顔を背けてわざとらしく咳をして（耳が真つ赤）、獅子王の乳上は大慌てで大声で弁解を始め、黒い乳上は誰が見せたがりだと叫んでいた。

うーん。カオス。

ちよつとまーぜてっ。

面白そうなので避難して愉悦組が集まるテーブルに行くことにする。誰もがニヤニヤと騒ぐアルトリア同盟を見ていた。

いつの間にやら四人が縛られているアルトリアさんの傍に寄って全員で蹴りを加えている。何をやる貴様らー！ と随分と余裕のある悲鳴を上げるアルトリアさんの様子から大丈夫だろうな、とアーサーさんと同じお茶を飲む。ぷはー。

「うーん。こんなだらしのない子持ちオッサンでもモテるもんだな」

「だってアーサーは魅力的ですから」

「嬉しいこと言ってくれるねー……つと、どう呼べばいいかね。アルトリアはアルトリア呼びで固定しているし、陛下も違うし」

「相棒が呼んでくれるなら、なんでもいいですよ」

「んー……アルトリア・キャスターなら……キャストリア、はどうだ」

「キャストリア、ですか。うん。相棒が呼んでくれるなら嬉しいです。これからはキャストリアと」

「よろしくな。キャストリア」

「はい。相棒……アーサー」

嬉しそうに微笑むアルトリア・キャスターこと、キャストリア。

その笑顔には、アーサーさんも少しタジタジの様子。あれ、珍しいな。

「つとと。キャストリア、魅了の魔術が漏れてる」

「あつ……ごめんなさい相棒。嬉しくってつい制御を間違えました」

「気にするな。今からでもしつかりと制御できればそれでいい」

「相棒……」

ねえ、兄貴。あれがメスの顔ってやつだよね。

「……なあマスター。もう少し女の子らしくできねえのか。平気で下ネタを話すし、俺らに混じって猥談はするわ……」

なんかもう、吹っ切れちゃった。

もう一度キャストリアを見ると、潤んだ瞳でアーサーさんを見ているのがわかる。うーん。やつぱりアーサーさんはスケコマシだね。

「我慢ならん!!!!!!」

ズゴシヤアと蹴っていたセイバー達を蹴散らしてアルトリアさんがこっちに来た。いつものハイパーロンゴミニアドの切っ先をメスの顔をしているキャストリアに向ける。

「我が王は私の夫だぞ！ 人の夫を寝取ろうとするならばこの槍で貴様を貫いてやる!!!」

「……えーつと」

「馬鹿は無視していいぞ」

「えつと、ごめんなさい。相手はできません」

ペコリと謝るキャストリア。その間に蹴散らされたアルトリア同盟の面々を介抱するアーサーさん。

すると、言い訳と言うか弁解をし始める四人。全員が顔を真っ赤にして違うからな！
みたいなことを繰り返しながらアーサーさんに説明していた。

性欲はあるけどガツガツいかなのは完全にアルトリアさんの影響なんだよね。たまにレイシフトして一発カマしたとアルトリアさんが自慢するのを聞けば嫌でもそう感じるよ。

おかげでなんかカルデアは性に関して緩くなってるし、ちよつとやそつとではエロいハプニングに遭遇しても何も感じなくなっちゃったよ。

歩く公然わいせつ物がいたらそうなるよね。しようがないししょうがない。

そしたら、今にも泣きそうな顔で兄貴、クー・フリーンやエミヤママが肩を叩いて慰めてきた。

エミヤからはお菓子ももらえたよ。わーい。

歩く公然わいせつ物といえ、アーサーさんの天敵のキアラはどうしたんだろ。こういう時は乱れて交じってヒヤツホイしようぜ（直球）とか言い出しそうなのに。

「ぐぬぬぬ……ならばー」

「？」

ババツと胸の谷間から何かを引っ張り出すアルトリアさん。手に握られているのは布切れのようだ。

キャストリアが首を傾げ、私も首を傾げる。食堂にいるサーヴァントの何人かが更に首を傾げる。何だろーうあれ。

「見よ！　これぞ至高の宝具たる我が王の汗が染み込んだタオルである！　トレーニングをしてたつぷり出た汗をこれが吸い取り、染み込んでる一品である！　貴様が私に勝てたのなら、これをやろう！」

ガタガタガタツと何人かが椅子から立ち上がる音が聞こえた。

音が聞こえた方を見る。まず目が合ったのは邪ンヌだった。目が合うと、ハツとした様子でなんでもない風を装って椅子に座りなおす。

なにもなかった体をしているけど、すごいソワソワしているのは丸わかりだよ邪ンヌ。超かわいい。

「なんでそんなモンをお前が持つてんだ」

「さあどうだ！　貴様も我が王を愛しているのであればこの勝負、逃げるわけにもいかないだろう！」

「聞けよオイ」

「——いいでしょう。その勝負、受けて立つ！」

「オイ待てキャストリア」

「タオルはいりませんが、私としてアーサーの相棒を名乗る者。相棒と並び立ち、戦う者と

しては力の証明はしなければなりません！ ……タオルはちよつと欲しいけど」

すごい小さい声でなんか言った気がするけど、聞こえなかった。

そこからはとんとん拍子でアルトリアさんVSキャストリアの流れになり、カルデアの食堂にいた何人かがトトカルチヨを始める始末。

うーん。取り合えずシミュレータールーム借りようか。

あ。クーの兄貴。私はキャストリアに賭けるよ。

いやー。決闘は大盛り上がりだったよ。

ホクホク顔で大満足。キャストリアがまさかのアルトリアさんに勝利で大儲け大儲け。

アーサーさん曰く、俺の持つ剣は全部あげたから使い方をマスターしたらそりやアルトリア並よ。だそうだ。

何やってんのアーサーさん。前に魂になった時に剣の宝具のとしてのランクが軒並み上がったって言ってなかった？ そんなものをあげて何をしてるの？

“マルミアドワーズとか使いにくかったからあげたらめっちゃ喜んでたからつい”

つい、であげるもんでもないでしょうに。

キャストリアの戦い方は単純。剣を触媒にして魔術を行使すること。

アーサーさんの剣だから触媒としては最高峰のもの。故に、大魔術やキャストラーの面々が唸るほどの魔術を操ってアルトリアさんを倒していた。

“で、あとはエクスカリバーとかクラレント持てば間違いない文句なしのグラントクスラの仲間入りはするだろうな。俺もグラントセイバーの看板を下ろす時かもな。はっはっは”

結論としては、超下級の新人だったキャストリア。

アルトリアさんは負けて引きこもっちゃったし、勝者のキャストリアはアーサーさんとルンロンと部屋に戻ったし。

少し今後の関係が心配だけど、問題は別にある。

アーサーさんとのアルトリアがくつつくかの賭けにとんでもないダークホースが現れたことである!!

あ。私はセイバーだよ。正統派って感じで、元主従の関係としてはくつついてほしいよね。

多分、レートとか変動しているんだろうな。あとで確認しとこ。

アーサーさんの部屋の前を通り過ぎる前、ちよつと挨拶をしていこうかなといつも開けっ放しにしているドアを開けて驚かせながら入ろうとしたら。

「
」
「
」
「
」

時が固まる音が聞こえた。

部屋に入れば、キスし合ってるキャストリアとアーサーさんが。しかも私が入ってきたからか、キスしたまま固まっている。

うーん。あー。うん。

ゴムだけは忘れないようにね！ キャストリア！

——顔を真っ赤にしたキャストリアと鬼ごっこが始まるまで三秒。

ちなみにキスしたのはご褒美らしい。いきなりされたからアーサーさんも反応できなかつたんだって。

後日、アルトリアさんが闇落ちして特異点を生み出すのは余談だよ！